

川柳塔

昭和六十年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六九六号



日川協加盟

No. 696

五月号

西尾 栞 喜寿・金婚

句碑建立五周年記念川柳大会

日 時 昭和60年 9 月29日(日) 午前10時開場

会 場 新阪急ホテル 2階 紫の間

大阪市北区芝田1丁目1-35 TEL 06 (372) 5101

☐ 祝 辞……………日本川柳協会理事長 藤島 茶六 氏

☐ おはなし……………川柳塔社相談役 東野 大八 氏

☐ 題と選者(各題2句 ●締切12時 ●欠席投句拝辞)

「ロ マ ン」 八 木 千 代 選

「祝 杯」 橘 高 薫 風 選

「空 気」 寺 尾 俊 平 選

「思 い 出」 小松原 爽介 選

「小 説」 渡 辺 蓮 夫 選

「先 祖」 去来川 巨城 選

「太 陽」 礒野 いさむ 選

事前投句 「情 熱」 西 尾 栞 謝 選

事前投句はハガキに2句・締切=8月31日

(宛先) 〒545 大阪市阿倍野区三好町2-10-16

ウエムラ第2ビル 川 柳 塔 社

☐ 会 費 5,000円(祝宴共)

☐ 祝 宴(同会場にて午後5時~8時の予定)

主 催 川 柳 塔 社

母の日

西尾 栗

五月の第二日曜日は母の日である。この行事は御存知の通り、米国のメソジスト教会の一女性から始まったのであるが日本では、最初三月六日の地久節、皇后誕生日を母の日と決めた。それが何時の間にか消えてしまつて、五月の第二日曜日に定着した。

母という言葉は幾歳になつても、やさしいなつかしい言葉である。母の憶い出を語るとき、ついつい涙ぐんだり、声がつまつたりするものである。この齡になつても、もっと親孝行をしておけばよかったと、夜半の寢覚めに思ふことがある。この間、「母の詩」という本を買つて倦かず読んでゐる。

母 国

お母さん

どうして父国といわないで
母国というの

どうして父国語と言わないで
母国語っていうの

どうして父校と言わないで
母校というの

どうして父船と言わないで
母船って言うの

お母さんばかりみたい

太陽のように

母という字は

上から下から

左から右から

表から裏からみても

同じかつこうをしている

母は太陽のように

かげひなたいもんな

岸本水府に母百句という句集がある。

無断転載をゆるしてもらう。その序に

「労苦と戦いつつ私を劬りぬいた母遂に逝く。天寿八十三、連夜せめてもの作句に、遠い昔から今に至る母の追憶に耽る。あまりにも痛ましく、胸せまり涙おのづから下る（昭和十四年二月）」

辿りつくように二階へ母がくる 水府

もう叱らなくなった母淋しすぎ //

立つてゆく母に懷炉が沁り落ち //

私の母の口癖は「阿呆になつときや」

と、言いたいことがあつたら明日言いはれや」といふのであつた。

阿呆になつときなはれという母があり

張り替えた障子の中に母が居る

手提袋持たず寝棺に又哭きぬ //

栗 //

座右の句

捨て猫がじいわりと来る冬の月

(紫 香)

私の句

終点の点滅へ今日しかと生き

柿 花 紀美女

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

母の日

西 尾 葉 … (1)

八

橘 高 薫 風 … (2)

川柳塔 (同人吟)

西 尾 葉 選 … (4)

自選集

東 野 大 八 … (31)

■ 川柳太平記 (84) 川柳の群像 須崎豆秋

東 野 大 八 … (34)

■ 連載 誹風柳多留廿六篇研究 (二十丁)

阿 達 義 雄 … (36)

上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」(8)

阿 達 義 雄 … (38)

水煙抄

黒川紫香選 … (40)

秀句鑑賞

同人吟

本 田 恵 二 朗 … (57)

水煙抄

藤 井 一 二 三 … (61)

愛染帖

橘 高 薫 風 選 … (58)

八

橘 高 薫 風

河内天笑さんの主宰する堺川柳会では、二月例会を、菊沢小松園一周忌句会として故人を偲ぶ催しをされた。当夜は、スミ子夫人も出席され、新谷笑痴さん秘蔵の、小松園氏揮毫の屏風や色紙を展示し、敬愛された人柄を思い出すにふさわしく、席上、来年の三回忌までに「小松園遺句集」の発刊の提案が出るほどの雰囲気であった。

また、三月二十一日のお彼岸の中日には、今度は八木摩太郎七回忌句会を催し、堺川柳会の創設者の遺徳を偲ぶ心の敦さを示された。堺番傘からも、会長の梶川雄次郎氏をはじめ、故人とは古いお付き合ひだった西村左久良氏ら十五名の参加を得て、盛大にして頂き、西尾葉主幹の「長老」の選でしめくることが出来たので、地下の摩太郎・徳女ご夫妻も、堺川柳会の健在にさぞかし安堵されたことであろう。

殊にうれしかったのは、岡山県からはるばる土居耕花さんが来会して下さったことで、予期しなかったこととて、天笑さんの喜びようはなかった。それは、摩太郎夫妻の喜びであつたろう。耕花さんは、日露戦争の水師管

藤井明朗自選百句		(62)
川口弘生自選百句		(64)
金聖嘆の詩観		(66)
山頭火とポーと啄木 (3)		(69)
「硝子」		(70)
一路集「新人」		(70)
「重い」		(71)
初歩教室		(72)
柳界展望		(74)
本社四月句会		(76)
各地柳壇 (佳句地10選 / 小出智子選)		(81)
川柳塔社物故同人 (4)		(75)
編集後記		(95)
薫風・鬼遊・史好		(95)

座右の句

てつちりや路郎門下の生き残り

私の句

いつからか夫婦茶碗がつやつやし

(葉)

玉井豊太

の將軍会見の場の、かの「庭に一本棗の木」の種が、二本の苗木に育ち、そのうちの一本が、耕花居から麻生路郎居を経て、摩天郎居の庭に根付くまでのエピソードを話された。私は、兼題「八」の選を担当した。天笑という男、中々に味なことをすると感じたのは実は、私は昭和五十一年十一月二十四日の摩天郎・徳女金婚祝賀川柳大会で、やはり、兼題「八」の選をしていたからである。九年前の作品は、

(人) 病んでなお八方睨みの型を崩さず 小松園

(地) 八方美人ひとりて帰り月あおく 一舟

(天) 父の忌を偲ぶ八角時計鳴る 鬼遊

そして、今度の三才は、

(人) 嘘つきの男にさせる八重桜 重比古

(地) 玩具の汽車疲れて8の字に走る 作二郎

(天) 八月の事は漫画の本にない 耕花

私は、天位の句の呼名を聞いて驚いた。七十八歳の耕花さんだったのである。原爆忌にしろ、敗戦忌にしろ、八月の暗い日本の過去を若々しく力強く把握しておられる。

川柳は、静かに次第に変わりつつある。また流動変化して行かなければならない。選者として顧みて悔いなきか、恥なきかを反省したことである。

川柳塔

西尾 栗 選

松原市 谷 垣 史 好

春ざわざわ一級河川まだ眠り

そういえば筑波はどこにあるのかな

一時です窓口開ける妻楊枝

虫を鳴く江戸家猫八父を哭く

すべて皆夢でありしか かすみ草

死なば今 桃色吐息聞きながら

桜井市 岩 本 雀 踊 子

歩道橋都会は不便なところなり

ブライドがあるので損をする男

出来の良い夫と思わぬ米櫃よ

猛犬に御注意女戸主とある

浮気でもして見なはれと桜咲く

石器時代に戻る予言をしてみよう

竹原市 森 井 菁 居

公立もパスして本当の春がくる

友達も合格をした長電話

光陰よ妻より高い娘がまぶし

春の陽に取り越し苦勞を喰われる

へそくりは出来ぬ中高大が居る

近畿郵政局奈良局へ管外出張

旅三日鞆をさげてみたくなる

八尾市 高 杉 鬼 遊

春の冷え首すじ寒きいのちかな

酔い痴れてこの世を捨てたわけでなし

足を知る厚生年金通知書

いい返事して実印の迷うなり

老いが老い見舞うて何のなぐさめに

妻と来て五月の画廊茶のうまし

富田林市 岩 田 美 代

伴せのひとつに嫁に愛される

桃の花内緒話がよく似合う

淋しくはないので開かぬ玉手箱
そう言えば雛の眉にもある愁い
大丈夫そんなおざなり聞きとつない
感情を押える一日梅の白

大阪市 津守柳伸

五月晴れひとりばつちの縄電車
春財布五円の愛に身をまかす
五月雨を縫う指抜きは亡母の指
菜の花の一輪だけが氣を揉ます
ぬるま湯を嫌う女の自閉症
良識を信じてぬくい風の中

大阪市 西出楓楽

神様に憎まれているかも知れず
逃げたくて一般論で答えとく
風みどりおしゃれはもめんに限るべし
他愛ない話の好きなアップルティー
五月晴れ心のチャンネル切替える
実像と虚像の別ない雑兵で

和歌山市 西山幸

手始めに髪でも染めてみましょうか
鏡の中のわたしに何を問いつめる
影法師あなたも齡をとりました
ファックスで胸ののやもや送ろうか
貧しくてすぐに値札を見てしまふ
自販機も春へときどき拗ねている

大阪市 中川滋雀

地に還るまでは約束ばかりする
ポックリと逝かはった負けたなと思う
まじないもまたよし傷口埋まるなら
春朧ろ月の砂漠の散歩道
ネジ一つ欠けたファイトを締めなおし
割箸になる年輪は考えぬ

堺市 高橋千万子

合格の子と出る街の春の風
掘り下げて聞けば受けうりだと逃げる
顔で泣く女と肚でなく男
身なりから探る女の久しぶり
期待した返事がこわい金のこと
追い越した車も十字路までのこと

岡山市 土居耕花

精虫の頃の記憶はありません
パチンコの有る地獄なら行ってもよい
空砲を撃つ老妻は叱られぬ
恐妻のポケットベルはいつも鳴る
舌出した女が傷の奥に居る
山売った父の喇叭はもう鳴らぬ

西条市 片上明水

北の窓悲しい話ばかり聞く
三角の中で器用に輪をつくる
定年後夫婦で好きな花の店
鏡台のまわりのものが減って老い
後ろから覗けばこわくない仁王

借金のない定年でよしとする

綾瀬市 大山と金

わが顔を五百羅漢に見つけたり

豪雪で折れた桜の花盛り

あまい汁吸われたあとの役につき

他所者は仲間外れの鄙気質

年齢を多くごまかすこともあり

あのときがチャンスだったとあごを撫で

出雲市 原 独仙

春霞お達者倶楽部球と和し

その昔貧農搾取の門朽ちる

嗜好物も神経質も隔遺伝

ご推察に任せますわと注ぎこぼし

淡雪の如き恋なら止し給え

再婚は出雲大社へ世話かけず

八尾市 宮西弥生

男も女も独身ばかり朧月

耐ハイを囲むとはなし堕ちてくる

占いがあなたもわたしも末は吉

早起きをしてもうろうろうろと

おだやかに齢をとりましょう花時計

もう水に流そう合掌のある限り

奈良市 宮口笛生

ワテンポおくれて律義さを保つ

六十を越えてるひがみかも知れぬ

コーヒーで軽い別れの午後の街

十五度の予報つくし見いつけた

悪童が千鳥に飛んだ春小川

一人乗る雪の足跡無人駅

大阪市 川口弘生

安全牌と本人だけが知っている

地下鉄の階段で知る足の古い

優しさに惚れて富から遠ざかる

皆とでも赤信号は渡れない

鰯だと覚り群から離れない

マドンナが居って楽しい飲仲間

米子市 野坂なみ

むらさきへ万葉がなの墨匂う

もう一人の私へ話す自慢です

逃げ水は矢張り母の懐へ

振り向くと続く分身いとおしい

憧れるもの未だあって老いたしか

老化徐々にがい葉は大切に

兵庫県 遠山可住

よい国に生れて春がまた巡り

いまここで生きるお金を出しそびれ

貧乏のおかげか知れぬ仲の良さ

長靴に穴があいてた春の雨

いつからか止り木持っている夫婦

グリコ犯の講演切符を買っておこう

兵庫県 辻文平

耕した土が遺言を抱いている

どの罪も女が抱いている演技
終章へ女房の笛が鳴り止まぬ
相槌を打ちそこなつた針の道
パソコンのそばに転がる薬瓶
喧嘩する内は歩幅が合っている

尼崎市 春城年代

かと言つてやさしい鬼になれますか
水たまり一氣に越えるにもリズム
抽斗を疑つたりはしないよう
頃合の距離で平和の鐘を聞く
そして尚噂はうわさ呼ぶ五月
耐えることばかりだったと鯨尺

島根県 堀江芳子

掌に触れて楽しむ夫よ嘘つきよ
妻だからまるく納める嘘もつく
ひとり言からも春くる雨の音
ここからは言えぬ静かに抱くロマン
愛満れていません手繰る老いの糸
見えぬせいばかりではない一徹さ

松原市 玉置重人

大阪城たこ焼いか焼みんな春
集印帳ぐらいで軽くならぬ罪
諍いの種は持つてる老夫婦
港の灯見えて古傷痛みだす
無精卵妻も私も街育ち
沈丁花私の鼻はアレルギー

和歌山市 神平狂虎
僕の瞳の中を泳いでくるあなた
ポケットの昨日の風は追い出そう
夕陽落つ言い訳ばかりまだ続く
成り行きにまかせてしまふ蝶の恋
引き金が男の胸で錆びてゆく
喜劇まだ終らず妻は葱刻む

京都市 松川杜的

無視された人にも頭下げておく
酒やよしそれからの交遊未だ続く
ニホンでよしニッポンでもよし日本語
年寄りを一番えらい人にして平和
捨てる事に快感がある女癖
光背の後ろは仏も荒削り

伊丹市 樫谷寿馬

紅梅の夢白梅のごとく古い
新しい話題好まぬ車井戸
牛買いと牛は眼と目で妥協せず
から咳をすると鳴り出すオルゴール
或る日一片の紙屑となる男
借用書友を失う証かも

岸和田市 福浦勝晴

税金をすばすばグイグイ吸って飲み
脱税病医者も坊主も弁護士も
愛終わるモーテルの窓から見える城
狂態と隣り合わせの部屋で寝る

赴任して愛の絆も断ち切ろう

パチンコで勝った負けたは高が知れ

和歌山市 垂井千寿子

白梅と紅梅順を乱さない

重ね着がやつと気付いた露の臺

暖房の部屋で金魚にある驕り

親の敷くレールに乗らぬ子が出世

ショウウィンドー見るだけで開く自動ドア

中流の意識がバスにつまってる

豊中市 田中正坊

覚えていますかあの時のあの科白

土の上踏むことはない銀の靴

沈黙が鉛となった日の誤算

亡妻の話し書いて一日鬱でいる

名画回顧(二句)

ボワイエが夜霧に消えていくシーン

コートから雫したたるジャンギャバン

寝屋川市 稲葉冬葉

そんなことない話にも妬けてくる

野良犬に好かれて困るマルチーズ

傷だらけになって大人の物語

性懲りもなく妻の座にあこがれる

じゃんけんが強くて仲間から逃げる

記憶はけ早いテンポでやってくる

自由席旅はいくさで始まりぬ

竹原市 小島蘭幸

旅に出て妻はやさしいなと思う

本物のパンダをアルバムに貼ろう

デイズニールランド トイレも長い列続く

充電の旅子を抱いて傘さして

旅の終りのビール一本呑み干しぬ

倉敷市 小野克枝

人生は加減乗除のからみ合い

こんなにも深い情けの竹である

女です運転席は嫌いです

すれすれで合格した者落ちた者

鈍行の夫婦で画く小さい夢

笑わせて深い眠りにつくピエロ

吹田市 西川景子

胸のすぐ女傑同士というはなし

十字架の痛みも秘めている女傑

ピンチにも女傑の乳房動かない

鈴の音のやさしさ怖さ知る女傑

子供への涙は惜しまない女傑

町内の女傑で頼もしく笑う

米子市 林瑞枝

続編を迷うことなく願書書く

赤を着る自信の毬で弾まねば

芒野に佇つと詩人になれますか

懷中に眠る鬼にも耳はある

宴果ててもピエロの面がはずれない

大阪市 岡田ふみ

陶器市今から留守番予約され

好物も趣味も違つて五十年

気にかかる存在若い未亡人

冬のごキブリあえなく私の手にかかり

富士山の裾野で撃ち合いすれば良い

劇中の嬰兒は都合良く眠る

藤井寺市 児島与呂志

たくましい話を聞いてるうれしい目

いい話いいことだけを持ちつづけ

他人から今更嫌われる歳か

凡人の悲しさ友を又捨てる

都合良い事に馴れると愚痴が出る

うつくしい笑いが残っている母と子と

八尾市 内海幸生

貝になる他に術が無い娘が嫁ぐ

貝でいる父へあれも要るこれも要る

親友は呑むかと言つて呉れただけ

そんなええ株なら株屋が買いなはれ

飛んだ唾静かに拭いて遮られ

その先はともかく青い空を吸う

島根県 堀江正朗

ちぎれ雲臉のなかの陽なたはこ

白い杖清めて春へ身構える

想像のできる話題へ膝をよせ

その理屈茶碗の丸さに訓される

ひよろついで足も裏切り者になる
頼られる重みも幸と思う背な

大阪市 長谷川春蘭

小豆煮る母の予感が的中し

一本の輪ゴムに託す安堵感

一枚の瓦寄進で気をなごみ

園児の手摘み草一杯夢一杯

休日を中流らしく見せたがり

自慢した子等に積木を崩される

大阪市 江城修史

妥協する握手温みは消えていた

親ばなれ子ばなれこの世は生きにくい

精一ばい終着駅のない暮し

青い鳥探し疲れたセールスマン

セールスへ街寒々と乾き切る

大阪市 天正千梢

むなしさを捨てる同行二人の杖をつき

弱気がさせる先ず上げておくアドバルン

未練残してさかずきふせておく

垢のついた人生ゲーテ語りかけ

いらいらの連続コインロッカーに救われる

大阪市 河井庸佑

気くばりが欠けてぎすぎすした職場

ニューメディア固い頭が乗り遅れ

雑草の根性に習う処世術

デメリット多いプランだが切れず

一石を投じて波紋じつと見る

大阪市 黒田 真砂

口だけは達者五歳の反抗期

待ちわびた便り届いた春の雪

口さがない噂のうずにゆれて居る

愛の深さ確かめ合つて口げんか

表札もひっそり日陰の女文字

大阪市 西森 花村

幸せと又行き違つた京言葉

乳の出る餌を嫁にも食べさせる

長生きをしてれば走る新幹線

クイズ番組育児は男にまかしとき

春の海誰かの声が沖でする

大阪市 神夏磯 道子

春の香が欲しくて窓を少し開け

どの花を描こうか迷う春の筆

れんげ草お囁話になりかけた

何事も自分を知っている手頃

連れ添うてとうとう空気にされちゃつた

大阪市 藤田 頂留子

四月馬鹿相手は二枚も上やつた

踏まえてはいても子故の闇をゆく

じらすふりするも柳と風のなか

競馬新聞車内に残す真面目パパ

遠ざかる大正昭和ももう六十路

大阪市 柳原 静香

旅プラン孫の入試も済みました

合格へ孫の背中に羽根が生え

あんま機があるのに夫の手に甘え

猫のめし夫のことをつい忘れ

出世はせぬが紺の背広がよく似合い

大阪市 欄 蘭

アベックの地味な服装が女

平日もお子様ランチ旗を立て

卵まで馬鹿にされそう目玉焼き

ペンタコも消えて佗しき粗大ゴミ

人生の墓場を祝う披露宴

大阪市 本間 満津子

絶望はしない明日の糧として

カタカナと早口憎し耳学問

難聴に聞えぬ音が見えてくる

医者探し試食するようにはいかぬ

本物の自信ちいさな光る石

松江市 舟木 与根一

啓蟄やこたつを抜けて出るとする

神経痛ひと雨ごとに楽になり

姥桜胸のあたりに咲いている

メートル法の地価で二度びっくりし

晩成を信じていまも毬をつく

松江市 恒松 町紅

寝たきりでいて衰えぬ読書欲

ワープロで思いのだけは届かない

先生の背筋がゆるむ三学期
金持ちになれぬ弱気な葱坊主
春めいた庫裡でカラオケ鳴っている

松江市

柳 楽 鶴 丸

風のうたに踊る角風奴風

夫唱婦随婦唱夫随で二十五年

僕を帯にもたすきにもして使う妻

雪女が美人だったかどうかしよう

カクテルの色にだまされてやろう

松江市

小 林 孤 呂 二

尊敬は壱万円札ではない福翁

行政のひずみへ鮓が浮いている

おふくろの味で血圧たかくする

権兵衛にも春たねまきの種を選ぶ

さくら満開ただただ願う安楽死

島根県

大 屋 秋 峰

お茶碗が欠けても夫婦よく笑い

人生の余白を飾る彩を選ぶ

衣食足る何か貧しいものがある

軍備論入歯の声が届かない

セールのネクタイ綺麗な低姿勢

島根県

松 本 文 子

逢いにいく心の錆を落したく

漢方薬効いたと思うは高価故

甘い言葉聞けばほろりとする親で

花便り届かぬ亡父よ亡妹よ

離れられぬ他人程度の夫婦仲

島根県

木 村 は じ め

良いチャンスあった日もありサンマ焼く

昇給の辞令は妻の手に乗せる

最高の倅せ妻の盛る夕餉

知っていて言わぬ女房が恐くなる

振り返る人生スリッパ半端もの

島根県

藤 原 鈴 江

四面楚歌たったひとつの針の穴

愛ひとつ嚙りついたたり転んだり

頭蓋骨こつとう品の音をたて

叩いても蹴つてもわたしが痛い石

理想論結局何にも手をつけず

島根県

松 本 は る み

風が哭く針葉樹林のオクターブ

ワンカップ無駄な命と太陽と

便箋をひろげたままの肘まくら

軒下で罪をつぐなう千太根

草の実のはじける春をうたがわぬ

島根県

小 砂 白 汀

無償の愛突如別居の刑に会い

重心がだんだん下りどっこいしょ

滴りて露満月を妊りぬ

焙られたうえに背骨まで抜かれ

元栓を閉めたを忘れていたのを忘れ

島根県

石 田 清 泉

健康器揃えあんまにも通い

春一番明るいニュース持つて来い

戦争は嫌い基地だけ貸すとする

短足と二人三脚八合目

九十七酸素吸入でもつ余命

島根県 榊 原 秀 子

白鳥の旅立ち待たす戻り寒

虚と実のはざまで迷う奴唄

卑怯かも意見は棚に上げておく

あけすけに話してストレスふつ切れた

会葬者のなかに恩師の小さい肩

島根県 錦 織 文 子

薬を着て耐えてる牡丹も風物詩

初釜の音色へなごむ老いふたり

ニューリーダー旗揚げて立つ時の人

初春へ女の暦確かめる

一錠へ今日を生きたい寒の水

米子市 青 戸 田 鶴

雛の夜五人囃も酔ってくる

山の春こぶしは自慢などしない

しあわせな暦はいつも逃げてゆく

赤いブラウス六十少しはなやぎぬ

やがて紫に山も私も暮れてゆく

米子市 小 西 雄 々

男性の化粧を否定などしない

社交術こころえ外れた矢を拾う

死に神へ飲めば供養になるという

飲む人が飲めなくなつた鎮魂歌

反骨をつらぬく爪が伸びてくる

米子市 寺 沢 みどり

紫蘇酒のまるみよ母はもういない

胎動がちいさな主張くり返す

控え目な母に自慢の孫の数

垂直な話のすきな掛時計

一枚の葉書を抱いて風に佇つ

米子市 田 中 亜 弥

縄電車に乗ったばかりに逃げ切れぬ

雑草の生きざまに似て強くなる

風が吹く時には父母の声に似て

恩返す鶴の話にひかされる

空白の日記しみじみ考える

米子市 菅 井 とも子

旅話まとまり春も動き出す

一病をもらい二人の歩が揃い

あの人を乗せてあげたい白い牛

眠るだけに帰る夫で平和です

口出しはせずに蜜柑の皮をむく

米子市 政 岡 日枝子

無意識に暦をめくる日もあって

片道の切符どちらが先に買う

フルムーン満期が来たら行きましょか

楽屋では別のピエロがよく動き

白痴美はあなたのことよ水中花

米子市

林

荒介

散る刻も22んが4と桃の花

ぐうちよきばあ拳の中天邪鬼

鉛筆につまずいて老いたなと思う

日溜りの坂にベンチがひとつある

夜中にはきつと仁王も眠るだろう

米子市

石垣花子

傷を持つ同士でのぼる男坂

円くなるまでに夫婦の長い坂

上り坂義理も人情も置き忘れ

下り坂二人三脚もめはじめ

坂道で兎を抜いた亀の意地

和歌山市

細川稚代

こぶしまだかたく蓄の戻り寒

本音ばかり少し馬鹿にみえて来る

ライバルがそつと手の内覗かせる

酔うて寝る片意地張った顔でなし

紺紺私の晴着だった頃

和歌山市

内芝登志代

煙草屋の娘からたばこ買いたいな

明治には無駄な出費という娯楽

のみこんだ涙をこやしにして男

珍しい名前で損もし得もする

満点の子供でなくて親思い

和歌山市

福本英子

やわらかい春を食べてるにぎりめし

誤字脱字大目に見よう春日記

のたりのたり淡路島のテトラポット

添寝する老母の布団が凹んでる

往く道を老母の仕種に教えられ

和歌山市

堀端三男

亡母の居る島まで届け流し雛

お誘いが同時にかかる花便り

結末が読めたところで立つトイレ

グイヤ改正故郷今日から無人駅

見下す気かと履かしてくれぬハイヒール

和歌山市

後藤正子

門限を破る電話が鳴っている

親ばなれ子離れ淋しい月の暈

促成栽培さびしい顔が増えてる

何もかも忘れてキャベツ刻んでる

金糸卵ふんわりやんわり自己主張

和歌山市

若宮武雄

ほどほどに泣いて笑うていい暮し

正論の味方はすぐに集らぬ

争いに力を貸さぬのも男

まる顔にしっくりしない鬼の面

防衛費もし無かりせば無かりせば

和歌山市

福井桂香

たわむれのページ許さぬシャボン玉

ロゼ開けてひとりワインの色に酔い

忘れない人を酔うほどに飲む程に
花影に別れのドラマ生まれまします
花吹雪常楽我浄と咲きおおせ

和歌山市

松原寿子

愛の降る街へ翺びたつ春の蝶
殺し文句へ胸の泉があふれ出す
受話器から情の橋を賭けてくれ
なお慕い淀の棘は容赦なく
新緑へ女の折り目くずれそう

鳥取市

小林由多香

三分赤の二月を残業す
ひな祭父さんだけが男です
根負けをした保険料掛捨て
千円で定価五円の古書を買う
仏にもすがり漢薬にもすがり

鳥取市

林露杖

白酒の酔いが本音をふと洩らし
配転に単身赴任という付録
花一杯抱いてみたかろ飾り壺
カルテ書く医者横顔凝視する
次々の病氣試練と謂うべきか

鳥取県

川崎秋女

厨には母の辞典が置いてある
電柱も芽を吹きたかろ春だもの
単身赴任畳一帖広すぎる
飲んでます酔うております哀しゅうて

満開の花だよ明日は考えぬ

鳥取県

金川満春

幸せの春の風なら窓開ける
故里に山紫水明まだあった
ほどほどの温さで冬の祖母の部屋
タイヤ改正国鉄矢張り大安日
手をつなぐそれだけでよし老いの愛

鳥根県

西村早苗

飲むための小さな嘘は背を向けて
一坪の庭ささやかな四季移り
一日の旅は阿呆になっておく
誤字のある絵馬も神さま聞きとどけ
ネックレス変えて土曜日デートです

鳥取市

森田熊生

わらべ唄花うらないは吉とでる
みそ汁の香りが好きな朝の靴
金少したまって欲が顔を出す
転職を考えている春の靴
何もない一日感謝忘れてた

鳥取県

中原諷人

羊水に抱かれて母のおぼしめし
倅せをつかむ吹き流しのうねり
親切な風がフォルテの音を鳴らす
手鏡の裏に呪文は描きません
仁術を信じ永久歯と呼ぼう

唐津市

仁部四郎

糸屑を取ってもらつて始まつた

断層を女子プロレスが埋めてくれ

背景はこどもの嘘にもあるのです

創刊の雑誌地球を売るつもり

決断の鈍い男のカットバン

唐津市 田口虹汀

母さんが鬼で父さん探してる

草萌える父の墓標の長い影

ネクタイを解けば素顔の父になる

ボケ初めた脳のプラグを替えてみる

欲の無い素顔が茶筌持つている

唐津市 久保正敏

こっそりと逢う靴だから磨かない

素晴らしい中身を持つていて無口

たそがれの妻の謀叛をあなどれぬ

ブライドを捨てるとなのおろノイローゼ

交番に紛矢届の出せぬ恋

唐津市 浜本義美

職人の気骨が明日のパンを捨て

確率は漁師の肌が知る天気

温室の育ちで翔べぬ蝶がいる

庭のない人も立ち寄る植木市

芹摘んだ土堤はもうないアスファルト

唐津市 浜本久仁於

落人の里か溪谷深くなり

民謡になつて世に出る隠れ里

末裔がうたう正調木樵唄

旅人のこころ安まる粗朶燃える

梅便りあたごまつりの風に聞く

岸和田市 原さよ子

スカートは正方形というヒップ

テレビかけて内職の手は確かです

足の怪我以来私の自閉症

嫁達にあまえっぱなしの怪我をする

歩けない足へしきりと花便り

岸和田市 清野こう

娘の家をたずねる母の荷が嵩む

北帰行始まる鶴の長い旅

風花に想いを駆せる北の春

よく吠える犬へ耐えてる両隣

つわりの娘戻れば婿まで転げ込み

岸和田市 島崎富志子

ボランティアの熱意登山の障害児

髪を切る少うし自分を変えたくて

言い勝つて見てもと相手に持たす花

たよりない私をたよる人がいる

一笑にされる悩みもひろてくる

岸和田市 古野ひで

何時までも元気でいたい散歩道

春うらら軒端の雀私語しきり

目鼻口なくとも温い紙の雛

傷心へ花は魔術師安らぎぬ

褒め言葉ひとつで少し自信湧き

東大阪市

崎山美子

中流を意識して書くアンケート

ジリ貧の原因をさぐるアンケート

成人病の影が気になるＬサイズ

タイミングが少しずれてるお人良し

金星の息の乱れを聞くマイク

東大阪市

斉藤三十四

社長室昼はソバ定とのメモ

新入社横一列のレースなり

無人駅それで運賃下るなら

集まっただけで悪者にされている

古希の虎白内障へ歩を縮め

東大阪市

森下愛論

伝言板待ちくたびれた文字のあと

さいならと真直ぐ帰る野暮な酒

生きているなと遅い朝を起き

古稀までも続ける今のままの幸

風邪引きも順番になる大世帯

西宮市

杉浦婦美子

脇役に味方が少しいてくれる

招待券二枚を焼いて想い断つ

蒲焼の匂いをにらみ目刺し買う

好きなもののお金と決めてから孤独

素うどんの湯気のまわりは隙だらけ

西宮市

朝山千世子

春風が運ぶ良縁足軽く（仲人十六人目）

雛の軸内孫みんな男の子

新学期曾孫の服にミシン踏む

パンジーだけが余寒に耐えて花咲かせ

春陽浴びて老いの楽しみ花造り

西宮市

草刈墮駄

量子論銀河の一つの端に住み

縄文の陽が東から昇ってる

ニュートンは落ちた林檎を食べました

抱かれて抱きしめている蓮の上

吼えてみる鏡の中の泣いた顔

西宮市

林はつ枝

真向かいの敵にジョークが通じない

酔生夢死春はなおさら眠くなる

一つずつ母の小骨が奪われる

限りある時を飾ろう灯を高く

神さまが遺跡へ置いた昼の月

西宮市

野呂鶴汀

この路地の梅が見頃で通り抜け

二度目なら過ちなどと言うなけれ

シャッターへ他人も写る遊園地

仕事ある人を羨む日向ぼこ

連休の昼寝で夜を読み明かす

西宮市

奥田みつ子

森の夢お菓子の家が見つからぬ

一期一会みんな友達みな他人

盛装の他人行儀な声となり
百度石白梅だけにはげまされ
三月の風税金の匂いする

西宮市 藤村 宏子

花言葉信じて植えた花壇です
招待券に恋もこっそりついてきた
笑い袋いたずら電話撃退に
丸く掃く春の日ざしが怪訝そう
菜種梅雨バステルカラーのスカーフに

寝屋川市 岸野 あやめ

椅子蹴つて来たとは妻の知らぬこと
椅子曰く奥さん体操などいかが
クラス会眩しいようなひととも来る
中国の養父は襤褸で涙拭く
世渡りの下手な男の数え唄

寝屋川市 堀江 光子

一通り揃うた顔へ熱いお茶
ドア開けて風と一緒に客が来る
酒瓶の口を締めたか見に起きる
それ以来ネクタイ買わぬUターン
テレビ欄何というても平和の世

寝屋川市 柴田 英壬子

主人発病
造影検査まで漕ぎつけた個室
裕次郎の名で病状を示される
部屋替えの事情掃除婦知っている

お百度に私の持病もつぶやいて
カレンダー留守の座敷で花盛り

寝屋川市 江口 度

年とった分だけ女厚く塗る
己より鳥居の方が性に合い
朱印帳妻を多忙にするお寺
妻笑顔津和野の鯉も太りきみ
ああ平和乙女峠の鐘の音

寝屋川市 宮尾 あいき

ホラ此処にやっぱり咲いたすみれ草
沈丁花せつない思いをかきたてる

七十四回誕生日

ローソクを消すにも孫共の加勢
花束の贈呈私をてれさせる
上等のカメラが私が美しい

倉敷市 斎藤 通風

頂点に立てば認める無能ぶり
温室で視覚まどわす無精卵
檜山は手形不用で金溜めぬ
皺数は読めぬが刻をきざむ音
余生とは生れた時に纏いつく

倉敷市 小幡 里風

ラッキータイトム妻が新茶をたてくれ
プロポーションあれこれ思う月見草
杖ついて歩く自分が嘘みたい
四季巡る空から恵まれもの届く

シクラメンこじれた風邪にさげてくる

倉敷市 野田 素身郎

卒業式母の意識は戻らない

再就職指の震えをひた隠し

縫いぐるみ抱く少女しょっちゅう風邪をひき

春の陽に出ようヨ車椅子の友

一坪の庭それなりの春が来る

倉敷市 藤井 春日

何が平和百鬼夜行の夜ぞかし

これ倅俺の来た道辿るなよ

花活ける指の白さよ人を恋う

ぐれた子の幼い頃の影を追ひ

アベックで散歩したらし靴の跡

倉敷市 稲田 豊作

菜種梅雨寝るにも飽いた露天商

なめらかな舌に一票盗まれる

晩年や己を叱ること多き

片隅を知らぬ女が多くなり

傘寿祝う宴に米寿の兄貴顔

倉吉市 渡辺 独歩

運び屋の風に媚びてる沈丁花

国公立にとどかぬ梯子重たくて

すり傷に絶え間がなくて齢に襲

昂りがまだ続きおり朝のパフ

父の背に俺という名の根無し草

倉吉市 奥谷 弘朗

立前と本音手頃に使い分け

底辺を耐えた仲間の手が温い

一生を手頃のうそであやつられ

道一つ替えて手頃の灯を見つけ

小さくても我が家東を向いて建ち

倉吉市 野中 御前

嫁がきて姑の続編妻も抱く

紫の袱紗の隅に女系棲む

うら山はゴッホの黄になる泡立草

暖かい風が悩ます花粉症

雪こんこふところ温いたい焼くん

尼崎市 春城 武庫坊

腹立てて漢字一々辞書を引く

朝酒に勤が狂った腹時計

飼主にそっくりの犬抱いている

化粧水瓶から夢を掌に受ける

口笛でさそい出したら月隴

尼崎市 伊藤 春子

いとおしむ香川県から花の種

保育器で一人前のくしゃみする

泣くまいと耐えて羅漢へ会いにゆく

奪われて奪いかえせぬ自己嫌悪

性格の違いわかった結婚後

尼崎市 西村 かすみ

裏口へ廻るかなしい癖を持ち

妻でない女がやたら口を出す

三男のやさしさ老母は引きとられ
飽食の自嘲が続く昼の月
合鍵をもらつてからの修羅に泣く

尼崎市 角野かず子

切り札をさがし続けて貝になる
白糸を辿れば男の家に着く
見たような顔ふり返るひとり旅
折り鶴をかぞえ疲れた孤児の窓
善人とおもつて開いた自動ドア

名古屋市 越村枯梢

三文判一つで消える絆です
愛しさはおかめの面であればこそ
平仮名の看板めしやは暖かし
寒に咲くアザレアお前も混血児
どんぐりの芽生え見つめている朽ち葉

名古屋市 大林曲手

方角がいいから越してゆく不運
忙しい日は太陽も速くなり
不満めく砥石いびつに減っている
内堀を埋めプロポーズまだ言えぬ
嫁任せ今日もバターの匂いして

富田林市 田形美緒

申し送り申し送りの役員会
カラオケで歌うに梅は気高すぎ
付添の深夜過去は問わず居る
うつぶんを受けとめている段梯子

中流の夢でふくらむ紙風船

富田林市 藤田泰子

馴れるとは聖徳太子が邪魔になり
名菓より鯛焼好きのティータム
同僚は海外旅行をするパート
家事免除そんな辞令を待っている
洗脳をされそう新聞変えてみる

岡山市 時末一灯

本心を測れぬ人と海を見る
この先は余禄運命線がいう
さだめだと微笑む人よ冬木立
運命に素直で廃止線となる
遠まきの鳥合の衆に色がない

岡山市 行吉照路

気まぐれのジョーカー時には味方する
二枚舌女の口は涙添え
火遊びのつもりが首に縄をかけ
胡麻塩になつても歩から成りもせず
反核の呪祖か赤旗の雄叫びか

岡山市 川端柳子

ほのぼのと御馳走さまの話聞く
しきたりに早寝さされる雛人形
そしてそしてあの娘に二度目の春が来た
それからの多幸を語っている美貌
いいともいいとも生き方のパターン変え

高知県 松岡三吉

お互いに老けて誓いの和にもどり
飲みますか飲みます男同士なら
算数ができて孝行知らない子
生きてゆく運命おんなの裸んば
孤独を冬のミカンが知っている

高知市

赤川菊野

中国残留孤児肉親と再会

子の視野にもう届かない父の鞭
ポケットの片手は本音にぎりしめ
流水が北の叫びを乗せてくる
弱点を包んでくれる瞳に出会い
想い出の橋も故郷も遠くなり

京都市

山本規不風

五分五分と言うて手術に踏み切れず
白黒を賭けた手術だから出来ぬ
風紋に悪魔潜む都市砂漠
呆けているように出方を待つ電話
嘘少し入れて易者は喜ばす

京都市

都倉求芽

春弥生影絵もぬくい色になる
同年が死んだときだけちと怯み
自分では決して仮面とは思わない
伝票に昭和を抜いた印刷屋
銀杏の芽みるみるうちに初夏となる

出雲市

園山多賀子

反芻のゆとりやさしい牛の瞳に貰う

としよりだけインフルエンザに忘れられ

夫唱婦随明治地道な歩幅持つ

剣山の鋭さ花のいのち知る

句読点消した夫婦のすれ違い

出雲市

板垣夢酔

借金が嫌いでいまだ買えぬ土地

発車ベル旅の心へ酒を注ぐ

爪の泥落すひまなく喪へ走る

貧乏神にけしかけられていがみ合い

万札と別れて財布自棄になり

浜田市

中川幸一

離乳食恨みがましく張る乳房

友達の間までは済まぬおつき合い

姦通がよろめきで済む民主主義

人並に禿げた頭に鳴る鉄

マイナスとプラスでゼロの共稼ぎ

浜田市

佐々木裕

人生の双六見栄が見え隠れ

人生はエレジーうなずくワンカップ

かすがいが巢立つ日親の虚脱感

止り木にうだつ上らぬ腰をすえ

生き方を変えて歩調が揃い出す

姫路市

大原葉香

桜草持ち込み春の部屋にする

雨垂れのひとり言きく春の石

妻に風邪うつして共に咳いている

六十五歳まだ之からと思う日も
寝た切りになって命をさらけ出し

八尾市 宮崎 シマ子

婿殿が誘ってくれて梅まつり

老婆の一喝あびる猫二匹

春コタツ広げる地図と時刻表

客去んで夕餉の膳のさびしかり

友の名が毎日変る一年生

神戸市 仲 どんたく

君も又糖尿病か縄暖簾

病院へ行けばたっしやな部に属し

妻とより語ること無き今日が過ぎ

騒がれた頃を三面鏡に問い

灯台が点いて野生の馬かえる

堺市 藤井 一二三

得るために失うものが大きすぎ

新規採用みな誰もコネを持ち

チヨコレート贈りおんなを意識する

新語汜濫老眼鏡がずり落ちる

無縁仏の肩に彼岸の雨が落ち

羽曳野市 佐野 白水

老いに似て山茶花隣より遅う咲き

思春期の孫に冬の星淋し

古稀過ぎて初孫を抱く老いの春

今日からは孫の話の輪に入り

女医今日も家内の病氣聞いてくれ

桜井市 河合 茂雄

城落とす夢は僕から離れない

首だるくなるまで眺めた拝観料

趣味のない男が酒に流される

敵の塩舐めても手加減せぬ勝負

妻パーマかけると旅に行く気配 近江八幡市 前川 千賀子

渴いた心に吸われて春の雨静か

悟りには遠き身を置く花吹雪

他人ばかりの街なら腕を組んでくれ

不器用に別れて雨にまで濡れる

車座になると素直な天の邪鬼

芦屋市 竹中 綾珠

小豆煮る匂いなつかし誕生日

嫁ものも言ってくれない日の痛み

この頃は子に叱られること多く

公園の山茶花まだまだ咲き誇り

転宅後遺症まだ見つかからぬ物多し

今治市 越智 一水

子の見合させて妻との歩がそろい

雨だれも情こまやか春なるか

障子戸はいいな血圧下がるよう

春耕へ貧乏ゆずりの頬かむり

口よりも手が先動く嫁をほめ

下関市 国弘 半休門

单身赴任妻が子が待つ添え手紙

石橋は叩けとブレーキ確かめる
サラ金の催促神経戦でくる

糸の音竹の響きに融け合うて
ボーイフレンドが出来て悪いことおぼえ

宇部市 平田実男

末席から意見流れて狂い出し

上役に合わせぬ趣味を一つ持ち

廻りたくない日もあろう風車

馬鹿になることを覚えてゆとりが出

グメンネと言つて一泊旅行に出

松原市 北野久子

へのへのもへの今日もポケッとして暮し

したい事言いたい事も先越され

いい夫婦ドラマの様にいかんかな

仕返しはいい人あると言つておく

拗ねている夫へ早い夕御飯

宝塚市 丸山よし津

安逸が手に余る子を育て

エレベーター知らぬ男と二人きり

中年を孤児と呼ばれて母国踏む

子の自慢聞くあやとりにくたびれる

行き届く挨拶議員の妻なれば

熊本市 有働芳仙

新しい歌に馴染めぬ老いの酒

春闘のババの鉢巻ママが締め

募金箱ほんとに信じてよいものか

鬱憤を晴らすと淋しい月が出る
悪役に廻つて円く収めやしよう

境港市 細木歳栄

またすぐに帰つて来てよ不論吉さん

そんなことしないで欲しい雪になる

胸に灯を点しただけで抱きもせて

おぼろ月しつとり女を染めにくる

泣き落しなどにはかからぬ女です

七尾市 松高秀峰

どうしても直してやりたい母の癌

子の骨を拾う悲しい羽目になり

ぼろぼろの辞書買い替えて五十坂

死なれては困る妻の鈴の音

旧庁舎頃には吏員に情があり

高石市 牛尾緑良

回顧録母の引出しからこぼれ

大波も小波も私の明日のため

オイなどと呼んでは済まぬ古女房

物差がすこしずれてる娘と私

結論を口に出せない仕掛人

岡山市 嘉数兆代賀

あきらめた日から出発点に佇つ

春うらら老眼鏡の度がすすむ

弱そうな母に観音さまがいる

裏目裏目足袋は日蔭に干しておく

人を忘れ仏を忘れ日向ぼこ

仙台市 川 村 映 輝

禁煙の医院の門前で一服す
ジョギングの靴破れても捨てきれず
附和雷同一人歩きのできぬ男
頬被りのまま握手求めてくるソ連
何もせぬ男何時も腹へらし

新宮市 川 上 溪 水

理屈だけしっかりしてきた子の育ち
料金が変わりましたという値上げ
皮下脂肪こんな悩みが多いのに
似てはしく無いとこばかり似て育ち
年寄りの出不精死んだのかと聞かれ

美祢市 安 平 次 弘 道

飽食に馴れた惰性のめし茶碗
神の目を盗むと増える正誤表
愛憎の果て致死量は考えず
おみくじを引くから悩み深くなる
意地悪をしたい日もあるバラの棘

奈良市 森 田 カズエ

強盗も確認ずみの非常口
物体として霊柩車ドア閉じる
村役の金の入れ歯がよく光る
正直な影で必死に追って来る
八百よろずの神様みんなお酒好き

玉野市 小 谷 仙 山

霧晴れて寂しさだけの事故現場
私に出来るだけの我慢はしましたが
突然の吉報コーヒーつぎこぼす
漫画読む片手は南京豆をむく
メルヘンで育った子等の丸い顔

吹田市 藤 村 女

雪柳春の音符がドレミファソ
山焼の古都から春の詩が出来
花びらを風にまかせて春走る
ああ無情きのうの花が散り急ぐ
欠点も魅力に見えている若さ

今治市 矢 野 佳 雲

知恵熱はさして苦にせぬ子沢山
母親が逆に使っている敬語
このところ景氣上向き日脚伸び
アパートの花一鉢の一人の夜
どことなく崩れた夢二描く女

大田市 藤 田 軒太楼

美しく生れ家運を背負い込み
釣天狗魚拓脊の酔い心地
残り酒気焰あげてる不平組
申告を済ました安堵に春の音
本心を包むベールの彩を選ぶ

和泉市 西 岡 洛 醉

終電に今夜は仮面の顔で乗る

稅務署へ出掛けたとある日記帖

仏壇と語って妻に嘘が無い

一合の満足感よ雪よ舞え

ボケの花優等生の顔で咲く

高石市 浅野 房子

春愁や躁とうつとが交々に

春愁や女一人の祝い膳

合格に鼻歌も出る早春譜

花ぐもり微熱に心乱される

菜種梅雨毎年同じ事思ふ

弘前市 波多野 五楽庵

だまし討ちさせてしまった裏話

イソップにのせてやりたい人情味

お題目ややじよっぱりな母になる

梅前線情緒不安な靴を履く

すぐばれる嘘ネクタイをときながら

平田市 久家 代仕男

精農のゆび蚯蚓とも仲よしで

球根が目当て落とす花の首

立ちこめる湯気から掬う泥鰌鍋

里方の無理をひそひそ内裏雛

肥満児が矢鱈目につく参観日

羽咋市 三宅 ろ亭

鶯餅買って春を先どりする

鶯のどれも大きい椿好き

マスクなど掛けて春風邪よく喋り

花粉症過保護の家に入りたがり

借りのある弱味は意地を棄てさせる

呉市 槇田 英詩

大型連休店長さんは腕まくり

大正生れ我れ還暦の仲間入り

残業帰りに酒の自販機目立ちすぎ

医者に行くとしてさみしく去った飲み仲間

一月は義母二月は義父ダブルパンチの喪に籠る

柳井市 弘津 柳慶

正札がはがれて軍備増強し

マル優へ住民票にない氏名

仏壇へ今日一日をしめくくる

大正生れ古稀をいつしか通り過ぎ

鼻声で女野心を秘めている

東京都 増田 次章

無い順に無駄な金すぐ出したがり

酔うほどに唯我独尊春の宵

何気ない顔で幸せやってくる

狂うから面白い人生設計

眠るがいい明日はきつと良い天気

守口市 羽原 静歩

エスカレーターよわたしはジュースのお客様

どん底の声がはずんだゴムバンド

マザー・テレサに勲章はあげぬ方がよい

ピンボケの古傷残すアルバムよ
赦すことばかり斜陽の汗を拭く

樫原市 岩井 本蔭棒

尼寺の塀は少うし高く積む

金運のおみくじ入れたまま掏られ

怪人の口が上げ下げする株価

反対の意見も筋が通つてる

愛国に燃えた青春悔いていず

大阪市 松本 ただし

双方の言い分見えた転轍機

嗤つてもいいとも切れた三の糸

辛辣な皮肉をかわす水車

入歯もつと大事にしろと落椿

大阪市 町田 達子

重い口から洩れた一言的をいる

ひそと咲く花の私語も昼下り

落ちこぼれなどは知らない青い空

萌え初めた草縄跳びに蹴ちらされ

大阪市 大塚 節子

内緒内緒ママの耳元ぬくい息

気膨れの電車に一人積み残り

グリコ犯大阪弁の耳ざわり

渡り鳥流水動く出発はつぱつよ

大阪市 大野 武太

読経の前に世相を嘆く僧

創造へ遊びごろが生かされる

即興の美が生かされて民芸品

悪人の三分の理屈弁護する

大阪市 吐田 公一

憶えたての喜びを盛る娘の料理

地球より重い命をもちあぐね

若い夢仲間と語る輪が温い

飢餓の子のニュース見ながら食べ残し

大阪市 北山 悟郎

生き様を義足が軌み励まして

民法の枠に警官素通りし

エトランゼ身振り手振りが上手くなる

割勘に損の無かった二日酔い

大阪市 板東 倫子

先生と呼ばれる職へ不信任

医は仁を守る古びた診療所

春一番吹いた夕べに計報来る

合格の裏でしんどい授業料

大阪市 北 勝美

片カナの言葉に困る老いの耳

四方山の話へ欲しい水準器

一本の線に定規の内と外

一徹のそこは曲げない太い指

大阪市 杉本 智慧子

耐えぬいて強い女の白い足袋

小雪舞う京に思い出置いてくる

春の雨大阪場所のふれ太鼓

フオークダンス誰か一人が間違えた

大阪市 塩田 新一郎

だまされてでも美しい電照菊

幸せはお蔭様でと嫁を褒め

精神年齢なぞ言い出して老けている

自嘲から開き直って又自嘲

大阪市 中西 兼治郎

丁重におどす税務署の説明

酒のまぬ父を母は自慢にし

耐え抜いて来て十字架にすがりつき

うそつきにうそ発見器だまされる

鳥取県 森田 布堂

還暦も過ぎて浮気というニュース

建国祭旗もまばらな街となり

犯人の金警官が盗るニュース

譲り合う席をヤングに奪われる

鳥取県 森山 盛桜

温室の花は無駄話が多い

マンホールから見れば蔑む目が並び

春霞悪事は他人事のよう

訓話聞く一人がユダの顔になる

鳥取県 新家 まさる

歴史書の行間にあるうめき声

犬だけが貰いそこねた昼ごはん
石ひとつ礫とするか礎とするか
輪廻かな屑鉄となるロボットよ

鳥取県 清水 一保

大志抱くつばみで荒てぬ春の声

一円のお釣りきちんと待つお人

聴診器当てれば人間弱くなる

七人の敵には背中だけ見せよう

西宮市 津山 冬子

少うしは世辞も欲しいと老いの日々

人生の余白喜劇で夫と埋め

妥協ぐせついた余生に悔いはない

受験すみ絵馬はつとする春霞

西宮市 西口 いわゑ

腹痛の訳は知ってる女親

他人ならもつとやさしく言えるのに

つくしんぼ淡い記憶の中で伸び

右ひだり首を振らせるバスガイド

和歌山県 天満 三千代

弱点をつつむ風呂敷妻が持ち

柿を接ぐ長寿へ賭ける古稀の春

四分六の席では女酔えません

直感を胸におさめている疼き

和歌山県 寺田 裕美

「やっぱり」と言われたくないのし袋

地下足袋のコハゼにノルマを言いきかす
見劣りがするから離れてついてゆく
真四角に義理を届けに行く羽織

島根県 北川民子

にわか雪肩を抱かれる期待感
レパートリー増えて厨の日脚伸び
冗談が過ぎて隣が遠くなり
美しく嘘を包んで見舞われる

島根県 梅みどり

詩の歩幅追えども続く限りなく
やりくりも上手になった娘の所帯
年月の流れに添うて素直な灯
墓碑に耳あてて聞きたい片便り

姫路市 松浦輝月

血の絆重荷と思う鬼が棲む
三浪がきつぱり家業継ぐと言う
愛憎のおだ巻秘める布団干す
放蕩の夫へ芝居の娘の破談

姫路市 丁坪サワ子

偏食の孫飽食の世が憎い
葬式の映画夫婦で見といてや
ペンダント亡夫といつも一緒です
入学の孫尾頭よりハンバーグ

姫路市 人見翠記

春を呼ぶ寒のもどりの掘炬燵

満ち足りた生活悲しや愚痴が出る
腹の底読めないままに喫茶店
年寄が居るので障子張り替える

和歌山市 山川克子

嘘一つ所詮私も小市民
狂わせてやりたい男のくすり指
その筋にくわしい人が今は留守
しがらみの切れるハサミを探してる

和歌山市 中島正博

定退を知らず待つてる朝の靴
ガールフレンド取って良かった免許証
ブレイキの遊びの様な役でいる
忍従の手作り洞門鑿の跡

出雲市 落合正江

まどろみの中で出逢った母の舟
瘦我慢すがりつきたい母の胸
かげろうの立つ日待ってる丸い背な
売り言葉舌がもつれて買ってそこね

出雲市 吉岡きみえ

天狗にも人にあかせぬ過去があり
けだるくてドリンクころがす午後三時
自画像も六十路の色にぬりかえる
旧正に餅つく家風嫁が継ぐ

岡山市 花田たけ志

過保護から巣立つテンポは狂い勝ち

美しい切り札などはあるものか
春を呼ぶ行事で耐える寒もどり
頼もしき金がからめば色があせ

岡山県

二宗吟平

週一度温泉浴で蓑を脱ぎ

孝行の字が生きていた町の奥
お見舞に行つて車で送られる
他人の世話ばかり私の席がない

羽曳野市

中村優

六法の知恵は持つまい夢がない

反骨の酒のコップへ星映る

この僕が見れば確かに愛の鞭
ふたありの影絵で齢を消してゆく

福岡県

横地雅風

マニアには五銭が尊いコイン帳

ボタ山で炭の七輪使われる

八十まで迎ものの保険満期来る

木材の郷で田圃は山登る

和歌山市

坂部紀久子

明日からの日記母のないページ

明日からは胸だけに棲む亡母となり

何もかも任せられました割烹着

悪条件ばかりの息子の嫁捜し

岡山県

岩道博友

傷心を写す鏡も親譲り

可愛らしい悪女になって日記書く
中流の会社で既製服よく似合い
一本の糸を信じて晴着縫う

笠岡市

松本忠三

お化粧で手が離せない生返事

話にもならぬ話を聞いてくる

わたしにも経験がある傷を持ち

なんだろう名刺代りを振ってみる

交野市

山本テルミ

予算外支出の多い新学期

何故何故の答に困る伸び盛り

神様へすがれば明日が軽くなる

雑草も苦勞をしてる氷点下

箕面市

坪田紅葉

たのしくて悲しくもあり老いの日々

つながりがつづいて今日のお茶の席

通院もたのしくなった友が出来る

それぞれに行つた後のティータイム

町田市

竹内紫錆

パトカーに会釈右折に念を入れ

決勝打かもカメラ班手を抜けず

一生に一度もドッコイショと言わず

天竺に一人行つてゐるクラス会

大和高田市

岸本豊平次

親の癖真似ているのか似てゐるのか

ヘルメットでも被りたい孫の守り
猛犬に注意の犬が尻尾振る

み仏に照明あてて拝観料

尼崎市 奥山 美智子

じつくりと話す大根煮えてくる

六法全書に手垢のついていぬ安堵

すぐ側にいながら取れぬ廻り椅子

耐えることに慣れた女の泣きばくろ

高槻市 竹内 花代子

待つ人が遅くいらだつ空模様

前向きで楽しみなさい友のペン

去年我が家今年は従姉妹の計の知らせ

スローモーションの私ヘデジタル追って来る

河内長野市 井上 喜 醉

鉢植の管理にが手な診療所

友情を温め虎の子思い切る

反骨の野心溢れる酒の酔い

負け犬の勇退サクラが仕掛人

和泉市 岡井 やすお

大臣の椅子一つ空け手を握る

折込みのチラシに買えぬ物ばかり

給食は残しておやつちゃんと食べ

老老は兎角理屈に走り勝ち

岸和田市 芳地 狸 村

どの道も花の匂いの城舞台

花の私語聞こえる中を天主閣
思い出のひとつを許して心満つ
一言の頼みまっせの重さ知る

八尾市 山下 みつる

母と妻の中で泳いで平和主義

定食にあいて停年もう近い

ため息を聞きに出かけた毛皮市

浪人になると決まって白髪ふえ

枚方市 稲葉 星 斗

雪のせて盆栽じつと耐えている

借金を背負うて親はよく稼ぎ

高価なる老人ホームも狭き門

肩の凝る内職探して細く生き

奈良県 宮川 古都路

雪どけに川は怒って村攻める

出来ぬふり男にたよる女の手

折ふしはつんとするの恋の馴れ

この度は予算がないと逃げを張り

貝塚市 行天 千代

たつぷりと雨をふくんで春の芝

チューリップぐんぐん伸びる土ぬくし

笑うてる場合じゃないよギックリ腰

バス旅行ゆく気なくなるのも齢か

豊中市 上田 登志実

卒業も親のお蔭と殊勝なり

ほほえみの裏に隠した悩みごと
過ちは繰りかえさぬと誓うなり
テレビ見て泣ける私は救われる

堺市 柿花 紀美女

帰省子に続けて父は将棋負け
うとうとと炬燵の古いへ春一番
七色の虹を目ざして子等巣立ち
老夫婦昔ばなしはせぬ事に

兵庫県 藤後 実男

廃線になるまで待とうか土筆坊
妻の靴僕がみがけば光ってき
底冷えの道過去ある女です
健やかな母は茶漬の音をたて

倉吉市 渡辺 菩句

土壇場を逃げる必死の手をさがす
雪のあばたをヘッドライトがみせつける
急ぐほどシグナルのいつまでも赤
通行人の風の会話が訳せない

唐津市 木塚 素石

もういいと言いつつ手の出る桜餅
花見する遍路の割った握り飯
神様が籤を引くのか祈願絵馬
野にあつてほろにが人生露の臺

松江市 竹内 寿美子

七人の敵酒のめば今日の友

坂道のあかりは一つ残しとく
没落の家にも春はやってくる
やさしさを忘れた女が多すぎる

島根県 星野 侑正

サイドボード洋酒が好きな訳でなし
聴診器胸のふくらみそつとさけ
正眼に構えたままの俺だった
出る杭が打たれたような配置がえ

加賀市 細呂木 魯木

承諾をさせるつもりで御意見は
主役の座降りてもプライド影に見え
入院を終着駅だと観念し

和歌山市 玉井 豊太

隠してる言葉が憎いふた心
途中までする採算は誰もする
争うた朝の鏡は伏せておく

西宮市 山片 紀雄

関白は甲斐性責められふところ手
年金に縁ないチラシがずしり来る
大またと小ばしりの人朝の駅

岡山市 井上 柳五郎

女系の夫持つかもなみだ壺
世事疎きままで白髪の数が増え
塩絶ちのわけ老母は秘めたまま

岡山県 直原 七面山

自選集

月原宵明

生きる道いばら越えれば沼が待ち
旅は佳し古代文化と対話する

正本水客

ひとりおいて隣にいつも好きな人
誰とでも握手がしたい気の弱り
とびきりのワインで男と又別れ
地下足袋で仰いだ星に詩がない
神様は陽気太鼓で動き出す

黒川紫香

飾り気のない挨拶を覚えられ
人指し指必要悪を秘めている
回り道しすぎましたと妻笑う
不幸続きの家を見舞うて梅香る
旅の孤独へ梅の香がうごく

工藤甲吉

見知らない犬がふりむきながら行く
笹舟をエッサエツサと押すめだか
鯉のぼり旧家の鯉に負けている
屋上へ出てから五月だなどと思う
コーヒーを頼み色気のない話

本田恵二朗

内科外科婦人科ほかに脱税科
やけっぱちになればあの世で妻も哭く
三月や北の空でも蓋がとれ
三人組きょうも三人組でいる

青函トンネル貫通

トンネルを出ると青春過ぎていた

生き抜いた過去は語らず好々爺
金婚が皺と白髪を比べ合い
皺の数だてにふやしたわけでなし

大矢十郎

影さえも踏めぬお方が養老院
畜生がどれだけましか人非人
環境に支配はされぬ苦勞人
淋しくはないぞ嫁げや末娘
ワンパターン孫一人ずつ遠ざかる

野村太茂津

諍いは楽しくフアイト湧きあがる
勞りが胸のあたりでキュンと鳴る
勞りにまろい返辭がまだ聞けぬ
手枷足枷とれて首輪が強くなる
良寛さまの温い響きに敬てる

長野文庫

飲みのこすお酒の訳をいぶかられ
年毎に母に似てくる娘にて
子の熱が下った途端腹が減り
慕う訳来る度毎に金になり
利用価値なしと見たのか寄りつかず

山内静水

チャンス到来生き恥さらさんか
流されて俄然抜き手を切る蛙
時計まで静止している妻の留守

ふたりきり金はこの世で使うもの
お手をあげ下さい私はろくでなし

藤井明朗

ふる里のみどり連休は母が待つ
奥山の便りは遅い春の詩
人の世話欲を言うからもめてくる
時々は逆立ちをして若返る
男と女愛の言葉のボルノめき

水粉千翁

きびしさの雪の真白く母の色
悔いひとつ詫びたい夜よありがとう
望郷の涙は西陽から染まり
わたくしを見直す夜のしじまかな
肩書を捨てた重さを乗せた下駄

米沢暁明

反抗期あたり散らしてから孤独
実力がないだけ見栄を張る男
歟休めしばし遍路の鈴を聞く
辛口の度合も心得てマダム
これはしたり近道を来て橋がない

高橋操子

許されぬ二人に遠い里の空

水仙が必死かばいあう北の風
生造り神に供えて鯛供養

あやつられるのがいやで糸切る奴唄
大風にいどむ平和な村の空

八木千代

柱の疵にほとけが耳を立てている

冬眠の耳を揺さぶるのは誰だ

午後からの耳に棲みつく父の咳

悪口をわかつてくれる神の耳

川下の耳には鐘が鳴っている

小出智子

もう夢を売りにはこない焼芋屋

つまらないことを憶えている小指

摺鉢で作ってくれる老母の味

意地悪な男は入れぬかごめの輪

にぎりめし母のころと通じ合う

金井文秋

自画像を少しあかるく塗り替える

健康法親身で話す医者も古い

インスタントもおふくろの味覚え

とりかえた仮面になっていく演技

浅学非才と本音で言うておりません

故小西無鬼 句碑建立

除幕式と記念句会

日時 昭和60年5月19日(日) 12時より

場所 除幕式・王地山観音境内

句会・国民宿舎 ささやま荘

TEL 〇7955-210732

集合・篠山町河原町

国民宿舎 ささやま荘

(国鉄バス「本篠山」より徒歩6分)

兼題

「緑」 出口白猫児選

「筆」 辻 文平選

「灯」 北山 越山選

「幼稚園」 板尾 岳人選

「宝」 野村太茂津選

「のれん」 黒川 紫香選

「髭」 西尾 栗選

一題三句以内(投句拝辞)

句会費 千円(記念品・句会報)

懇親会 三千円

◇建設基金 一口千円(お一人一口限り)

故小西無鬼句碑建立実行委員

代表 遠山 可住

〒669-25 兵庫県多紀郡篠山町福住三三四

須崎豆秋

東野 大八

みの虫のなんぼ匂うても壁だった 豆秋

骨立てたまま二次会へついて行き

降りる客いとんのんと続くなり

長靴の中で一ぴき蚊が暮し

けなげにも家主の犬を噛んできた

須崎豆秋川柳の魅力は、住み難い人間社会

の喜怒哀楽も、洒脱飄逸な独得のユーモアで

おしくるみ、直接に皮肉や風刺を感じさせな

い持ち味にある。愛すべきこの豆秋川柳のフ

アンは今も全国に少なくはないだろう。

豆秋は本名須崎清次。明治二十五年九月十

日香川県坂出市に生れた。生家は貧しく四歳

の折、観音寺町にいる実父の兄の家に養子に

出された。養父先は資産家で、同地の三豊中

学を出ると甲種合格、直ちに一年志願して善

通寺師団に入り陸軍少尉に任官する。

「若い頃はよく遊びましてな。養子がつと

まらず戻されてしまいましたよ。それほど遊

びもし金も使いました。その頃は大本初期で

短歌の同人雑誌を出しました。雑誌の名は、

「絵日傘」でぼくのペンネームは待宵草。短

歌仲間芸妓や新派の役者たちで、いわばぼ

くの道楽相手。一番の短歌畑の親友だったの

は関大の学生だった西沢黄鳥というのがいま

した。短歌は啄木調で本は間もなくやめました

た(以上は「川柳雑誌」昭和33年9月号から

連載の「須崎豆秋論」高鷺垂鈍から)

啄木の真似してカニにはさまれた 豆秋

の句はこの雑誌への自嘲的作品らしい。

「ぼくの川柳を初めた動機ですが、昭和に

入って大阪へ出てきたとき、行きつけのおで

ん屋が新えびす橋南詰にあった。万よしこ

この親爺が後に市議にもなった庄万よし氏で

した。この店には店中川柳がいっぱい貼って

あって、麻生路郎先生の句もありましたが、

「よくもまあ豆腐ばかりとあきられれ」の句

がいまもぼくの印象に残っています。

それらを詠めばよむほど段々面白くなって

きたので、なあおっさん、おれでも作れるか

ときくとああわけはないよというので「人

形へ一年ぶりの桃が咲く」をやったら、こら

イケると万よしさんにおだてられたのが始ま

り。

雅号はぼくが酒の肴にさえ豆をよく食べる

ことから豆酒と万よしさんがつけてくれたが

ぼくは季節的に秋が好きなので酒(シユ)に

ひっかけて豆秋とし現在に至りました(同上)

「大正七年単身上阪(養家を出て一旦実家

に戻ったが間もなく)短歌雑誌の同人で親友

だった西沢黄鳥氏の経営する石綿会社へ入り

二年後独立したが廃業、そのあと天王寺の内

藤製作所に入ったのが昭和三、四年ごろ。

この頃から川柳作句に専念、川柳天王寺支

部を創立。内藤製作所は津村製作所とかわり、

ずっとここに動転して現在に至っています。

自宅も現在のところに住み三十年近くにもな

る(同上)

「彼は金銭には至ってたんたんであった。

三等重役になっても、浪六の八軒長屋式長屋

に二十余年を一庶民として終焉の日まで、長

屋のひょうきんなおっさんとして送ったので

あった。誰がみても楽道家として受けとれた

彼のことであるから何かにやりっぱなしかといえはむしろその反対で、実にきちょうめんな性格の一面を持っていた」(「川柳雑誌」昭和36年6月号・麻生路郎豆秋悼記)

豆秋が死去したのは昭和36年5月4日(法名釈清光)直腸癌に侵され、もはや回復ののぞみなしと悟った豆秋は、いち早く師の麻生路郎あてに遺言を認める一方、会社の津村社長各柳友、町内の人々にまできちんと別れの挨拶を認め「息が絶えたらこれらの手紙を諸方へすぐ出してほしい」と自ら夫人に書き遺している。これらの表には一括して「もうあかんと覚悟したので『わかれの言葉』を書き残します」とある。遺書の一番はじめは奥さんにあてたもので、つぎの通りである。

「あなたは、私のわがまま生活で長い間苦労をかけて、何一つ楽な目をささず、一生のどたん場になって思いもよらぬ大病にかかり、あなたは寝食をわすれての介抱をしてくれたことを心の底から感謝しながら、一足お先へ失礼いたします。

あなたは遺族年金その他で貧しいながらも暮らして行きますから高鳴さんへお願いして、この町内(こんないい町内はありません)で居らしていただき健康に注意して達者で長生きして下さい。

たいへんお世話になったこと、幾重にも感謝しておわかれいたします。

妻へ
さようなら 清次

その死を前につぎの病中吟が残されている。

院長があかん言うてる独逸語で 豆秋

短冊のけいこでもして死を待とう

狸より短かい寿命とはさみし

鱧の皮キユツといっ杯もう駄目か

やれやれと安心してる棺の中

惜しみなき命橋山行の歳

暮れてゆく如き往生したいもの

「豆秋さんを評して『柳壇の一茶』とつた

われているのも、あたたかさ、懐しさの一茶

的人間の味がそいうわせたのであろう。(略)

川柳作家で一家を成す方が全国にどれだけ居

られるかは私には解らない。然しながら豆秋

さんこそ一家を成した方であつて、作品から

にじみ出るところの豆秋さんの人間が浮き彫

りになっている。作品において嘘がない。お

どかしがない、それに風呂上りのように、人

間社会の汗とアカを落した、さっぱりしたも

のも感得できる。波乱万丈の小林一茶の六十

五年の生涯と、須崎豆秋さんの六十九年間の

生涯はやや似ているものであるにしても、同

じでは決してない筈だ。

結局作品から読者の胸をノックするものは温かさ、懐しさが一茶作品と豆秋作品に相通うものがあつて、一茶の作品と豆秋さんの作品が握手しているのだ(森下冬青悼記)

「私はこの齢になるまで病気を体験したこ

とがないので病気の川柳作品が全然ありません。強いて探せば風邪をひいた時に作った、

「結局はミミズ煎じたので癒り」の一句がある位のもです。(略)私が入院と同時に決

意したことは、もしこの大手術で生還できな

かった際の置土産として、死んでいく道程を

川柳で詠み残すことも、川柳家としての本懐

だと思つたし、なお病床川柳は私にとつての

処女地帯であるので、身心ともに衰弱して気

力ももうろつたる中でも作句はおこたらずやりました」(「川柳雑誌」昭和35年12月号「病床

記」豆秋)

右は死の五カ月前の随筆である。豆秋作品

には一句たりとも駄句はない。その作句精神

の充実さは右の病床記にもみられよう。豆秋

句集「ふるさと」(昭和39年刊)は出版される

なり好評で翌年も再刊、柳界に大きな反響を

投げかけた。「彼のようなかけがいのない作

家を失つたことは柳界の一大損失だ」と嘆い

た麻生路郎の悼記が感銘深い。

★次回「大嶋瀧明」

俳風柳多留廿六篇研究 (三十丁)

327 たつ時に跡のにごらぬ湖水也

南 孝靈天皇五年に駿河国に富士山湧出し、近江国に琵琶湖開くとの同日出現の伝説。

「立つ鳥跡を濁さず」を踏まえて、この琵琶湖は富士山の抜け出た跡であるが、その跡も濁らずに実に水澄み通って美しい湖であることなりの意。「立つ時」は富士山の立つ時で、出発の時。

跡ハ野とならず大きな海となり 三三・2
大きな湖水山のつんぬけた跡 六七・23

多田 賛。

岡田 同。

328 われ勝にあら玉を汲ム江戸の春

南 若水をあらそって汲む江戸市民の元日早朝の情景の句。

若水を地主の跡で大屋くみ 五〇・7

若水を大屋の女房先へ汲 六一・39

小野 賛。若水は「あら玉の年にちかえるあしたより若やぎ水を汲みそめにけり」と唱えてから汲むものと聞いた事があります。

大屋 賛。

若水にあら玉をくむありがたさ

安一・智2

八木 賛。「今朝未明に井より汲を若水といふその起り知りがたし 春の始めに汲ゆゑしか号るなるべし」(江戸大節用海内蔵)

多田 賛。

岡田 賛。

南 得二・小野真孝・本多正範
石田 成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・多田 光

故岡田 甫

329 住ウ国になひ色を織るから衣

南 『伊勢物語』九段、在原業平、かきつばた折句を詠んだ句。句意は、「から衣」の歌に折句されている「かきつばた」は紫色で、業平の「住国」は京都で、紫は京に無い色でありながら、その「かきつばた」の紫を見事に「唐衣」に折り込んだ歌を讀えた句。

杜若横に織込からころも 六一・1
かきつばたよく織込んだから衣

多田 賛。

岡田 同。

伊勢物語に宿て書て居る

九八・66

南『伊勢物語』作者は諸説あって不詳。

句意であるが、紫式部の『源氏物語』は石山寺で書かれ、『小倉百人一首』は藤原定家の小倉山の時雨亭で撰ばれたのに対し、『伊勢物語』は伊勢などへ行かず、或は伊勢神宮を借りずに、自分の家で書かれたとのこと。

伊勢がのハ場所えらみなく出来上り

二二・33

社をかりて書きそふな物がたり

二三・25

お宮をかりて書そふな物語

六六・13

石田成『源氏物語』との対比は解りました
が、『小倉百人一首』までは考えが及びません
でした。

大屋『賛』。「在宿」は「在五」をも暗示して
いる？

多田『賛』。

岡田『大屋氏の「在宿」は在五の暗示説は一
解。

331 かの所コハこふかと笏て角田川

南『「笏」と「角田川」を結び出るのは
『伊勢物語』九段の「都鳥」を詠じた在原
業平である。

女にかけては豆男の異名を取る業平のこと
であるから、角田川を舟で渡る時多分船頭に

「かの所」つまり吉原の位置をぬかりなく笏
でその方角をさして訊いたであろうとの川柳
子の想像句。貞観の頃と吉原は時代錯誤であ
るが、本句、好き男業平の面目躍如として面
白い句である。

なりひらのおしい事にハ地いろ也

八・31

在原はてんやの味をしらぬ人

三三・40

八木『賛』。業平は地色だけ、という。そこで

「吉原はこうか」というのが、きいてくる。

多田『賛』。

岡田『同』。吉原でしょう。

332 御延引すぐに雨中の花を題

南『奥御殿、一同揃って繰出す花見。しかし
朝からの雨。中止と決定してがっかりする一
同に対して奥方より直に「雨中の花」の題が
出され、急遽歌会が催されるといふ。歌題「雨
中の花」には止むを得ないといえ、奥方は
じめ奥女中一同の残念に思ふ心情が滲み出て
いる様な気がする。

花の雨奥中おしそおもつなり

傍四・7

奥中へ一塩あてる花の雨

拾初・11

一ト御てん笑ひ人の無イ花のあめ

安二礼1

石田晋『賛』。貴族趣味。

多田『賛』。

岡田『同』。

333 年寄りの冷水でなひ美濃の滝

南『養老の滝伝説を詠んだ句。美濃の滝は年
寄りの冷水でなく、孝の徳によって冷水が酒に
なったのである。

年寄に汲冷水は酒と成

多田『賛』。

岡田『同』。いい湾です。

334 五月雨の奥海に成り山に成り

南『長雨でおひまが出来て、奥御殿で久し振
りに、若君、姫様を手許に寄せて、「海と成
り山と成り」で、父母として慈愛あふれる状
態でいられる、殿様奥様御揃いの姿であろう。

御日永に奥海に成山になり

五九・36

小野『別解がある訳ではありませんが、何か
物足りない感じがします。

大屋『はつきりしませんが、礎稿ではどうも
シツクリしません。

石田晋『何かの遊戯をしている図か。

多田『どうもわからない。

岡田『同右。いろいろな事をして心を慰める
のは分かるが。宿題とします。

上方前句付集の雄編

『明石人丸大明神三万句集』

(八)

阿達義雄

瓦竹堂中村李坡点の勢力範囲(上)

瓦竹堂中村李坡点の会所本を見ると、作者名の上に、その作者の居所の記されているものがある。このような作者の居所(国・町・村の現われてくる回数(頻度数)や、その分布状況を調べてみたならば、その点者(選者)の勢力範囲、いわゆる「選者の地盤」というようなものが判明するはずである。

先ず、寛保二年『堺神明宮奉納五千句集』(李坡点)、寛保三年『天満宮一万五千句集』(李坡・一草点)、延享元年『家原文殊堂奉納五千句集』(李坡・一草・可申点)等によ

って、これらの選者の勢力範囲とする国々を大観してみると、大体において、その範囲は紀州・大和・泉州・河内・摂津などであって、紀州や摂津に特に作者の多かつたことが推定され、寛保三年の右の会所本には、これ等の外に播州・江州・丹州・美州・肥州の国名が見えていたが、播州以外の国名が見えるのは各々唯一回である。

次に、延享四年『明石人丸大明神三万句集』(瓦竹堂李坡点)となると、勝句数も多くなっている関係もあって、李坡の許へ句を投じた作者の所在をかなり詳しく知ることができ、地名の表記法が一定していないので、現在においては、それ等の国別所

属を厳密に識別することは困難である。

従って、国別不明の小町村名は一応棚上げして、私の調査可能な限りの地名だけにについて、国別にして鳥瞰を試みることにする。

先ず、紀州については、単に「キシウ」としたものもあり、「紀和歌浦」「キシウソネ」「紀タナカノ庄」「紀ハシモト」「紀シマムラ」「紀上ノ村」、その他、「カウヤ山」「カウヤ」「和歌山」などとなっていて、これ等の合計頻度(出てくる回数)は25となり、河内については、「河内大友(3)」、「河州東代(2)」、「河州上田(1)」、「河州大井村(1)」、「河カンナビ(1)」、「河イカ村(1)」、「河田中(2)」

など、国名が頭記されており、その他の「富田林(4)」、「千早(2)」なども河内であらうから、これ等だけでも河州の頻度は17となる。

又、泉州についても、「泉伯太」、「泉岸和田」、「泉岸」、「泉中ノ庄」、「泉大町」、「泉イケタ」、「泉下池田」などあり、これ等だけでも頻度の計は14となるが、その他の「カイツカ」、「大マチ」、「シノタ」なども泉州と考えられるから、泉州の合計頻度は22となるであらう。

和州については、単に「ワシウ」となっているもの7、その他は「和州五条(1)」、「大和(2)」、「ヨシノ(1)」となっていて、これ等の合計頻度は11であり、

播州については、「ハリマ」と頭記されているのは、「ハリマシカタ(2)」だけであるが、「有馬(3)」、「明石(5)」、「アカシ西カタハラ(1)」なども播磨と考えられるので、播州の頻度は11である。

なお、淡路島としては、「淡ヒロタ(1)」、「淡州スモト(4)」、「淡フクエ(1)」などが数えられ、この頻度は6である。その他「阿州大井(1)」、「大井(5)」、「アシウトミオカ(1)」となっていて、阿州の計は7回ある。

次に「大坂」「大サカ」などと記されたものの回数だけでも15回であるが、別に「浪

花(2)」、「天満(1)」、「ヒラノ(3)」、「イケタ(4)」、「住ヨシ(2)」、「天下茶屋(1)」、「ヤラ(1)」、「アンリウ(10)」、「安立町(1)」、「フク町(1)」などと記されているが、これに「兵庫(19)」を加えて摂津国として一括すると、これらの頻度の合計は66となつて、摂津が圧倒的に多いばかりでなく、本句集において、一個所で抜群の高頻度を示しているのは、◎兵庫(19)、◎安立(17)、◎大坂(15)の三個所であつて、これ等はみな摂津に存し、これ等の位置はみな堺との交通において最も便利な所である(安立町は堺市の北部、大阪住吉区の南部にあつて現在大阪市内となつてゐる)。

これによつて、堺から出された会所本が如何なる範囲に分布されていたかが知られ、瓦竹堂中村李坡を中心とする堺附近の選者連の勢力範囲も、ほぼこれによつて見当がつけられる。

右に述べたことを見易いように図式化してみると次のようになり、京都系の会所本とは異なつて、遠隔な国々は殆んどなく、それも大坂集中の傾向になつてゐたことが窺われるが、例外として「江州高宮」が二回、「ヒロシマ」が一回出てくる。このヒロシマは安芸の広島ではないかと思われる。

要するに、瓦竹堂李坡の勢力範囲は、摂

津・和泉・紀伊を中軸として、その附近の国々に限られていたことになる。

播磨 (11)	摂津 (66)	河内 (17)
淡路 (6)	和泉 (22)	
阿波 (7)	紀伊 (25)	大和 (11)

このことは、当時の京都系の前句付万句合(会所本)の地点が、遠く北陸・東海・山陰地方の作者迄も、その傘下に収めながらも、同時に伝統に拘泥した停滞と地方的鈍重さを背負い込んでしまつて、清新さを失つたのとは好対照をなしている。従つて、延享期にあつては、京都系の選者連も堺の李坡点の地盤には喰ひ込むことができなかった。

(つづく)

水煙抄

黒川 紫香 選

米子市 茂理高代

入道雲に乗れば人生変わるかも
沈丁花誘い上手な香を放つ
海に出るまでに笹舟救わねば
ストレスの発散ですと服を買う
知りすぎてしまつてからの友が好き

藤井寺市 赤木和子

水も餌もあるのに外へ行きたがる
弾んでいるのは垣根を越えてから
生き方を変えよと迫る小冊子
二拍子のリズムで春の飛鳥路を
盛土にきんぎよの墓と書いてある

八尾市 高杉千歩

息子のためのシナリオ新妻が出てこない
未完の絵少女は蝶に憧れる
花の香に酔うて女は修羅を舞う
通りぬけするデパートで五平餅
年金の暮しへようこそ鳥賊の足

尼崎市 福田礼子

記念日の妻にまつ赤なバラを買う
シクラメンと靴音を待つ春の窓
春風に騙されやすい耳になる
掛け算の下手な男が貯めている
頂上で海を見おろすにぎりめし

大阪市 清水康恵

坂道で転がりそうな人に逢う
私を時どき忘れる人がいる
よもぎ摘む彼岸の入りと母の顔
誰よりもなだめ上手な古時計
赤信号今夜も誰か騙される

西宮市 紀市郁栄

動脈に棲む鬼一匹を飼いならす
姉にひとことまさかのことを言うておく
残り時間の予定を練ってばかりいる
酒ぐせが良すぎて接待には向かぬ
胸像のわけを四代目は知らぬ

雨らしい貧乏ゆすりかひどくなる
さりげなくバラ一本のラブコール
泥つきの野菜が好きな朝の市
三つ目の辻で冷汗どつと出る
寒がりでチャンスに弱いふところ手

尼崎市 田中晴子

結局は甲羅に合わせ生きてゆく
憂さ晴らす酒にも女みみっちい
どこへ行くあてはないけど髪を結う
表では足りず裏まで刷る名刺
やわらかな雨へ素直な猫柳

熊本県 大川幸子

子の夢へ親子の色が溶け合わず
折り返し点からやさしくなった夫
すわり具合にたくあん石はやつと馴れ
フライパンに油はじかせる今日の憂さ
ゆく雲を思いいいで見る老後

熊本市 永田俊子

さりげなく猫も風向き逃けている
姑と仲がいい娘にちよつと嫉け
待望の鯉泳がせる五月晴れ
五十の手習い少し秘密にしておこう
温室を開けてほんとの春を入れ

熊本市 宇野昭代

洗い髪少し女がもどりそう

名古屋市 藤井高子

余生ではないぞデジタルせき立てる
木もれ日の下でバラード聞く小鳩
あぶくほどの仕合せくれてコマーシャル
ライバルの見事な鼻の見える位置

長岡京市 木本如洲

透明な旗へ走ってゆくピエロ
裏切ったおんなと泥の舟を漕ぐ
葱坊主母には思想などはない
一合で酔うしあわせな牡丹雪
明日のない街たこ焼きの順を待ち

鳥取県 中原みさ子

またひとつ恋を落とした風憎い
正直な鏡に恋を見抜かれる
紫煙の輪男おとこの吐息きく
水たまり女の過去の涙かも
春一番くれた男が去って行き

米子市 光井玲子

森の中新芽の私語がはずんでる
遠い虹うつして冬の川渡る
逃げもせず槍をくり出すかたつむり
伸びた芽を教育ママが摘んでいる
四捨五入されて今日までついていた

富山市 舟渡杏花

克明に誕生記した母恋し
風やんで蝶が羽化する別れ道
お隣に負けられません髪型も

毛皮展指の先から満ちてくる
また来ますセールス律気メモを置く

寝屋川市 平松 かすみ

相合で濡れない程の雨が好き

ここまでと印付けたい家事仕事

主婦業へ飛び入りがあるボランテニア

盛り分けた皿を読んでる目が四つ

マナ板のリズムやっぱりちらし寿司

大阪市 山田 妙子

合格へ雪も氷も暖かき

合格でふうわり雲に乗った夢

本音などしゃべってみたい二枚貝

ためらいをワイングラスに覗かれる

春が来た春が来たよとつくしの子

東子市 小山 悠泉

受けて立つ自信はないが意地がある

道化役顔が好きではないピエロ

握り寿しの土産で酔った父帰る

共学の恋青春のど真中

大阪市 藤森 小雅子

タイミンク外す女の白い指

キヤリアが違う男の太い眉

鈍臭い男が五月雨訊いている

黄門に郷愁があり六十過ぎ

鳥取県 中原 汲香

三月よ夢の死骸を抱いてやり

一年生へ家中踊るランドセル
子に賭ける夢鯉のほりとのえる
銭太鼓打ってハートを聞きます

尼崎市 丹下 玉子

男運悪い女の事業運

低い枕で桃源郷の夢を見る

低音の魅力に弱い女達

そうですすね相槌打つのも処世術

豊中市 満仲 きく子

いたわりの言葉にお金かららない

ほほ紅を濃い目に青葉のなかの旅

舞い込んだ蝶がとまどう石の庭

姑の顔がやさしく見える春

京都市 松川 芳子

一言を添えて心を満たされる

妻だけは味方と決めている夫

正直な鏡へ今日を打診する

物忘れ互いに攻めぬ事にする

吹田市 茂見 よ志子

気紛れに歩いて憂さを捨ててくる

諦めた筈が未練の愚痴が出る

電話口声で昼寝をみすかされ

耳よりな電話うっかり乗れません

高槻市 笠嶋 恵美子

風呂敷の大中小と役を持ち

骨董屋茶碗の欠けをいくさり

子を産んで猫は女豹の顔になる
花霞逢いに行く日の薄化粧

和歌山市 桜井千秀

三日分日めくりはがす雨の朝

一人旅誰かに会いたいこのあたり

誤字のまま閉じる日記の味気なさ

鼻唄が好きらし野良犬ついて来る

尼崎市 山田保藏

ローンまだすまぬうちからこのすき間

飲み薬忘れて不安な旅をする

焼芋のオッサン芋を切って見せ

塾通い赤い筆箱持っている

西宮市 松本一郎

凶と出たみくじに心ひきしめる

散歩するラフな姿を犬が吠え

私には亡母が一番えらかった

用件を聞くだけ聞いて替ります

尼崎市 児玉歌子

頼られる距離でケンカが絶えません

本命の愛は柱の影にいる

寄せ書きに夢がいっぱい乗せてある

絶景を相合傘に邪魔される

吹田市 井上照子

五月晴ればれてみたい武者人形

転寝の枕になった広辞苑

小説は他人のままで老いさせる

姑母の背を流しもやもや消えていく

旭川市 朝倉大柏

雪こんこ雪を詠って雪に生き

目に見えぬから厄介な義理の糸

反論を鎮める席が別にある

輪の中に入ると男眠くなり

大阪市 稲本凡子

矢印を辿れば振り出しに立っている

再起する決心靴音まで違い

保護色になれぬ日の血のさわぎ

お若く見えますすいくつだと思ってる

岡山県 山本玉恵

風化した過去へ亡母の名だけ残り

翔んでいる女が虹にひよいとのり

カーテンをひらけばしとど春の雨

優しさも程々にして共白髪

大阪市 横山為子

涙腺をかたく結んだ日の決意

町角で拾ったニュースすかし見る

急ぎ足山から町へ宅急便

長短をきそつてみても猫のひげ

熊本市 黒田緑

人の背ばかり見てきて疲れきり

一日の重さに耐えた腕時計

疑問さえ持たず浮草流される

真実の隣の嘘の派手な色

鳥取県 土 橋 螢

去る人は追わない過疎の村つばめ
人生の向う岸からつばめ来た
やがて翔ぶことをおぼえるつばくらめ
人の和に馴染むつばめの一つがい

滋賀県 安 田 志 津

薬草を摘む楽しみの春が来る
どの位置でも美事なしだれ花
としよりがいなざるからとおだてられ
車間距離守ればすぐに割り込まれ

羽曳野市 吉 川 寿 美

一日がこんなに速い風のいろ
はからずも罪を作った嘘一つ
友達が時々温い釘をうつ
セコンドが病母の命を刻むなり

今治市 野 村 京 子

かたつむりの罪は土堀の続くまで
いい人達でみんな味方と錯覚し
女が炎えた夢を抱かせた流しびな
幸せ色絵皿にいて待つ少女

倉吉市 広 本 文 子

追憶の絵ばかりさがす冬画廊
雪はげし一点の灯を抱く女
月曜日孤独な靴が汽車に乗る
コーヒーふたつミルクゆっくり回る午後

大阪市 古 川 美津枝

白酒に横目をつかう右大臣

いい人と百までの夢春の雪

反芻の愚痴はよそうよ胃が痛む

小説は書けぬ私にドラマあり

弘前市 田 中 叶

屋根の雪溶けてくような恋だった

玄関を開けても声のない家族

事務的に待たされている人の顔

信号を待つ間もしやべる人と居り

今治市 月 原 つくし

ゆさぶりをかけて潮時待つ男

子が続く道へ惜しまぬ種を播く

四捨五入五入の席へあこがれる

影法師までもせかせか苦勞性

守口市 結 城 君 子

無風では映画にならぬ麦畑

一通り苦勞して来た笑顔です

猫なで声出した自分がいやになり

耳くそを取って話がはずみ出し

京都市 森 川 春 子

孫来たる宅急便と同じ日に

老夫婦テレビの上に雛飾る

雛飾る男園児も手伝うて

新しい机に春の日がさして

大阪市 上 田 柳 影

寒戾る団地にとまる救急車

入歯完成先ずステーキを食べに出る
デジタルの時計がつつく重い足
春風駘蕩妻になんにもしてやれず

尼崎市 吉 永 伊三郎

指で絵を読んでる孫に口合わせ
親不知の泡を聞いている離れ贅女
包丁のリズム気になる今朝の妻
由緒ある湯呑みと値札書いてある

尼崎市 鈴 木 良 征

平凡な暮しを続けパズルとく
種袋持たぬ女の花粉症
キーボトルの棚で酎が幅きかす
恋の詩求め続けるカタツムリ

芦屋市 上 田 佳 秋

冬苺姑と意見の合う今夜
鯛焼きを下げて意見の老母が来る
旧札がだんだん異端視されてくる
昨日迄味方の友が果し状

島根県 堀 江 百 代

淡雪が春連れてくる昼下り
思い出を手繰ればまわる糸車
上げた腰下して話の続きする
ポケットに忘れられてた花便り

桜井市 前 山 美恵子

おみやげはうちでどうぞと吸い込まれ

奈良公園鹿に攻められ差し上げる
大小のてるてる坊主軒の夢
雨降りの心を満たす本を読む

伊丹市 山 崎 君 子

紙すきの老女の肩にある誇り
陽だまりの話つきない丸い背な
朝市に三文の得みつけて来
雨の日はじつと電話を待っている

吹田市 栗 谷 春 子

アナウンサーイメージチェンジの利いた朝
巣づくりも早や落ちついて春間近
ゆうゆうの里は静かにぼたん雪
建て替えときまった柱みがき出し

和歌山市 堀 畑 靖 子

喘いでた坂でやさしい人に会う
まだ蛭住む川があるおらが町
金持でないのに小犬また拾う
中卒の釣書何度も断られ

竹原市 岩 本 笑 子

夜の長さへ白すぎるベッド
それぞれのドラマかかえているベッド
真赤な夕日明日は手術日と決まり
看護婦のいとさわやかな仕事ぶり

唐津市 浜 本 ち よ

カラオケの調子はずれに花こぼる

開發で村の情緒が失われ
確率はゼロの予報にズブ濡れる
色柄は良いが条件合わぬ服

和歌山市 森 敏 子

幸せな時は嘘さえジョークめき
いわし買う堂々と買うスーパード
この坂を越えたら灯り見えるだろう
ここだけの話になった筈がない

吹田市 山 田 里 子

猫二匹じつと私の化粧見る
正確に鳴って目覚まし叩かれる
事務的な息子の電話むなしくて
合格の御礼詣りも母一人

枚方市 二 宮 山 久

気の弱い男が語る酒の席
本当のいたわり無口のほうがよい
づるおいが少しはできたか妻パート
あんなにも月がきれいな遠廻り

鳥取県 灘 尾 民 子

俺よりもさきに逝くなど夫がいう
川筋に生きて柳に意地がある
子の便り要件だけで以下余白
アルバムの顔一人宛欠けてゆく

大阪市 亀 井 円 女

したたかなようでも夫に負けている

窓際でも何パーセントは功労者
夜独り美女の積りで持つグラス
ぬくもりを分け合う友と長電話

岸和田市 奥 札 子

母に似ぬところもあつてほつとする
姑と歩く歩幅は小さめに
年金で暮しをたてて春うらら

熊本県 高 野 宵 草

末席で反対意見押し殺す
怖いからとにかく笑顔向けておく
鉛筆へ眠くて困る足温器

米子市 門 脇 晶 子

果物はきつと神様の手作りよ
皆同じ声ではじまる数え唄
自動ドア人の軽さを左右する

米子市 堀 江 純 子

森の出口におとき話を置いて行く
耳底へまだ溜めている亡母の詩
自画像は美人に画いて残したい

鳥取県 福 田 あや子

柔かい風に蕾は気を許す
恋日記あて字隠し字クイズめき
還暦を夫の笑顔で祝われる

兵庫県 森 脇 和 子

助手席に陽気な妻が居る安堵

美容院少し気取った顔で出る
氣づまりをほぐす古びた鳩時計

岡山県 小林 妻子

忍従の母で小さくちさく古い
ヒョットコのお面の中で泣いた父
中庸で生きる凡夫のむつかしさ

出雲市 河原 恵美子

すこしだけおヒマが欲しい影法師
まっすぐにあげた手がまだまよっている
影法師お前もつけよヘルメット

倉吉市 淡路 ゆり子

俵にみんななれたか月がよぶ
横糸がなじめぬままに陽が落ちる
いとしさの記憶を拾う旅に出る

鳥取県 さえき やえ

風の子よ童話が池に浮いてるぞ
飾らない言葉に愛がにじみ出る
ふっ切れた朝は真紅の服がよい

長岡京市 柳谷 聖史

よい手紙記念切手を二枚貼る
かたくなな耳企みの火打石

ビルそこに赤いうべルが落ちている

岡山県 伏見 すみれ

誰にでも挨拶する子の目がきれい
土手に来て春を見付けた路のとう

先のない軍手で母の手内職

出雲市 小玉 満江

春めいて少し口紅ぬりましょう
悲しみは中国語でもわかります
枯草の中から春が顔を出し

和歌山県 森 三枝子

リフォームに夫の古着が生きてくる
なわのれん素通りしてる病みあがり
電話口嫌味ひとつもついてくる

出雲市 小白金 房子

台所育ち盛りの箸の音
横糸とって大安招かれる
バス停を降りる夜道の娘を案じ

尼崎市 野瀬 昌子

窓明けて春の足音聞いてます
春近し道一ぱいに子等の声
欲のない夫婦で好きな山歩き

尼崎市 佐藤 美代子

時間割パパの病気は組んでない
流人の里都の文化生き残る
矢印は野仏見捨て前を向く

大阪市 今西 静子

女だからなお許せない花盗人
初恋はわが胸だけの内緒ごと
占いの寿命を越えて生きている

米子市 祝 部 寿美子

筋書のない道少女歩み出す

遠い峰地図確かめて旅半ば

満月よ亡母の言葉を掌にうけて

鳴門市 八 木 芳 水

思い切った意見を出してまともならず

旅好きの話に嘘も交せてある

信心と別にお経にある安堵

兵庫県 奥 野 テ ル

妻の座を耐えた私に娘は育ち

老いたりと言わさぬ母の裁ち鋏

気が付けば財布は寒い見栄のあと

山口県 高 崎 雀 声

立読みを追いたて閉店ベルの音

働いて帰る日曜粗大ゴミ

補導した少女は警官より稼ぎ

米子市 小 村 てい子

少女の手リングの皮に拗ねられて

五百羅漢旅の終りで亡父に逢う

寂しくて赤い物だけ見て歩く

竹原市 信 本 博 子

筋一本通せば世間の冷たい目

迷いある心で橋を眺めてる

鍵の無い心の窓に灯が点る

大阪市 日 阪 秋 子

底ぬけの散財をする四月馬鹿

太鼓判百まで生きる怖ろしさ

糸屑を払い落して今日を終え

兵庫県 東 浦 砥 代

組板へ女がおんならしくなる

ばかばかかと叫びたい女の夜

虹ばかり描いて女は捨てられる

守口市 森 川 まさお

机見に来てよと孫に手をひかれ

喫茶店婦人は斜めの席に着き

画かれた梅はすかいに花をつけ

大阪市 渡 部 さと美

春の鏡うつした私さくら色

野のあざみトゲ持つ自負で色冴える

川やなぎ花見帰りを呼びとめる

豊中市 辻 川 慶 子

しあわせの風の便りか沈丁花

日だまりで猫が大きな欠伸する

春うらら白いヒールで街に行く

岡山県 後 安 ふさえ

七十で明るい色がすきになり

難聴へ喧嘩の様な声で告げ

疾風にまかせて走るちぎれ雲

西宮市 飯 森 泰 世

体調がいいと喋りがぐっと増え

かみしめる春の香りのよもぎ餅
バスガイド新人らしさが愛らしい

新潟県 高野 不二

退職金にまで女房も権利言う
マジシャンもやっぱり悪い金まわり
東大と恥しげもなく絵馬に書き

新発田市 上鈴木 春枝

ランドセル小さな背なで恐縮し
まっ黒になつて拗ねてる隅の雪
安心をさせる事のみ書く手紙

弘前市 真喜内 實

長らえて雪黒くなることばかり
見たいものふと見て消える春の雪
木芽また風から春の歌習う

竹原市 石原 淑子

野の草も緑の風は花をつけ
菜種梅雨噂話が翔んでゆく
無人駅みごとな桜淋しそう

熊本市 北川 一進

役職に初めてなつて本を買い
孫の声サヨナラ聞かす電話口
よだれかけ何度もかえて離乳食

愛媛県 石手 武

帯鋸を止めて製材昼にする
幸せな押し葉詩集の中に住み

快復の兆不満が出るお粥

羽曳野市 田中 隆二

吹けば飛ぶ肩書なれど未練あり
大根がおいしく煮えたよ冬の膳
ネクタイを外すと父の顔になる

高槻市 河瀬 芳子

観る側も拳握って五大力
厳冬の街で喪服に今日も会い
治まらぬ胸で組板音たてる

大阪市 大倉 圭介

春宵を惜しんで妻は豆を煮る
挽ぎたてのリングが重い宅急便
新人賞その後啼かず飛ばずいる

岡山県 松本 元江

春雨に濡れてもはずむ旅衣
早春の富士は濃霧で見えぬまま
食べてしゃべってはずんだ女の旅日記

大洲市 横田 放人

手でピタリ体温当てる母名医
蛍の光で送り学舎夕映える
膝折って聞けば聞えた子の悩み

西宮市 秋元 てる

新聞を切抜いて明日信じます
吹き溜る所をさがすように風
嫁いだ娘早やもう半ば他人顔

岡山県 伏見すみれ

これしきの預金銀行お辞儀する

下り坂になって女は走り出す

一生を走り続けた父の意地

泉南市 坂根流水

マンションのごとき霊園売り出され

早出してコーヒー一杯やる気出し

ながながの石段見あげ杖借りる

米子市 大田みさと

埃だつてみんなの言い分聞いてます

数え唄終りの文句薄れがち

もういいかい春を待たずに出たい芽よ

兵庫県 野々口悠也

春だのにことしの下絵まだ描けず

写経の筆罪いくつ消したか墨匂う

終章をどう飾ろうか老いの位置

島根県 小田川智重子

切らなけりやほどけて呉れぬ糸もある

安売りを買って献立手間をかけ

好きだった色が似合わぬ昨日今日

大阪市 布施サチコ

胸のすくセリフが撒いた後遺症

色香褪せ男の友が増えはじめ
住むひとを想う窓辺の胡蝶蘭

唐津市 山口高明

敬老会その日一日馬鹿でいる

美食にも馴れてスイトン恋しがり

お茶時に庭師が明かす祖父の貌

寝屋川市 立床晴風

逆さまの絵本を幼児指で読み

お隣と風が不仲にした落ち葉

食卓にメモがちよこんと妻は留守

西宮市 待田麻黄

軽装になって春めく御堂筋

カーテンを開ければガラス戸朝の露

クリスタル花瓶へ一輪ボクの部屋

愛媛県 八塚三五島

プラモデル書斎偉大な軍事基地

旅の地図マルは地酒のうまいとこ

仮住みの街が都になつてくる

青森県 荒田つる

不遠慮に値ぶみをされている見合い

ボケそうで呆けてはいない母の知恵

裏門をくぐる札束かも知れず

静岡市 渥美弧舟

ふくよかな孫の寝顔へ頼ずりす

ニクネームの昔に戻るクラス会

八尾市 鷺見章

風邪の児の枕に雛の灯がとどき

連れ立って法事帰りの梅の径
探梅の遅き昼食ちらし寿司

青森県 波 ただお

温みある黒土心と和ませる
北帰行前の白鳥を撫でてやる
フキノトウ幼い頃が懐かしい

貝塚市 池 田 寿美子

科学博そんなに急ぐ事はない
矢絰を簞笥の底に眠らせる

テレビ体操に一寸自信をなくしてる

大阪市 川 原 章 久

人生の砦は脆し砂の上

水飢饉願い過ぎてか春の雨

固定資産税桜の後から附いて来る

富田林市 田 原 久 子

母の忌に写経おさめる花の寺

墓石をとがめた酒で洗う悔い

定年の掟へ企業の無表情

高槻市 芦 田 静 江

茅葺きに水車苔むす郷の音

水墨の山がほのかに今日の夢

おの席が今日は空いてる隙間風

岡山市 中 嶋 千恵子

虹色にみせて女のひとり旅
きびしさは亡母の躰が今に生き

愛しきはクモリ硝子の指のあと

守口市 結 城 敏 夫

スピードに強いが高所恐怖症
ぼかぼかと病抜けして梅畑

急かせると泣きそうになる妻と居る

岡山市 戸 田 種 子

初孫の雛壇高く春を呼ぶ
嬉しくて心のはずむ詩を読む

肥満体動けど走れどやせられず

和歌山県 南 恵 美 子

志望校エスカレートとの子に悩み
就職に付き添う母も若返り

悪口を静かに聞いて九官鳥

河内長野市 大 西 文 次

運動会母は朝から走ってる

法被着た孫の御輿について行く

夜討ち朝駆け退職金をねらわれる

八尾市 松 下 蕉 露

死ぬまでの計算出来てる定年後

聞き上手時々半畳入れて聞き

ぶっちゃけた話にも一つ裏がある

富田林市 松 本 今日子

笹の葉を打つ雨音に春の媚び

打つ手立て出来たかさつと席を立ち

だし抜いた日から鬼がつきまとい

年金で尚遠慮して父の旅
松江市 福岡芳枝

鍼按摩ここは初老のふきだまり

柏手の願い聞けない神も苦痛

岡山県 千原理恵

税務署で働き蜂が絞られる

老いふたり土産に長寿箸を買う

脱税の医者に病が治せるか

唐津市 米倉彩女

嫁となり来る人らしい麦をふみ

うまいもの食べてストレス中和させ

故郷に母がいるから足が向き

岡山県 杉本伊久栄

古傷がうずく今夜は愚痴になり

未だ星にねがいをかける夢を持ち

何の色に染めて廻そう夫婦独楽

八尾市 椎尾公子

成る程と名物一つだけつまみ

招き猫しっかりおしよと叩かれる

ハネムーン猫も杓子もハワイ行き

兵庫県 脇田米朝

古傷に触ると疼き出す小指

おふくろの袋に底抜けの愛がある

広島市 望月晴彦

追い越しを許してなごむ春の風

春が来た日本の旅をする桜

高槻市 梁川吉子

寒風の隙間でにつこり桜草

花時に訃報がつづく今日も雨

岡山県 牧野秀香

足元の史跡も知らず観光地

お風呂から父子の歌声笑い声

広島県 花田繁子

目刺焼くにおい漂う安心感

聞かされて聞かして人生リレー成り

鳥取県 林原一尚

倅せがつづいて海へ出てみた

ひとすじに紫授褒章の晴れ舞台

泉佐野市 真崎浪速子

天然を食べよと母の宅配便

ため息が歴史を変えることもある

和歌山県 北山凡太

堪えられる丈堪えている風の糸

ロボットになつて気楽な老いの日々

堺市 宮本かりん

娘がくれた少うし派手なペアルック

ランドセル夢まで詰めて子は弾む

吹田市 西岡豊

成し遂げて君が俺がの弾む酒

黙想の一線引いて妥協せぬ

老妻逝く

島根県 園山世似

先に逝き箸箱一つになりました
煙突のけむりは風に逆らわず

指宿市 渡辺伊津志

頼りない使者は職場の人気者
空白にしゃべらせている書道展

大阪市 榊本落児

伝説を素直に聞いて話し込む
タレントのTV料理は一夜漬け

西宮市 山田喜代子

六十も新人でもてる老人会
重い荷も半分ずつで夫婦坂

八戸市 島田昭治

解ること堂々と嘘つく憎らしさ
青春捧げし会社去り難し

兵庫県 平和茂一郎

河原より拾って帰る漬物石
また妻の小言聞いてる日曜日

川西市 野村静雄

ばたばたと駈け病院の夜が怖い
天使から普通の顔へ白衣脱ぐ

益田市 里本たかし

正解がやさし過ぎて芽が出ない
新しいジャケットを妻に正される

逆立ちが上手にできた進歩です
ひっそりと情けの耳は笠地蔵

米子市 金山夕子

妻の留守すんなり焼けた目玉焼き
寄せ書きで見舞届いた枕元

高知市 北川竹萌

独り言に別な返事が返って来
同窓会終って幹事の重荷おり

大阪市 喜多佐津乃

待ち人は来ずにワビスケ散り落ちる
正直をつめたポケットがあほらしい

泉佐野市 大工静子

重い雪おしわけ顔出すふきのとう
新人も移り変りの歌謡界

大阪市 松岡久留美

ちぐはぐな部品で組んだ人である
清純な眼が恐ろしい悪たくみ

樺原市 中島正次

停電がすめば男女の位置替わり
風呂帰り楽しい道順コップ酒

藤井寺市 菊地繁男

溜息は仏間の前と独り決め
黒板の落書き上手でも消され

呉市 蔵重成人

生きる欲抱いて薬飲みつづけ
バレンタインとか知らず明治遠くなり

唐津市 相葉あき

窓際に腰掛も無い非常勤
ヒマラヤの雲が気になる山岳部

鹿児島市 吉永なお

二人目を産んで年貢の取めどき
雛の祭り女の業の始めなり

米子市 宮本佳女男

農魂に恥じぬ間引菜の料理
例外の自負に煙草を吸い続け

大阪市 末永芙久枝

慣れぬ手で布団あげてる妻が病む
年金を待つ心にも夢がある

和歌山市 三谷周三

悪友に心開けるが親に閉め
開けた戸に春風春の雪を連れ

大阪市 山脇正之

不用品始末が出来ぬ歳となり
唄は駄目謡曲だけで場を濁す

岡山県 福原悦子

春風に誘われ二人旅に出る
学生で長崎鼻は人の花

あらすかと平仮名で書きタコヤキ屋

大阪市 堀口欣一

思い出の街角国道一号線

鳥取市 武田帆雀

肩書の自慢に鬼の首がある
おかしくもないに笑うも武器である

岡山県 矢野山人

ちっばけな予算貴方の夢をもり
個性までかえてしまったイヤリング

高知県 小澤幸泉

父に似た春の遍路の丸い背な
結局は二人で歩くいばら道

島根県 岩田三和

目を覚ませ冬はにげたよサンショの芽
管理職ホーレン草を朝食す

新宮市 船越正

妃殿下のハンドバッグの薄い事
ステーション中央出口でも迷い

和歌山県 山田久子

合格の祈願一心手を合わす
親の手を一寸刻みに離れゆく

兵庫県 円増貞子

梅日和句帖しのばせクラス会
つれてよし釣れなくてよし糸をたれ

島根県 森山英子

うす化粧鏡に色を問うてみる
七人の敵へネクタイ締め直し

島根県 菅 田 かつ子
スナックへ疲れた二つのヘルメット

肝心なところは聞いてた肘まくら

大和郡山市 岡 田 寿 美

水たまり可愛い笑顔うかびます

はぐれ鳥北へ飛ぶ空迷いしか

大阪市 松 尾 柳 石子

洗い物探し集める五月晴

リングむく手が唄い出す遠い詩

河内長野市 植 村 喜 代

温かいこんな日もあり冬の朝

ひと眠りすれば夜中にペンを持ち

高槻市 大 池 好 吉

詩吟作吟じて長寿九十五歳

老松の雪に重みの風情あり

鳥取県 松 本 みをき

欲でかい六十過ぎての願い事

紫の似合う美人とすれちがい

大阪市 田 中 節 子

兵として夫来しマレー縦断す

タイ南部の島のホテルで演歌聞く

鳥取市 若 林 一 止

鬼刑事ひとつ覚えの枯れ芒

良縁と信じローカル線に訪う

新宮市 山 田 平 和

ブラジルの阿波踊りだよカーニバル
何事もいい意味にとる妻がいる

大阪市 野 村 八 重

雛段を飾って老人ひとり住み

新人が顔出し話又はずみ

岡山市 富 坂 志 重

独り言おひなに聞かす子を覗き

走り去る孫の列車に駅去れず

岡山市 池 田 半 仙

針仕事の妻に半生援護され

はずんでる独楽は一応円を描き

榎原市 西 本 保 夫

ハイミスのファイトをあわれとも思う

カラフルな下着へ見ないふりをする

大阪市 平 井 露 芳

太陽は拝むが月にはそっぽ向き

いい空気悪い空気も作る杉

大阪市 安 西 カ ネ

あの味を又思い出し寄る茶店

忘れた言葉の故に気は重い

守口市 長 谷 川 司

おろし餅喰わせてむち打つ受験生

満点は妻にないしよで付けてやる

大阪市 朝 田 晃 世

新人のハリキル顔に春の光

山彦も重くひびいて冬の山

鳥取県 乾 喜与志

孤児のまま落とす涙が紅過ぎる

染めた髪かと言われてうすい髪撫でる

大阪府 山 本 炉 斉

重い物だんだん持てない齢になり

重箱を洗って正月お別れだ

兵庫県 仲 井 素 水

利子追うて返済期日また延ばし

別嬪であつたと亡妻をいとおしむ

倉吉市 田 中 八太朗

吸い上げる乳を仔豚は鼻でもむ

ヌード嬢ホルスタインの乳を見せ

島根県 喜 島 ノ ブ

たまに見る漫画飽きない昼休み

糸雨のしづく真珠の玉と散る

ジュニアの部

枚方市 二 宮 拱 子

宿宿題が鬼のように追ってくる

茶柱が立ってるうちはいいけれど

枚方市 二 宮 正よし

新聞を見るのはいつもマンガだけ

いなか行き大きいおなべがぐつぐつと

柳井市 まえやまたかのぶ

あのねぼくしょくばんのかおしてるのさ

だいぶつさんぼたんがあるようごくかな

(5歳)

第九回全日本川柳大会

日時 昭和60年6月9日(日) 午前10時開場
会場 奈良市史跡文化センター

奈良市三条大路一丁目五一三七
電話(〇七四二)三四一九〇二二
近鉄奈良駅前より奈良交通バス「市役所前」
下車西へ3分

宿題 第一部(事前投句5月10日締切)

「眠る」 田中好啓選

「進む」 関 水華選

「数字」 片岡つとむ選

3.5×18センチの句箋一枚に一句ずつ記入、句箋は無記名、封筒に住所、氏名明記、投句料千円(定額小為替か現金書留)同封、5月10日必着
〒542・大阪府南区谷町七丁目一―三九・新谷町第二ビル二〇六、日本川柳協会大会係あて。

宿題 第二部(当日出句・締切12時)

「部屋」 小出智子選

「隠す」 定金冬二選

「坂」 尾花白風選

「良心」 山崎凉史選

各部各題とも二句。未発表作品に限る
会費 二千元(昼食・記念品代共)

表彰 文部大臣奨励賞

川柳大賞・大会賞

主催 日本川柳協会

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

本田 恵二朗

風のないところで風に会う怖さ

春城年代

深刻ではないが或る気味悪さを感じさせられる。無風状態の中で出会った得体の知れぬ風を怖いと感じ取った句主の心理を押し計りながら玩味すべき一句である。

かがると蟹太陽を差し上げる

小砂 白汀

あたかも太陽を双手で差し上げてゐるみたいと句主の川柳眼はほほ笑ましく蟹を眺めている。汐さいの音もどかな春の唄である。

少しうつつむいてこの子も塾へ行く

小島 蘭幸

塾へ通わねば、いずれは来るであろう入試の勝者にはなれないという風潮がただよっている日本列島である。なんとなくうつつとした景色である。うつむいての語がそれを切実に感じさせる。

お祝いを持つておいでと招待状

松高 秀峰

『お祝いをお忘れなく云々』とはどこにも書いてないのだが、言外にそれを感じざるを得ないという体験はだれもが持っている。それを川柳人という人種はいとも上手に描き出して、けろりとしてござるから憎い。

洋食も和食も好きでお人好し

森田 カズエ

私の好きなタイプのお人好さんである。しかも健康的であり、世話好きでもあるのだ。だれにも愛され、調法がられているのだ。

耐え抜いて出来た艶だとほめてやり

奥谷 弘朗

『風雪に耐えた小石の肌の艶』という私の旧作があるが、句主と同感の句を持っていることを嬉しいご縁だと思ふ私である。

春にあう糸孫の手にかけて巻く

樽み どり

ほのぼのとした温い愛情を感じさせてくれる句だ。可愛い孫の姿とまだ若いおばあちゃんの姿が好ましく浮かんできくる。

ブレイキの遊び程度の役を持ち

中島 正博

ブレイキの遊びとは、ほんのわずかに過ぎぬかも知れぬが、この遊びがあつてこそ運転の安全性が保たれるのだ。句主は謙虚に叙しながら、いつも油断のならぬ役に精進しおられるのである。

好きだから少し演技をしてしまふ

後藤 正子

ねばっこい演技ではなくて、さらっとした

たくまざる演技こそ千金の値打ちがある。愛情がたっぷり詰め込まれた一句にしほし魅せられた私である。

ミシン針ばかり持ち寄り針供養

岡井 やすむ

なるほどと思われされたり、時代の変遷を感じさせられたりする。縫針による和裁の技を会得した女性に稀少価値となったのではなからうか。ミシン針ばかりの供養とは苦笑させられるではないか。

白足袋が他所行き言葉知っている

園山 多賀子

私だって他所行き言葉ぐらい知つてゐるわよと白足袋に言わたから川柳になつた。ユーモラスな感觸が伝わつてくる句だ。

焼鳥の串が本音を喋り出す

松岡 三吉

コップ酒の味をいやが上にも高めてくれる串である。怪気炎のピッチをぐんぐんと上昇させるのもこの串である。そして遂には本音を余すところなく吐き出してしまったのだ。

温室で育ち冷蔵庫で暮し

浜本 久仁於

衣食住が足り過ぎて所謂温室育ち型がふえ過ぎたと明治生れの老人が嘆く。そして冷蔵庫で眠つた如くに生かされているのも不自然だと嘆くのである。

触角がいつも動いている不幸

片上 明水

鋭敏過ぎる触角の持主はさぞや神経が疲れ果ててであらう。鈍感な私は倅せじやよ!

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
生卵のようなはかない平和なる
人の上に人を諭吉の札つくる
大阪市 小出 智子
こんな年をとってしまっていた日傘
わたしの欲とさほど変りのないバケツ
笠岡市 木山 遠二
老いふたり猫が一びき恙なし
箏尺八合奏ぞよしハーヒハロ
岡山県 土居 耕花
花購つて帰る女は射落せる
父の背の曲りを笑うてはならぬ
弘前市 波多野 五楽庵
燃えつきたのかいさかいをしな妻
轆轤くるくるこけしの眉は妻が描く
寝屋川市 岸 野 あやめ
梅一輪拗ねてる妻を諭すよう
娘の家に私の椅子はあるだろか
岡山市 川端 柳子
石段の途中にあつた水のみ場
豊かさに真心までも使いすて

和歌山市 西山 幸
春なのにまだ温もらぬ姫鏡
脱ぎきれぬわたしが重し春重し
米子市 光井 玲子
地平線どこまで空について行く
子と共に育てた童話抱きしめる
守口市 羽原 静歩
紅白の餅にどつしり毒の古稀
正露丸どうにもならぬ時もある
大阪市 松本 ただし
コントからドラマに続く伝言板
ひよつとこやおたやんになる売りつくし
石手 武
腹の中風が抜けてくコースター
九官鳥教育ママに不貞腐れ
大阪市 西森 花村
大相撲行司が一番キビキビし
よく喋りよく食べ庵主若たし
弘前市 田中 叶
春めいて春めいてゆく五能線
春めいて信号待ちの霊柩車
寝屋川市 堀江 光子
梅の花おもえば悲話の多くして
ため息のきこえるような落椿
和歌山市 神平 狂虎
春よ春酒屋で羽根を買ってくる
春はけつして男を女にはしない
高知県 山下 登舟
年寄りの怪我叱られて笑われて
招かざる客にドラマを惜しみ切る
小松市 小森 靖江

あきらかに敵意を見せる隅の花
夫婦舟ひとつぶ種が下りたがる
高槻市 河瀬 芳子
虎の軸頑固に掛けて父の居間
追い越してみればむなしい風に会い
奈良県 河合 昇
手なすけた孫ええとこで横を向き
先の苦を教えたくない子の寝顔
大阪市 朝倉 利義
句が病んで来ました妻が病んでます
吹田市 栗谷 春子
清らかなまでに古びた雛人形
米子市 林 瑞枝
落日や飯場で大も傷を舐め
米子市 八木 千代
足首から仁王も春に包まれる
浜田市 佐々木 裕
ふつくらと春の芽女の顔浮かぶ
羽咋市 三宅 ろ亭
世の動き楳円となつてゆく怖さ
富田林市 藤田 泰子
春を待つ青春の去るのを惜しみつつ
西宮市 山片 紀雄
文明は女がきれいに見える国
吹田市 西岡 豊
満たんのバイクスイスイ老春譜
岡山市 井上 柳五郎
裸婦像の吐息公園に春息吹き
兵庫県 脇田 米朝
逢つて来た乳房が二つ乾してある
鳥根県 松本文子

哀しくてヒョットコの面外されず

近江八幡市

前川 千賀子

嗤え嗤え弱者の面は打ち易し

富田林市

岩 田 美代

種火つきるとお互いの身を案じ

唐津市

相 葉 あき

孫一人ふえて家中皆動き

唐津市

米 倉 彩女

野良犬になると息子へ書く便り

岡山県

清水 悠貴女

きれぎれの糸を紡いでかこめの絵

伊丹市

樫 谷 寿 馬

登ろうとする身に愛が重すぎる

広島市

望 月 晴 彦

嵌められる僕も鳴けなくなる首輪

島根県

小 砂 白 汀

柚子味噌の香りにすこし歯が疼き

米子市

菅 井 ともし

くずれない豆腐どこかにうそがある

高槻市

田 崎 あき子

春の気の微かただよ和菓子店

富田林市

松 本 今日子

本命の彼にわたせぬチョコレート

八尾市

松 下 蕉 露

窓際へ同期の社長やって来る

藤井寺市

赤 木 和 子

これからの坂を思えば押し黙る

羽曳野市

田 中 隆 二

老眼鏡夫婦の絆考える

仙台市

川 村 映 輝

昔昔を語れば老人息が合い

高知市 北 川 竹 萌

いこつそう通した首尾を思い遣る

和歌山市

福 本 英 子

公約と握手した手が傷を負う

島根県

大 屋 秋 峰

地球儀のどこかで私が欠伸する

奈良市

立 床 晴 風

梵字書くその手お布施の仕分けもし

米子市

林 荒 介

教会裏の雑木林は迷路です

名古屋

越 村 枯 梢

背伸びして首吊り縄に手が届く

大阪市

渡 部 さと美

瞳が合った時から春の進行形

今治市

月 原 宵 明

ポケットの握りこぶしが自爆する

京都市

松 川 茂

少うし濃めに啓蟄の墨を磨る

川西市

野 村 静 雄

矢のように帰り当座は丸いき

吹田市

後 藤 火 鳥

早春の初老の女着飾って

島根県

木 村 はじめ

蔭口は淋しきものよ生姜酒

島根県

堀 江 芳 子

魚嫌いな妻でも魚煮ています

島根県

堀 江 正 朗

手から春おや水仙の芽が伸びて

唐津市

仁 部 四 郎

恋文を焼いた煙は西へ行く

唐津市

浜 本 ちよ

カラオケに金釘流が引き出され

豊中市

額 田 明 吉

科学博らしゅう筑波でビデオ撮る

鳥取県

新 家 まさる

いま切った爪の形の月が出た

和歌山市

三 谷 周 三

病んでまだ美人ナースを探しおり

米子市

野 坂 な み

高島田私の艶が映えた日も

河内長野市

植 村 喜 代

美術品買わずストレス置きに行き

岸和田市

武 俊 春

お隣をとびこえてするおすそ分け

岡山県

山 本 玉 恵

四面楚歌たくらみ一つ抱きつづけ

鳥取県

奥 谷 弘 朗

正論は吐くが大胆さに欠ける

米子市

政 岡 日 枝子

矢印は森へ逃げろと言っている

豊中市

田 中 正 坊

老化とのたたかい歩くバス道路

大阪市

松 尾 柳 右子

髪染めて外出着の彩をより

羽曳野市

吉 川 寿 美

喜寿金婚主幹へ塔の揃い踏み

西条市

片 上 明 水

山の雪溶けると山へ子が行かず

尼崎市

伊 藤 春 子

料金箱は空しい音がする

西宮市

奥 田 みつ子

ライバルの前ではいつも太っ腹

西宮市 朝山 千世子
良縁を運ぶ春風の恩返し

和歌山市 坂部 紀久子
春の小川やさしく母をつれて逝き

米子市 青戸 田鶴
薄紫のバラを集めて友の忌よ

貝塚市 行天 千代
桜咲き老いの心もほころびる

高石市 浅野 房子
花時計狂って街も様変わり

和歌山県 南 恵美子
老夫婦互いの句からヒント得る

守口市 結城 敏夫
梅と桃あだこうだと写真撮る

大阪市 山田 妙子
合格へ両手一杯春をだく

大阪市 大塚 節子
花だよりそこだけ春の化粧して

西宮市 松本 一郎
喉もとで止めた怒りが顔に出る

大阪市 榊 本路 児
今時の大工手斧など知らぬ

和歌山県 北山 凡太
賽銭は小銭にするに如くはなし

岸和田市 古野 ひで
千羽鶴飛び日祈って出る病室

倉吉市 田中 八太郎
岡目八目分のいい方に指図する

岸和田市 芳地 狸村
赴任地へお酒を供に一人旅

知らぬ間に母近づいて助け舟

大阪市 上江洲 勝子
三月の穏やかならぬ子沢山

守口市 結城 君子
啓蟄や先ず早起きに切替える

高槻市 笠松 高子
原点にもどれず唯の同居人

岡山県 池田 半仙
もの忘れ我が足音が他人めき

米子市 茂理 高代
言訳をすればよかったふと佗し

堺市 高橋 千万子
何かある電話の数が多くなる

笠岡市 松本 忠三
旅の恥宿の浴衣とぬいでくる

兵庫県 北川 とみ子
伴せが横を向いてる独り酌

岡山県 松本 元江
感傷にひたる間もない孫の守

芦屋市 竹中 綾珠
行けそつものなしユニバーシアードも科学万博も

新発田市 上鈴木 春枝
春の陽へうんと伸びするベビーカー

兵庫縣 東浦 砥代
八起き目の女指輪はもういらぬ

寝屋川市 宮尾 あいき
庭の梅鶯の声まだ知らず

鹿児島市 吉永 なお
桜餅少女のとときめき遠くなり

尼崎市 春城 武庫坊
向い風傷の深さを知っている

大阪市 中西 兼治郎
スポーツの銃口上むいている平和

今治市 月原 つくし
背信に耐える星座のきれいすぎ

静岡市 渥美 弧舟
朝風呂の讃歌人生素晴らしい

愛媛県 八塚 三五島
哀しさを思ふ存分空へ向け

宝塚市 丸山 よし津
デジタルでうしろへ戻ることはない

高知県 曾我部 裕
さて次はなにが出てくる妻の里

出雲市 原 独仙
寝酒覚めあれこれ雑念既に二時

豊中市 中松塚三丁目13-15
投稿先 千560 * 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「足跡」選者 橘高薫風

締切 5月10日

(ハガキに三句以内)

投稿先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 大阪放送局「さわやか広場」係

5月26日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

藤井 一二三

順番に咲いて散るなら事もなし

赤木 和子

咲いた順に散らないのがこの世の常である。親を残して子が先立ったり、妻や児を残して亡くなった場合、神も仏も無いと天を怨むのが常である。然し仏の教では、常楽我淨、即ち人間は、一時の夢を楽しんでいるだけで人生は苦であり無常なものである。人の世の悲しさを見つめた作者に敬服する。生きる力を落のとうと分かち合う

永田 俊子

土を割って生きている若い落のいのちに、励まされて生きる今日の私である。

去年今年春は萌黄の絵具皿

高杉 千歩

今年もまた、充実した一年を送るために、心の絵皿に春の萌黄色を練りながら、期待と抱負に胸を膨らませている作者の気持が見えるようである。

入院をしますかと脈とりながら

浅野 幽玄

事務的に、いとも簡単に入院を話しかける医師の言葉には、戦く患者の気持をおもんばかっていることであろうか。下五の、とりながら、がよく効いている。

子離れに祈りしかない母である

信本 博子

成長と共に、親から次第に離れてゆく子供を見つめながら、どうすることも出来ず、ただ無事を祈るしかない母親の淋しさ、哀しさ成長する子供と、親の心の軌跡、親の宿命として諦めるより仕方が無いのだから。

抜き衣紋うなじに軽い罪をおく

吉川 寿美

抜き衣紋の白いうなじに、自己陶醉と悪魔の微笑を意識しながら、今日を装うのも女の業だろうか。

逃げ道を一つ残して子を叱り

野瀬 昌子

子を思うものの親に如くはない。子の将来を案じて叱りながらも、内心よどころない事情があつたのであろう、きつとそれに違いないと一途に願いながら。子を思う親の気持を真によく纏めている。

祈り忘れて神に幸せ盗まれる

堀江 純子

人間は、神の加護と仏の慈悲により生かされていることを忘れ、自力で生きていると錯覚しがちである。感謝の祈りを忘れて、本当の幸せを自ら投げ捨てているのに気がつかない。

い。

ロボットは社長にお辞儀しなかった

大西 文次

地位や名譽という肩書に、なんと人間の弱いことか。まるで弱さを嘲笑いでもするように、卑屈さを知らぬロボットの仕草に拍手をおくりたい。

落ち椿昔のことにふれるまい

日阪 秋子

突然、何かに悟りでもしたように、ポトリと落ちた椿の花にも、いろいろの過去があつたであろう。過去を捨て切れぬ私に、それは進歩のないことだと論しでもするように、潔い椿の散りざわではあつた。

燃えるものあつて母の絵書き続け

祝部 寿美子

ライバルの棺を菊で埋めつくす

吉永 伊三郎

一ひらの雪が違いたい夢になる

山本 玉恵

わたしを開ける鍵を拾いに街に出る

福田 礼子

眼鏡かけ替えると人を見損う

紀市 郁栄

会者定離からめた指は風が解く

藤井 高子

つつましい余生の部屋に笛を吹く

木本 如洲

反対した数だけ悔いを重ねゆく

八木 芳水

百句選自

朗 明 井 藤

自分だけ生きてるようにぐちを言う
幸せの合図はだれもしてくれぬ
人生の浮沈ドラマに似て終る
帯解いてひとり住いの灯に座る
古稀からは歳をとらない化粧する
子の夢を育てる愛が逃げている
荷を軽く寄り道もする喜寿の坂
春ひらく老いの泉も少し湧く
ひとり占めする幸せは逃げていく
名残雪ひととき春を遠くする
明日へ生きる献立を練り直し
紅葉が燃えるわたしを誘う旅
ひと白は孫が杵もつ喜寿祝
思ひ出の日記閉ずれば春の音
口癖の多忙へ血圧おびやかし
黄のシグナル明日の暮へ点滅す
身を守る栗のいがにも隙がある
本棚に積んで豊かに詩を探る
国体の出逢い民宿の人情味
脇役でよし人生を丸く老い
追えば逃げる幸せをあきらめず
すこやかな汗 太陽と向い合い
儲けには遠い仕事はあり余り
夫婦相和しお人好しまでも似る
解け合って見れば笑いごとで済み

逢うて来て化粧を覗くコンパクト
下積みの苦勞は妻に励まされ
野心ある盃と見て酌ぎこぼし
晩秋へ名もなき山の美しく
耳遠き長寿静かに国憶う
勘のよい妻で言訳ほねが折れ
もうこれで逢うてはならぬ箸枕
雑草でよしふる里の土に生き
わが身大事に仕事遅々とはなりぬ
欲が出て幸せな音聞き洩らす
なにげなく暮しほろりと悔い残る
ゆつくりと歩こう老いをなせいそぐ
夏雲のもくもく秋へ腰をあげ
調子よい話は金の差で負ける
人生の起伏しみじみ妻も老い
旅に来ておとこ浮気を貯めている
東、西別れの尾燈ぬれて行き
天につばして汚職にうずもれる
口癖の多忙仕事を追うて足る
亀になり兎にもなり人生譜
握手した温み残して振り向かず
甘党へお酌は笑顔だけを見せ
台風へ家中みんな役がつき
縁談へ廻り道してやせた恋
いくつかの恋を結んで散る桜



宿題へ父の威厳がくずれかけ
つつましく生きても女尊され
仲人の口下手な口信用し

ささやかな避暑ふる里の風の中
冗談が過ぎ潮時をまた逃がし
太陽の平等スモッグを破れず
変身の早さ世相へ負けられず

海汚染して暮しは向きを替え
訪うひともなく晩秋の滝枯れる

幸せをつかむ流れに老いを知る

カレンダー瘦せて追われる十二月

枯葉舞う行方を追えば冬が鳴る

十代の非行遠巻きにして騒ぎ

先生の信念くずれる無難主義

金出来てからバランスくずれだし

話作られて渦中の崖に立つ

気がねする事もないのに母の愚痴

老いの幸せかも孫の肩車

札幌の魅力へおとこ笛を吹く

坂道に来て幸せな風に逢い

還暦から歳月を忘れている健康

人情のうすれる中に寿命延び

一日の善意疲れる事知らず

子の過保護見直す愛のむちが

止り木を探すおんなのふしあわせ

小さい嘘が廻りまわって渦となる
栄養の過剰見直す物価高

情熱の火種を抱いておんな生く

子と同居幸せそうに見せて老い

風揚げへ親子の糸はもつれない

孫を叱るに新しい言葉を探す

風の色厳しく冬の街にする

あきらめてから一点がよく見える

シグナルも時には黄となる夫婦

みずうみの四季は暮しを抱いて暮れ

親と子のキャッチボールを忘れてる

空の旅過密になって国栄える

平凡な夫婦世話好き親しまれ

恋のかけひき夜の街を行く

うれしい涙は笑顔が出て乾く

ここに来て友の苦言を呑んでおく

外から内から日本の壁ゆれている

金の力で弱い味方をもっている

家族の和ゆるる世代にうろたえる

菊づくり苦労話の茶に招かれ

日曜の子連れをじっと靴みがき

合掌の暮しへ福が舞い戻る

追えば逃げる金の力にためされる

トカゲからコアラ平和な日本です

新春へ詰める句箱に幸がなる

句百選

生 弘 口 川

もう勝負あつた感じの四十歳
立話すめば簾が動き出し

絶景に妻を連れざる事を悔い

紅い蓮路郎一周忌の微笑

字体まで残念そうな置名刺

一息にのんでお冷の札を言い

ウナベンの箸で教える方に富士

混浴に五十女の威風あり

父ちゃんの味でスキヤキ鍋がこみ

先生という名で心の傷にふれ

マイペースマイペースとて丑の春

末法のお寺らしくてよく栄え

愛のめを言えば褪せる日のこわさ

犬喰わぬ話へ知恵を貸すも母

秋風に貯金あるかとささやかれ

願生院文空葵水とは哀し

見えぬとこ結ばれている夫婦岩

耳鼻科医の春は鼻血の患者から

水茎の跡美しく振られたり

紙障子菊の透しも厄のもの

新築の時は生駒が見えた窓

宿浴衣ちよつぱりハイドの貌となる

問われたら答える齡を女持つ

二世も添うつもりを妻に断られ

オカエビの甘露煮で酌む飛驒の酒

真ん中が歪み勝ちです栗三つ子
旅に病んで御堂の庭に憩う句碑

千年を生き千年の材となり

おみくじも口実にして断わられ

見破った仮病に温い聴診器

犯人のように妊婦に連れられて

自分から刺しには来ないバラのとげ

あじさいの今日咲く色も嘘でなし

日本の女美わし四季を着る

父の影やどす娘の男性像

河童の子生れたくない世がつづく

十二月某日 額ストーンと落ちぬ

飛んでみて空退屈なものど知り

麗筆を羽織る句集は春生れ

六月二日十止庵雲の峰へ抜け

他人叩くほどに自分が叩かれず

放生の池でも弱者食われたり

石有情善意伝える文字を抱く

雨も良し洗濯好きの妻と出る

生命までとられぬと決め箸を割る

両の掌を合せば嘘が逃げて行く

小さな旅私の見付けた仏さま

表彰する方が大きいボンつけ

五月間牧人の蟻石になる

海百合の化石が語る飛驒の秘話



一粒の砂で風紋の中に居る
何番目かの駅で必ず降ろされる
浪速津に来て海紅豆色淡し
谷町は句集もベストドレッサー
お力になれず善人わびしい日
乗り合いの一つの笑顔が消えた舟
鬼の首取って置き場に困る破目
母親を亡くした女は欺けぬ
子の頬を叩いた手にある痛み
横書きにされて平仮名尾が振れず
ご先祖の朝鮮の血が髭に出る
新入社可愛い財布持っている
母の日が五月の暦にかくれてた
半分ずつ食べて夫婦の気が足りる
傷心へ神忘却という処方
善人とみたか赤ちゃんやつと笑み
大仙陵へ落す男の長い影
清張のひと時となり乗りすごし
お釈迦さん一三夫の朝寝には苦笑
友ありて山頂印の年賀状
繫がれた犬を野良犬見て通り
四ん月に誕生日がある華やかさ
花外楼維新を偲ぶ同窓会
きりぎりすだったと悔やむ五十坂
高麗尺で測れば高安城浮ぶ

写経筆無の字無の字を書き馴れる
半分の血に叛かれる混血児
ご先祖に混血がある高い鼻
父の日のツケは父へと回される
お別れの言葉 帰真の葬清楚
わかつてるわかつてました夫婦の茶
ご両家の真ん中へんという新居
勤皇の宮地に菊を活ける句碑
島へ来て神も仏も同居する
花嫁の父に軽さと淋しさと
情には弱い男のわらじ酒
お隣りの改築頭までひびく
朝市に日本の母の顔並ぶ
ほったを抓って表彰式に居る
初春のめでたきものに鼠算
平和だな妊婦が目立つ初詣
同じ事に気付いて夫婦笑い合い
四分の一は自分に似てる孫
光背の一尊欠けた秋の風
お気楽な家と泥棒窓を逃げ
里帰りした花もあり花の里
丸い葉の猫柳ありやはり雨
柳縁はうれし木彫りのルーブタイ
今日を生く出口は見えない事に
結局はすべてを許す母の愛

金聖嘆の詩観

小林 祥 浩

金聖嘆（？ー一六六一年）は中国文学史の

類には、小説と戯曲の地位の向上に力を尽くした人、といったように記載されている。聖嘆は清の初期の文人としては独特の文学観を持っていたが、その文学観が発揮されたジャンルは小説と戯曲だけではない。かれは詩についても、独自の方法論を持っていた。その説くところに筆者は共鳴することが多い。

筆者が金聖嘆の詩観をじかに窺ったのは、次の九篇の書簡である。

- a、王道樹に答ふ
- b、吳樸着に与ふ
- c、家文昌に与ふ
- d、顧掌丸に与ふ
- e、許青嶼に与ふ
- f、韓賁華に答ふ
- g、沈匡来に答ふ
- h、許祈年に与ふ
- i、沈永令に答ふ

詩とは何か。これはどの時代にも普遍の問

題である。金聖嘆は言う。

詩は異なる物にあらず。ただ人（じん）人の心頭古尖（せん）より万已（や）むを獲ずして必ず説（い）ひ出ださんと欲する所の一句の説話なるのみ（c）

詩といっても、別に変わつた代物ではない。人はだれでも胸のうち舌のさきにとどうしても言わずにおれない「説話（ことば）」がある。詩とは、そのことばを口に出したものでしかない。てつとり早く言えば、一句の「真話」（a）に過ぎない。それを、儒者どもは虚飾を加え、難しくこねたがる。

儒者は則（すなは）ちまた特（た）だ生平に爛（らん）読せる万巻をもつて、因りてこれを与（あは）せこれを裁ちて章を成（つく）り、これを潤（かき）りて文を成る者なり（c）

生平——ふだん。爛読——乱読。

かれらの詩というのは、ふだん読みふけている万巻の書物の中から随意に切り継ぎした語句によって、一篇を飾り立てる。しかし

かれらに本物の詩は作れない。金聖嘆のこうした主張には、明の袁宏道（一五六八—一六一〇年）の性霊説の影響もあったのかもしれない。「性霊」とは、簡潔に言うならば、純粹な詩精神の巧まぬ表現である。試みに袁の一文を引いてみる。

弟の小修は……大都独り性霊を抒（の）べて格套（たう）に拘（とら）はれず、自己の胸臆（おく）より流れ出づるにあらずれば、筆を下さんことを肯（う）べなはず。時有りて情（こころ）境（ところ）と会（かな）はば、頃（けい）刻（こく）にして千言、水（かは）の東に注ぐがごとく、人をして魂を奪はれしむ《小修詩叙》

格套——常套、ありきたりの表現。
胸臆——胸のうち。肯——承知する、その気になる。境——場所、対象。会——致する、一つになる。頃刻——しばらく、わずかの時間。

ここに性霊説の一端を窺うことができる。が、金聖嘆の説は、袁宏道のようにスマートに体系づけられてはいないようである。かれの説く「真話」は、むしろ次に引く『詩経』（中国最古の詩集。紀元前一〇〇〇—六〇〇年頃の詩を集めたもので、現存する詩は三百五篇）の大序の説にいつそう近かつたのであるまいか。

詩とは志之（おもむ）く所（もの）なり。心に在（あ）つては志と為（な）り、言（こ

とばに発(い)ては詩と爲る。情(こころ)中(うち)に動いては言に形(あら)はる。言ひて足らず、故に嗟(さ)嘆す。嗟嘆して足らず、故に永嘆す。永嘆して足らず、手の舞ひ足の踏むを知(おほ)えす。

嗟嘆||唱和して続ける。永嘆||詠歌、声をながくして歌う。

そして、詩が「志」に拠るといふ見解は、これのみではない。『書経』(古代の帝王の政道を記録したもの)舜典に

詩は志を言ひ、歌は言を永(うた)ふ。

『礼記』(周の末・秦・漢時代の礼に関する諸説を集めたもの)樂記篇に

詩はその志を言ふなり。歌はその声を詠(うた)ふなり。

とあるほか、『莊子』(紀元前四世紀の道家の莊周の著)天下篇にも

詩はもつて志を道(い)ふ。

とあって、古代の中国人には普通のものであつたと言えよう。

聖嘆が卑俗な例を引いて詩を説明したその底には、当時の儒者に対して抱いていたコンプレックスに発した、銜学の匂いがしないこともない。筆者は江戸時代の、やはり儒者コンプレックスを持っていた曲亭馬琴(一七六七—一八四八年、『南総里見八犬伝』等の作者)のばあいを考へ合わせて、深い興味を覚える。

しかしながら、聖嘆の説明はオリジナルのものでなく、古代人のヒントに啓発されたところもあろう。

子夏の曰(い)はく、心に在つては志と爲り、言に発てては詩と爲る。故に「志」の字と爲るは、「之」に従ひ「心」に従ふ。心の之く所を謂(い)ふなり。「詩」の字と爲るは、「言」に従ひ「之」に従ふ。言の之く所を謂ふなりと(e)

子夏||孔子の弟子。謂||を意味する。などを、その証引とすることが出来る。

作法についても、聖嘆は同じ観点から言う。

詩はいかんぞ字句を限るべけん。詩とは人の心頭に忽(こつ)然するの一声なるのみ。婦人と孺(じゅ)子、晨(しん)朝と夜半を問はず、有らざる莫(な)し。今新生の孩(あかこ)有り。その目は未(いま)だこれを胸(またたか)すこと

あたはざるなり。その拳(こぶし)は未だこれを舒(ひら)くことあたはざるなり。而(しか)も手は支(の)び足は屈(か)がり、口中啞(あ)然たり。

弟(それがし)熟(つらつら)とこれを視(み)るに、これ固(もと)より詩なり(e)

字句||文字と語句。心頭忽然||心にふと浮かぶ。孺子||幼児。晨朝||早朝。新生||生まれて間なし。胸||瞬、まばたきをする。

舒||啓、ひらく。支||突き出ている。啞然||

||おぎゃあ。固||もちろん。

「詩はいかんぞ字句を限るべけん」詩はどうして文字や語句の制限をする必要があろう。

これは詩語の問題であり、詩体の問題である。詩のことはには古来、雅語を尊び俗語を忌む。それは詩情を剃き出したストレートな表現を嫌う心理に根ざすのであろう。また唐以後、

詩の形式は完全に定型化(五言あるいは七言の絶句・律詩・排律)してしまつた上に、作詩における約束事も増えている。たとへば、

宋の嚴羽(一二〇〇年ごろの人)の「滄浪詩話」には

詩を学ぶには先づ五俗を除く。一に俗体と曰(い)ひ、二に俗意と曰(い)ひ、三に俗句と曰(い)ひ、四に俗字と曰(い)ひ、五に俗韻と曰(い)ふ(詩法)

とある。「体」は形式、「意」は詩情、「句」は表現、「字」は用字・用語、「韻」はリズムを言うのであろう。

ところで、金聖嘆は、婦人であらうと幼児であらうと、だれでも一日のうち、心にふと浮かぶ詩想が必ずあり、それがことばとなつて口に出たのが詩であると主張する。学問をしない婦人や幼児は「雅字」「雅体」を知らず、したがって「雅句」「雅韻」は出来ず、それに「雅意」を抱くこともあるまい。それゆえ、かれらの詩は嚴羽の「五俗」をすべて犯すことになる。これは旧来の作法に照らせば、はなはだしい邪道である。

しかし、詩の生命は何よりも真実（聖嘆の語で言えば「真話」）である。真実であればこそ、よく人を感動させることができるのである。金聖嘆の言を借りて

詩を作るには、すべからずその心中の誠（誠にしか）りとする所の者（こと）を説（い）ふべく、すべからずその心中の同（とも）に然りとする所の者を説ふべし。心中の誠に然りとする所（こと）を説ふ。故によく筆（か）くに応（したが）ひて涙を滴らす。心中の同に然りとする所を説ふ。故によくわが詩を読む者をして、声に応ひて涙を滴らしむるなり。

誠然——真実そう感ずる。同然——共感する。応——随。

と説明することができる。生まれて間もない赤ん坊（「新生の孩」）も、立派に詩の素材となる。

金聖嘆の主張は、当時においては全く唐突なものとして受け取られたであろうが、まちがってはいなかった。現代の詩は生後間もないベビーに対しても、大きな関心を寄せる。永六輔の、あの『こんにちは赤ちゃん』（一九六三年）を例に挙げると、「あれは歌詞であって、詩ではない」とおっしゃる向きもあろうからまだ曲の付いていないものを紹介しよう。

モモコ抄

笑うとえくぼができるのですよ。
笑うとお乳に大声で泣いて怒るのですよ。

かあさんの報告は日ごとにふえる。新生児室の硝子のむこうのおまえに逢いに仕事かひけるとはくはまいにち産院に通う。そとはきょうも強い風が吹いている。

病棟の長い廊下のつきあたりのここはおまへの息であたたかい。

ぼくが後ろや横をむいているあいだにどこかへいってしまいいそなちいさなモモコ

あくびをするモモコ

やさしい女の子におなり。

逢った時間をまいにちあわせてみても二十分。

まだこの腕に出来ないおまへの重さを

父になって七日目のぼくはひとりの家を持つて帰る。

（西村博美『手袋を脱ぐ』、一九八二年五月刊）

抱かれている赤ん坊

高良留美子

抱かれている赤ん坊は歩かない。だから赤

ん坊は第一脚が発達しない。

抱かれている赤ん坊は歩かないからほかの

赤ん坊や玩具や犬にけつまづかない。ほか

の赤ん坊にはほかのおっぱいの匂いがついて

いるし、ほかの玩具にはほかの持主がいて

る。抱かれている赤ん坊はそんなことを何

にも知らない。よそのひとに対しては気の

弱い微笑を身につけるが、他人が何だか少

しも知らない。いつもあんまり近くにいろ

から、母親をよく見たことがない。だから大きくなっても母親については、そのあた

たかさ以外何にも憶えていない

（きょうせい『精選日本現代詩全集』一九八二年九月刊）

「真話」を忠実に文字に写そうとすると、定型はその妨げとなるのが少なくない。聖嘆はこの定型を軽視した。

心の之（おもむ）く所（もの）、これを志と謂（い）へり。言の之く所、ここに詩有り。故に詩なる者には、未だ口中の一声よりも多き外の者有らざるなり。唐の人は律を撰（つく）りて、勒（し）ひて天下の人をして必ずその五言八句或（ある）いは七言八句に就（したが）はしむ。若（も）し果して篇ごとに必ず八句、句ごとに必ず五言七言ならんには、これ豈（あ）にまた詩と称（よ）ぶことを得んや（e）

撰——造、就——従、豈——どうしてであろうか。

時代の進むとともに複雑になる詩想。これを定型に盛り込もうとして、幾多の詩人が腐心したことか。金聖嘆のこの発言には近代の自由詩を生んだ発想にも通うものがあり、貴重である。

山頭火とポーと啄木 (3)

草刈墮駄

東北本線が浜民村を少し北へすぎたあたり雑草の生い茂るにまかせた荒野に「やはらかに柳あをめる北上の 岸辺目に見ゆ泣け」とくに」の碑が立っていた。それはあたかも啄木の孤独と貧困の象徴のようであった。

啄木と交渉のあった村の人のなかには、この碑が建てられたとき、死んでのちまで人を騒がせると、露骨に悪意を示す者もいた。だが啄木が逝つて既に七十二年経つ。戦後この碑は岩手山が眺望できる小高い丘に新しく造りかえられた。

「岩手山 秋はふもとの三方の 野に満つる虫を何んと聴くらむ」

石川啄木は秀才であった。小学校はずっと首席、盛岡中学でも組で常に一、二位を争い、また安徳寺住職一楨の長男として尊敬された。中学時代、啄木は新詩社の社友となり短歌の投稿を続ける。十八歳のとき初めて一首が掲載された。啄木はますます文学に傾倒し、翌年同人に推薦されたのを機会に号を啄木とし

た。このころになると晶子女史の模倣はなくなり、あの啄木調の面影が少しくなる。

十九歳の年の暮れ父一楨は宗費未納のため住職を罷免される。一説では壇家との争いで還俗したとある。不発に終わった詩集の発行を試みて上京したときの借金もあって啄木一家は経済的に苦境におちいった。啄木は母校の代用教員を勤め月八円の収入を得る。だが生活は火の車であった。啄木結婚。ついに生活は破綻する。一楨が家出。口減らしのため父の奇妙なのは二度にわたって家出した。啄木が呼ぶと、函館まで一家をあげて下つたりすることだ。啄木の家族愛もさりながら、父と子の強い絆に胸があつくなる。「父と我 無言のままに秋の夜中並びて行きし故郷の路」

浜民は知らない、しかし、肩よせ合つて田舎路を黙々と歩む二人の姿が彷彿とする。

啄木は小説に精をだす、誇大妄想的で自分を天才と錯覚した少年時代の癖がぬけず、書けばすぐ売れると思っていた。

その当時、大信田金次郎にあてた手紙。借金を返さないの下斗米署に告発された、その釈明が書かれたもの。啄木の小説に対する期待がわかる。概略は目下「面影」と題する小説を脱稿した。それを小山内薫に送って金にしてもらふ。金がいいたら取敢ず五十金（五十円か？）を返済するというもの。長いので冒頭と終りのところだけ原文にした。

「兄よ兄よ、今此手紙を書くに当りて、私は抑々何の言葉も以て初むべきや」で書き出し、終りは「兄にして浜民村宛に御返事を賜らざる事三日ならば、恐らく小生は再び兄とこの世に相見る事なきに至らむ。願くば我を生かしめよ」仰々しい限りだ。陳謝する気があればこうペラペラとゆくまい。啄木のふてぶてしさを感ずる。

「石をもて追わるる如く ふるさとを出でしかなし 消ゆる時なし」啄木がなぜ浜民の人たちに他所者の如く白い目でみられたのか。忽然と離村したり、夜陰に乗じてひそかに帰村したりする一家の異様さ、貧しさ、金銭的不始末、そうしたもののが重なり合った結果の村八分だろうが、啄木の肺病は無視できない。いまでこそ肺病はなんでもない。しかし、当時は不治の伝染病として怖がられたものだ。啄木もそうした事情を感じていた風がある。「年ごとに肺病やみの殖えてゆく村に迎えし 若き医者かな」肺患の歌は他に三首ある。啄木は自分の歌のことを、極めて存在理由の少ないもの、と言っていた。

その啄木が「一握の砂」で名を成した。「悲しき玩具」は啄木の死の直前、金田一京助が出版契約をまとめ稿料を前借した。どちらも二十円であった。啄木は母かつの死後、その後を追うように十数日後、父と夫人、若山牧水にみとられて逝く。二十七歳であった。

硝子

北山越山選

ステンンドグラス天国を映す窓 硝子張り風の厳しさ知らず咲き
硝子越し愛を信じている別れ 大胆な女にさせるすり硝子
下町でビードロ吹いてる父の詩 寝ずに待つ妻をうつして硝子窓
遠き日の記憶ラムネの玉が鳴る 見栄張った硝子裏から覗かれる
硝子戸が民話ほろほろ消して行く 教会のステンンド硝子に愛がある
大きめの硝子の器愛を盛る 愛悲しグラスの底で紅く燃え
七彩に染まる硝子を飽かず見る 一片の硝子があばくドキュメント
パントマイム孫と別れのグラス越し ガラス張り世界が願う核戦争
廃校の時そのままの硝子窓 鮎茶屋の硝子の盃に鮎跳ねる
硝子玉でも愛情がものを言う 湯けむりのグラスに写る羅漢像
見透しの弥陀に硝子の数珠ならず フラスコで燐した時代の亡夫の酒
硝子戸に見栄を映しておんな春

ハミングが止んでコップの破れる音 硝子ごしはたん雪みて鍋つつく
白昼夢硝子の城の巨星落つ 死滅する硝子は派手な音でよし
玻璃の戸に真珠をこぼす春の雨 ガラス張り底に蠢く黒い影
ガラス張り大臣鍵をかけたがり 償いをする身に暗い窓硝子
黒枠の硝子に笑う父が居る 髪を梳く女に硝子の陽が斜め
口笛に今日は開かぬ硝子窓 口笛に今日は開かぬ硝子窓
ガラス切りにされたダイヤの不運なり 天の河覗く窓あり摩天楼
運勢を見透す易者の硝子玉 運勢を見透す易者の硝子玉

新人

井上喜醉選

新人の子役の芸に舌を巻く南恵美子 新人のバツジが光る春の風
一回目のデビューで消えて行く新人 俗っぽい話に新人顔そむけ
新人の行手冷たい風が舞う 新人の行手冷たい風が舞う
未熟さを笑顔でカバーする新人 恐いものない新人の勇み足
お茶汲みも新人だから耐えている 新人の美女に社内が活気づく
新人はまだ脱ぎ切れぬセーラ服 新人の靴音高いアスファルト
ジロジロと縦横斜めに眺められ あくる日に新人渾名がついている
新人賞その後は啼かず飛ばずいる 新人の長身包む紺スーツ
新人のネクタイ少し斜めです 新人の卵コロコロ宝塚
演壇に立てば新人失語症 美術展新人の座やはり隅
新人とわかる電話のうけごたえ 新人として大胆に脱いでいる
アイドルとなって新人スターの座

新人の愚痴が聞きたく共に飲む
女遊び 覚え 新人王 潰れ 八太朗

新人の素直な返事が好まれる
新人を連れて割り勘とも言えず 夢 素身郎

部員とは名ばかり新人球拾い
新人は制服ぬいでほつとする テルミ 三吉

新人の背中に重し背番号
伝統の名で新人はしごかれる はじめ 本蔭棒

最敬礼されて新人だと気付き
どれだけの新人残るかあみだくじ 千 秀

政界の新人髪に白いもの
新人の口から飛んで来た吹き矢 倫子 京子

新人が育たぬ虎の甘い鞭
新人は脊にされて歌わされ 公一 鶴子

新人の毬が怖いほど弾み
新人でシラノの鼻も恐れない 道子 高子

新人の技士でまごつく心電図
新人へ掃除のおばさんやさしい目 玉 恵

新人のフアイト知ってる靴の裏
新人のパワーでゆれる国技館 満津子 婦美子

新人の甘い許さぬ舞扇
新人の一步つま先から不安 静子 正坊

新人の眼が澄んでいる入社式
新人の心さわやかラムネ色 天 軸

新人の心さわやかラムネ色
新人の心さわやかラムネ色 天 軸

新人の心さわやかラムネ色
新人の心さわやかラムネ色 天 軸

重 い

三宅不朽選

重いとは言わずに唸るクレール車
スナックの前で荷物が重くなる カズエ

ハネムーン重いローンがお供する
北国へ単身赴任の重い靴 耕花

男気を出して重荷を背負わされ
重い口やおら開けば座が縮り 可住

肩の荷の重さを口にせぬ笑顔
両方をたてねばならぬ気の重さ 喜代子

初心者マーク顔みるまでの気の重さ
若いというだけで重たい方がくる 志津

傷つけぬ言葉を書き重たい口
貯金箱こんなに重いと孫が見せ 千 秀

妻と子の重さに耐えるヤジロペー
たった一つの嘘が重たい夜にする 満津子

雪吊りの重みに耐える美しさ
どう嘘をつこう重たい受話器とる 愛 論

重い荷を替りばんこに提げてあげ
家計簿に重い吐息が詰めてある 久仁於

初孫を重い重いと奪い合い
先生の荷物だ重いとも言わず 高子

耐えることばかりの嫁へ重い貨車
歳月の重みが孤児を悲しませ 落 児

歳月の重みが孤児を悲しませ
歳月の重みが孤児を悲しませ 雄々 冬子

天皇の帽子が重い春嵐
札束の重みで仮面ずれている 悠 枯

割箸の重さは母がいらない里
重い口開けば人を笑わせる 景 世

作戦を練り直して重たい馬場
お土産は軽くしてネと母は言い 虹 汀

定年の傘には重い春の雨
欲張ったみやげが重い乗換線 道 子

俵せは母乳を含む子の重さ
実印で紙一枚が重くなる 正 敏

ときどきは重いと云う夫婦なり
時間が経って重たい背の児 里 風

重いと云う重たい背の児
念押して聞くと返事が重くなる 七面山

重いからとて運搬を外される
窓際へ今日から座る重い足 伊津志

漬物の石の重さが母の味
沈黙の重さに負けるお人好し 秋 峰

大漁の重さをたぐる地引き網
重い荷を背負って牛の瞳のやさし 晴 彦

重い荷を背負って牛の瞳のやさし
目に見えぬ重みを耐える紳士録 多賀子

目に見えぬ重みを耐える紳士録
重い腰上げたら桜散っていた 規不風

重い腰上げたら桜散っていた
かかるとき箸の重さよ時の重さよ 宵 明

かかるとき箸の重さよ時の重さよ
かかるとき箸の重さよ時の重さよ 天 軸

かかるとき箸の重さよ時の重さよ
かかるとき箸の重さよ時の重さよ 天 軸

初歩教室

題「空」

阿 萬 萬 的

「空」という課題に対して、禪のころで
ある空を想像するのによし。また、むなしい
とか、そぞろしい事を句にするのも一考か
も知れない。こんな句があつた。

一切空されどきれいな空の青
ああ無情色即是空と酔いがさめ
即是空煩惱消せぬ六十路恥す
空しくも嘘で固める夜の蝶
だがやっぱり「そら」と読んだ句が多いの
が当り前かも知れないが、

国境のない空を飛ぶ渡り鳥
戦火の空かけ抜け燕とりつき
(国境のない空飛んで来たつばめ)
病床の窓から空へ四季を聞き
病む人の四角い空にある望み
病室の窓より空へ一人言
(病室の窓にも四季の空の色)

峠から見上げる空に謎がある
私は昔、大阪から奈良へ通する暗峠に立つ

サチコ
あや子

春 枝
山 久
輝 月

保 夫

た時しみと大和は謎に包まれた土地であ
るとの感じを深めるものであつた。

(峠から見る空大和は謎の国)

空模様出したり入れたり布団干し
空模様見ながら母が乾す布団)

若い恋青い空だけ知っている

(青い空だけが知ってる若い恋)

と天地を入れ替えてみました。

雪崩事故へへり飛び空は澄みわたり

(雪崩事故へへり飛び空の澄みわたり)

花曇りジョギングなど思い立ち

(花曇りふつとジョギング思い立ち)

夕焼けが心の奥まで沁みてる

(夕焼けが心の奥まで沁みてくる)

限りなく夢が広がる青い空

(青春の夢限りなく青い空)

冬空に風上げする子の赤い頬

(冬空に風上げをする子の赤い頬)

(空に風子は風の子赤い頬)

夏の空彩る花火皆が待つ

皆が待つの下五何とか他の言葉と変えてみ

たら。尚一考してみ下さい。

ノンチャンの童話かくした今日の空

「童話かくしたのかくしたは何を意味する

ものでしょうか、私には何とか他の言葉で救

つてみた感じがたのしいです。

定年で去る日の空は日本晴れ

(定年で去る日の空へ背伸びして)

西の空明日の馬場が気に懸る

(西の空明日の馬券を考える)

空だけは何時も悲しみ抱いてくれ

(空の大きき僕の悲しみ抱いてくれ)

シャツ白く洗って幸せ青い空

(幸せ一杯の青空へ乾すシャツの白)

空は青今日は胸中大掃除

(悩みみな空っぽ空が青いから)

空高く鳩も群れ飛ぶスポーツ祭

(運動会空の高さを鳩が飛ぶ)

母一人子一人空に夢を抱く

(母と子に星空があり夢があり)

露天風呂空の青さが湯に映える

下五を湯に「うつる」としてみては

夕べの空に異国の墓標群を見る

(墓標群の空に異国の墓標群を見る)

歩道橋渡るときと空を見る

(歩道橋向うの空が夕焼け)

雲一つない青空に風船飛ぶ

(糸切れた風船青い空へ飛び)

過疎の村こんなに空は青いけど

(こんなに青い空残つてた過疎の村)

ねぎ坊主見上げる空に掲げひばり

下五揚雲雀などの常套語の外に何かいいも

のはなかったでしょうか。例えば飛行雲など。

グライイターにルンルン気分で泳ぐ

(グライイターにルンルン気分で泳ぐ)

空の色映し湖風かなる

(空の青樹の青湖静かなる)

輝 月

よし津

芳 水

弧 舟

たかし

宏 安

八 太 朗

たかし

三 男

千代女

山 久

勝 美

寿美子

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

サチコ

飛行機が空に一本線を引き

千代女

(高原の空を区切った飛行雲)

輝月

飛行雲未知の世界へ虹かける

輝月

(飛行雲未知の世界へ線を引く)と下五をい
じってみましたかどうかでしょう。

空の青海の青にも騙される

たかし

騙されるの意味がどうしても私には解し
かねました。それで

(空の青人間の嘘小さいね)としてみました

が。

失恋に仰いだ空の広いこと

周 三

(失意の日仰いだ空の広いこと)

幸 泉

原句と意味は大分違ってしまいが、

幸 泉

(語り継ぐ民話にきれいな空があり)

寿 子

別れぎわ空の蒼さを昏に

寿 子

(別れぎわ余りに深い空の蒼)

克 子

故郷へ続く空を見ている失意

克 子

(故郷へ続く空を見ている失意の日)

八 太朗

声までもからりと晴れた今朝の空

八 太朗

(声までもからりと晴れた若い空)

里 子

大空の画布に銀翼弧を画く

里 子

(大空の画布にまっすぐ飛行雲)

克 子

麦笛を吸い込んだあの青い空

克 子

(麦笛を吸い込む故郷の青い空)

智恵子

春の陽へ土筆つくつく美しい

智恵子

(春の空へ土筆つくつく背伸びして)

兼治郎

春風に乗ってタンポポ空へ飛び

兼治郎

童心にかえる夕焼歌が出る
わらべ歌空を仰いで口ずさみ

照 子

(夕焼の空へ飛ばそうわらべ歌)

周 三

草焼きの煙たなびくなかの空

秀 子

(草焼きの煙へ民話の里の空)

周 三

花の外見えるものなし春の空
吉野の桜でも見ているような句ですわ。

芳 水

衣食住足って青空楽しいな

あや子

蜃気楼空の疑問が子を育て

秀 子

月のない夜空淋しさ増すばかり

秀 子

悲しみを乗り越えた空高く澄む

秀 子

天守閣仰げば高い高い空

やすお

青空も国会劇を笑っている

昭 治

子の門出見送る空がまぶしくて

昭 治

空と海分けて夕陽は今沈む

三 男

空から滋み信じて種を蒔き

久 子

アドバルーンに囲まれ狭い空

久 子

どこまでもこの世の旅は空の下

久 子

確定申告済まして仰ぐ青い空

三 男

大空と話し合ったら気が和み

吉 子

孤児の空祖国に星に夢つなぎ

あや子

大空に浮世のなやみ小さすぎ

年 代

空の蒼胸あけ放ち抱き寄せる

寿 子

職安を出るとどんより曇り空

保 夫

台風一過大阪にも空がある

ち 子

大空へ小さな愚痴は引つ込める

ち 子

退屈になったら空を見ていよう

やすお

良心のかけらが恥じる青い空

照 子

川柳塔社常任理事会 (4月1日)

出席者 葉・薫風・形水・紫香・太茂津・柳
宏子・萬の・文秋・鬼遊・天笑・雀踊子・凡
九郎・重人・笛子・智子・史好

《議事並びに報告事項》

▽川柳塔社の次代を担う若手との懇親会を3
月24日、八尾「日本海」で行い(23名出席)
更に31日本社事務所に句会部関係11名が集ま
り、本社句会の運営、9月の葉主幹お祝いの
会につき活発な意見の交換を行なった(天笑
氏より報告)

▽西日本川柳大会(9月1日弓削)、兵庫県
民川柳大会(8月18日淡路島)の選者に本社
より黒川紫香氏を推薦。

■5月の常任理事会は1日(水)



空ろなる壇輪の瞳にあるロマン 勝美
草に寝て過ぎし悔いだけ見える空 昭治
曇り空ポリウムあげてジャズを聞く 里子



題「水」 5月10日締切

ハガキに5句以内(6月号発表)

宛先 〒598

泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿 萬 萬 的

柳界展望

集録・板尾岳人

桜線

日・6月2日(日)

所・鳥取駅コンコースにて

AM 8・30分より受付

行先・若桜町 氷の山

参加費・二、五〇〇円

兼題Ⅱ足・守る・底力・レール 各題2句

投句先・鳥取市東大路64

岡川洋々宛

川柳列車第2弾です。何とか残したいと老えています。

★京都「塔の会」吟行句会

後援Ⅱ西宮北口川柳会・川柳わかやま

日・5月26日(日) 11時

所・妙心寺南門前集合

兼題Ⅱ瓢箪・拝む・びわ

会費・四千円

★和泉博人句集「夫婦若

車(川柳で乗って残そう若

日・6月2日(日) 11時

所・小松商工会議所

宿題

「人」

「洗」

「歌」

「岩」

「広い」

特別宿題Ⅱ事前投句

「夫婦」和泉 博人選

主催Ⅱこまつ川柳社

★故岸本水府句碑建立30周年記念Ⅱ川柳大会Ⅱ

日・5月12日(日) 9時

所・岡山県久世町中央公民館・大ホール

兼題Ⅱ詩・動く・光・美し

い・おどろく・計画

会費・二千円

主催Ⅱ久世川柳会

★川柳「路」59年年間賞

〈最高賞〉

銅葉楠 ゆっくり効かす添

加物 奥野 誠二氏

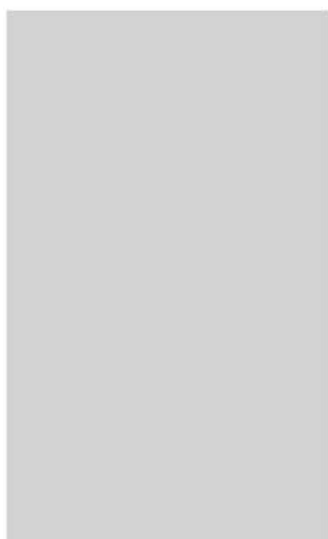
〈優秀賞〉

シェルターの真上でひらく

月見草 前橋多鶴子氏

★川柳・随想のあしどり

「卒寿の春」荒谷シゲヨ著



序文・山内静水「シゲヨさん、山内静水、いいえ川柳界の宝物です。日本一最高現役作家を目指してご精進下さいますことを祈念しております」と。60年3月発刊。

★第15回紋太忌・増井不二也追悼川柳大会に西尾某主幹外十三名が出席。主幹は「味」の選を披露。

★松岡三吉氏(同人)の還暦祝賀会が2月24日開催、同人多数参加盛会だった。

▽お便り△

■某主幹がもう喜寿のお祝いとはとてもお顔に見えま

せん。みんなが、あやからせていただき、何時までも元気で川柳の道を一歩ずつ進ませていただきますものと願っております。

(堀江 芳子)

■5月10日開講の中国新聞教室センターを目指し静水おそまきながら勉強しています。(山内 静水)

■長谷川霜鳥(恩師)の案内で市川市での川柳会へ出てみましたがさっぱり。私の句では東京では相手にされず、いろいろ考えさせられました。東京の川柳はやはり穿ちが主のようです。

新同人紹介

平松 かすみ

紫香・亜鈍・小路・柳宏子・薫風推薦

啞三味、迷亭、笛我氏の居
ない東京はやはり淋しいも
のでしたが、堀口北斗氏に
会えたのがせてもの慰め
となりました。

(工藤 甲吉)

■山陰にも春がやってまい
りました。こんな田舎でも
春めいてまいりますと、例
会と別に記念句会など続き
ます。
(石垣 花子)

■天王寺の国鉄の西日本川
柳大会に出席いたしました。
大阪と言えば遠い処のよう

に思つて仲々出掛けられま
せんが、元氣を出して出向
くこともと考えさせられま
した。
(井上柳五郎)

所・八尾神社境内西郷会館
兼題〓竹・遠足・やつぱり
・アイドル

所・豊中市立中央公民館
兼題〓橋・泣く・写真・
自由吟

日・5月27日(月)夕6時
所・寺田町 高松会館
兼題〓ことすけ・名案・緊
張・送る

■西宮北口川柳会

日・5月13日(月)昼1時
所・西宮中央公民館

日・5月25日(土)夕6時
所・東大阪市社会教育セン

■堺川柳会吟行

日・5月11・12日(土・日)

兼題〓闇・青空・自由吟

兼題〓化ける・ゆとり・楯
・対立

所・国民宿舎・新和歌ヨッ
ジ・13時(直接ロツジ
に集合)

■南大阪川柳會

日・5月19日(日)夕6時
所・寺田町 高松会館

兼題〓水車・踏切り・箸

会費・1泊2食 六千円
兼題〓ビール・友人・子約
・舌

兼題〓甘言・切る・見物・
草

■富柳会

日・5月23日(木)昼1時
所・富田林市立中央公民館

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

兼題〓水車・踏切り・箸

川柳塔社

物故同人(4)

55年〜59年

(前回は54年9月号)

■昭和55年

友湖貴山(2月22日)

田中狂二(3月25日・73歳)

八木摩太郎(4月2日・76歳)

大森娘司(4月23日・79歳)

吉野富子(5月)

若林草石(5月13日・84歳)

■昭和56年

中川晃男(1月21日)

戸田古方(2月1日・76歳)

麻生霞乃(3月24日・89歳)

小西無鬼(5月26日・77歳)

落合思月(6月16日)

佐伯越子(8月9日・53歳)

田垣方大(8月27日・71歳)

■昭和58年

浜田久米雄(2月15日・73歳)

田中淑子(4月13日・53歳)

伏見茂美(8月3日・71歳)

香川醉々(9月23日・64歳)

富岡淡舟(10月2日・70歳)

吉田圭井堂(11月4日・81歳)

堀内柳仙(11月10日・51歳)

村田瓢太(9月12日・68歳)

神田秀峰(10月22日・55歳)

西川善紫(12月1日・71歳)

河村日満(10月31日・69歳)

村上春巳(11月14日・54歳)

河村瑞川(12月2日・91歳)

中筋三幸(12月30日・63歳)

草深醉升(1月3日・74歳)

奥山弥山人(2月12日・77歳)

菊沢小松園(2月22日・80歳)

鈴木村颯子(2月23日・77歳)

伊藤茶仏(5月8日・79歳)

新岡回天子(6月25日・77歳)

若柳潮花(9月10日・77歳)

高木桃里(11月4日・73歳)

(集録・楓葉)

本社 四月句会

メンズフアッション
セクター(MFC)

四月八日(月)午後六時

今日は小・中高校の始業式。桜もちょうど満開、毎年のことながら希望に満ちあふれた街のたたずまいである。

句会部もイキのいい若手を加え、メンバー一新、また『呼名賞』を設けるなど句会運営の活性化を図ることになった。

59年度各地柳壇賞が児島与呂志句会部長から遠山可住氏に贈られ、今月のおはなしは、西田柳宏子氏。

日本に追いつけ、追い越せと経済発展に組んでいる韓国の代表的総合商社、三星商事の猛烈な新入社員特訓の模様を紹介され「これを川柳の社会におきかえて考えた時、川柳塔のぬるま湯の中でのんびりしては、進歩も成長もない。もったきびしく自己を見つめて精進しよう。かつて清水白柳さんから、『川柳の職人になるな』と言われたことがあるが、顧みて今日、惰性で句を作っているような気がする。私自身、苦しんで苦しんで句を

作らねばと反省している。」と自戒の弁で結ばれた。

呼名賞は堀端三男、大路美幸、吉川寿美の三氏。

今月の月間賞は阿萬萬の氏が獲得。(S)

(受付)冬葉・年代

(記録)射月芳・亜成・山久

(進行)天笑

出席者 栗・薫風・可住・冬葉・笛生・武庫坊・年代・重人・米朝・白溪子・一郎・紀雄・富士子・柳影・春蘭・右近・太茂津・満津子・達子・作二郎・凡九郎・悦郎・勝美・古都路・池田寿美子・寿馬・智子・節子・鬼遊・規不風・与呂志・亜成・文秋・頂留子・勝晴・形水・博泉・楓楽・千寿子・きみ・登志代・泰子・英壬子・寿美・吸江・久子・一二三・寿子・岳人・雀踊子・洋敏・みつ子・紫香・眉水・射月芳・蕉露・あいき・晴風・狸村・いゝゑゝはつ絵・隆二・柳宏子・章久・天笑・月子・千代・三・柳伸・美代子・美幸・萬の・三男・幸生・白兎・正坊・山久・美風景子・史好

席題「席」

遠山可住選

譲られた席照れ臭いやわらかさ
立席を覚悟帰郷の切符買う
腹の虫押えて席につく笑顔
森の鳥にも自分の席があり

太茂津
白溪子
悦郎
天笑

婦人帽二つが席を占めている
ワンマンの席は鬼門にしておこう
四面楚歌私にすわる席がない
想像がやがて悲劇に変わる席
すこしずつ義理がつもってくる酒席
貴賓席兎角の噂ある人も
乗り遅れ課長の席が逃げて行く
席蹴って去ぬ勇気だけ持っている
末席のまわりになさげが置いてある
指定席隣り合わせてからの仲
席替えて話がスラスラスラと済み
いつもの席に座っているから落ちつける
囑託の席で過去などしやべらない
一席のトップへ凝視の目が刺さる
駄ホラ吹く席がきまつている屋台
美人と隣り合せのロマンスカーの揺れ
その席に座れば席の顔になり
すこしやくやくと老人席を譲られる
席一つ開けて男と女の目
陽あたりがよくて首すじ寒い席
席譲る少年を見たうれしい日
窓際は人にゆずれぬ僕の席
いい席はちちははのため花むしろ
部長の席空いても俺が座れない
天下の席あり職が決まらない
教室の席次と違ふ運動会
肩書をとれば笑える席も出来
とまり木に涙の判る席がある
幸せになる日の席は君と決め

武庫坊
重人
頂留子
白兎
柳影
眉水
章久
月子
白兎
三男
白溪子
博泉
はつ絵
米朝
萬の
柳宏子
いゝゑ
太茂津
与呂志
鬼遊
一郎
狸村
美幸
文秋
きみ
みつ子
吸江
作二郎
山久

ロケットが席を狙っている不安
窓際の席で世間がよく見える
末席に居ると喜劇が見えてくる
末席の素直な声が怖くなる
団体の席漫才になめられる
温まる席ではないが義理がある
還暦へ妻と並んだ指定席

席題「ポケット」 萩田 千代三 選

ポケットのメモが嫌みな口をさき
春だからポケットベルを外しとく
ポケットの辞表そのまま職終る
ポケットの穴が別れた妻を恋う
ポケットの出番待ってる小銭たち
とても深いポケットだから好きという
ポケットのごみは知らない間に溜り
握手した手がポケットの石握る
ポケットの石は鳥恋う石である
ポケットのゴミを丸めて気を静め
ポケットが寒いネオンの街を抜け
鍵つ子のポケットいつも砂だらけ
小銭チャラチャラポケットも春の音
ポケットの紙幣を見つけた洗濯機
ポケットに姉の噂を入れたまま
ポケットのあなたをいつも確かめる
ポケットに仕舞えぬ傷が又疼く
ポケットに企みがある薄笑い
ポケットで石は謀反を考える
ポケットをたしかめくぐる縄のれん

登志代
重人
月子
三男
美房
年代
可住

頂留子
美代子
一 郎
きみ
春 蘭
年 代
文 秋
規不風
作二 郎
白 兎
鬼 遊
紫 香
太茂津
満津子
岳 人
柳 伸
米 朝
楓 楽
寿 馬
右 近

ポケットに悔いだけ溜まる帰り道
ポケットを探りハテナを連発す
ポケットで短気なだめている拳
ポケットの鍵が寄り道たしなめる
ポケットに秘めた心は明かさない
ポケットが浮気ばらした花名刺
二次会へポケットマネー思案する
男のポケット覗いてはいけません
ポケットに小銭パチンコでもするか
ポケットへいつも仕舞った母の笛
ポケットが多くて切符見当らぬ
合鍵がポケットにある午後の雨
ポケットの拳は誰にも見せられぬ
ポケットに笑い袋が入れてある
過去が飛び出しては困る内ポケツ
ポケットの小銭が気弱な声を出す
春風を掴んでポケツふくらます
ポケットにはいるベツトを見せたがり
ポケットへ掌を入れてみて諦める
ポケットになにも入れないソフト帽
ポケットの中で日銭が汗をかき
ポケットの両手はぬこう桜咲く
悔いひとつ内ポケツで喋り出す
貯まるのはポケツにある綿埃

みつ子
右 近
寿 美
登志代
狸 村
白 漢子
晴 風
冬 葉
萬 的
米 朝
紫 香
鬼 遊
美 幸
隆 二
白 兎
楓 楽
武庫坊
文 秋
鬼 遊
柳 伸
柳 宏子
柳 影
月 子
千代三

兼題「味」

宮尾 あいき 選

岩清水都会の喉に染みる味
番茶でも話弾んでいる美味さ
古のれん確かな味が受け継がれ

どんたく
滋 雀
千 秀

野村太茂津

古稀祝賀記念句会

日時 昭和60年5月12日(日)

午後1時より

場所 県民文化会館4F中集會室

(和歌山バス・県庁前下車)

おはなし

兼題「太い」 西田柳宏子氏

「帽子」 大矢 十郎選

「虹」 河内 天笑選

「茂る」 小出 智子選

「自由」 中田たつお選

席題なし 高杉 鬼遊選

各題三句・締切2時

会費 三百円

◇祝吟一句拝受

主催 川柳わかやま同人一同

ふる里の味は水にも空気にも
空き腹で食った彼の日の諸の味
裏切でしみじみ受けた人情味
松茸の味覚えていて久し
健康の味を奥歯で噛みしめる
味のある言葉が返る味な人
おふくろの味が売れてる寒い街
いつからか馴らされて来た妻の味
さしづさそれつ味はどうでもよい二人
新婚は何をたべてもうまい味
亡母しのぶよすがとなった隠し味
人間味に触れて遍路は島めぐる
苦勞人味な話をして帰る
うす味に妻の祈りがこめてある
旅帰りゆっくり茶漬け食べている
メモどおり入れてもとがぬ母の味
庶民には珍味となつてゆく鯨
新妻の味も我が家のレパートリー
お祭りが来ると出番の母の味
京の春のどかに五色豆の味
盛付と器で京の味をつけ
日々好日日に新しき妻の味
味のある言葉人柄滲んでる
笠智衆の飄々とした味に酔い
絶妙の味をふくんだ師の說話
菜の花の彩が一際味を添え
味のない私ひとりのめし茶碗
はんなりとおいしおすとは京の味
おしゃべりな女にさせる春の味

耕花 幸一 軒太楼 千代三 勝晴 章久 楓楽 紫香 三男 古都路 弘生 美幸 隆二 隆二 月子 頂留子 寿美 柳宏子 可住 萬的 武庫坊 規不風 三男 一二三 晴風 いわゑ 雀踊子 太茂津 萬的

路の臺2DKを春にする
女房の味しばらくは褒めておく
片隅に生きて古老の丸い味
手のひらのくぼみに落す味かげん
三食がうまい明日を信じよう
嫁が来て我家の味も若返り
兼題「返事」 吉岡美房選
落書の返事が書いてあるトイレ
ふる里の返事帰らぬグムの底
ハイハイとふたつ返事でほつとかれ
胃袋が返事している正午のベル
お月様返事下さい夜が明ける
流水の便りへ返す花祭り
なま返事してても心決つてる
サヨナラとボトルに返事書いておく
満開の桜へうかつな返事する
受けて立つ返事の文字は力んでる
俠氣が二つ返事をためらわず
四面楚歌本音で返事した不覚
三叉路で天の返事がまだ聞けぬ
生きてゆくその日その日にある返事
返事出しそびれて月が欠けてくる
恋唄に返事が欲しい波頭
生返事ここの夫婦も中だるみ
返事ない事が不安な母一人
反抗がふくらむ熟秘の正義感
ノックしてみたが返事のない扉
返信の筆海鳴りが進ませず

寿馬 亜成 美幸 雀踊子 楓楽 あいき 晴彦 秋峰 幸一 耕花 美幸 太茂津 登志代 蕉露 月子 登志代 寿美 幸生 楓楽 凡九郎 年代 紫香 隆二 いわゑ 規不風 泰子 一二三

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

廻廻し返事をしない訳がある
達筆におびえ返事を出しそびれ
生返事して鋒先を避けている
生返事自分を捨てない様に
語尾強く返し虚しい春の川
ことわりの返事は殊更言葉選る
良い返事有りそう今朝の茄子の艶
その返事戸惑っている喉仏
許してはるが怒っている見返
生返事ばかりして雨の午後
返事だけはよいが動かぬ父である
愛情へ綺麗な花が返事する
よそ行きの声でつれない返事する
十字路のポストに溜っている返事
母の背に許す返事が書いてある
月おぼろ背中合わせの生返事
よい返事はかりを積んだ父の貨車
お見合の返事が春の馬車で来る
歩をついて返事する間を一つ置く
生返事春は女を無知にする
こだましか返らず核はふえつづけ

作二郎 春蘭 智子 凡九郎 冬葉 登志代 千寿子 柳影 悦郎 月子 萬的 柳宏子 武庫坊 泰子 節子 栗 岳人 寿美 白兔 萬的 美房

兼題「混じる」

神谷 凡九郎 選

A型もB型もいるパチンコ屋
ズブの素人も混じってる審査席
雑種の血混じって向う見ずの大
日本語が混じると親善らしくなる
内通者混ぜる手筈が誤算する
この先の命へ混じる子の論血
混血でなかったことを娘が恨み
二級酒が混じると舌がよく回り
福引の一等賞はいつ混じる
街の灯に混ざると他人になつて行く
田舎弁混ぜてばやいた父の酒
絵の具皿白が混じると母の彩
ミキサーに任すセメント砂と水
混ぜ返す奴が知ってる泣きどころ
混紡で案じた程は縮まない
敵陣に混じって拍手だけはする
人類は愛混血の美わしき
混血児平和の使徒になる運命
群衆に混じって記者という孤独
毒舌に混じるぬくみをさりげなく
雑音で示談が混線しています
明暗の混じる懺悔をする女
混ぜている内に突然変異する
混じること赦さぬ愛はひと彩で
荒壁の土を混ぜてる春の水
混じってる花が真赤に燃えている
群衆に混じると私に顔がない

重人 天笑 萬馬 壽馬 武庫坊 秋峰 幸一 月子 久子 可住 柳右子 眉水 規不風 文秋 紫香 寿馬 弘生 千寿子 幸生 寿美 悦郎 射月芳 寿子 英子 悦郎 雀踊子

この指たかれ混じらぬひとりは鬼の子だ
島の子に混つて夕焼見てるうた
気晴しにかごめかごめの輪に混じる
善悪を混ぜ平均で生きてゆく
なんやかや混じって人生信じてる
夕焼けに明日の彩が混じり出し
春を呼ぶ街に混じって春買いに
水と油混じりきれない誇りもつ
梗少し混じてた里の祝餅
配色を混ぜて女は満ち足りる
俺みたいなのも混じってる表彰式
そして朱を抽象的に混ぜておく
黒いのも混じる金魚の美しさ
人間やナコンな時にも雑念が

兼題「麻酔」

大坂形水 選

全身の麻酔で組上の鯉となり
麻酔からさめてもナースの手を握り
麻酔から醒めたこの世にある地獄
半身麻酔意識はいやに湧えてくる
酒という麻酔で父を眠らせる
しのび足麻酔はとうにさめている
お喋りを局部麻酔で黙らせる
役人の麻酔は少し強い目に
麻酔打つ医者を信じるほかは無い
麻酔銃甘い言葉を囁かれ
妻の手の温みで麻酔とけはじめ
すがりつく記憶麻酔がひき離す
ここはどこでつかと麻酔されてくる

雀踊子 萬代子 美代子 武庫坊 岳人 吸江 みつ子 勝美 久子 天笑 智子 笛生 凡九郎 岳人 柳宏子 白兎 年代 泰近 右近 鬼遊 萬馬 武庫坊 右近 天笑 智子 眉水 洋敏 泰子 柳伸 美幸 月子 白兎 二三 作二 紫香 作二 射月芳 悦郎 萬代子 形水

手品師の鳩は麻酔にだまされぬ
麻酔切れたらしい瞳に安堵する
麻酔が切れて女にも切れている
麻酔して水子の罪を軽くする
麻酔から醒めると未来が開けてた
麻酔さめ生きている幸をしみじみと
妻でない人の麻酔が効いてくる
局部麻酔歯医者あつさり奥歯抜く
麻酔からさめると妻が笑つて来
母の名を洩らして麻酔さめて来る
トライした瞬間麻酔切れてくる
春愁や恋の麻酔に酔っている
夏が来て麻酔が欲しいカブト虫
麻酔から覚めると急に腹が減る
イボ一つとるに麻酔の世話になり
疵口の麻酔に母のおまじない
アフリカの象が覚えた麻酔銃
麻酔さめ生きねばならぬ眼を開く
麻酔から醒めると女神侍つてはり
麻酔から覚めてリングを剥いている
全身麻酔涅槃のような型で寝る
局部麻酔に黄色い薔薇が届く朝
局部麻酔医者の話を聞きながら
麻酔さめたら旅に出ようと思つて
麻酔から醒めると胃袋取れた
麻酔から醒めると葱に似た匂い
麻酔薬記憶は白いものばかり
あわやという時ヒロインの麻酔覚め

岳人 柳宏子 白兎 年代 泰近 右近 鬼遊 萬馬 武庫坊 右近 天笑 智子 眉水 洋敏 泰子 柳伸 美幸 月子 白兎 二三 作二 紫香 作二 射月芳 悦郎 萬代子 形水

(清記・楓葉)

高槻川柳サークル卯乃花

発会一周年記念川柳大会

日時 昭和60年5月16日(木)

11時開場：出句締切午後1時

場所 高槻市市民会館4階四〇二号

大集会室(阪急電車高槻市駅下車南へ徒歩五分)

会費 五〇〇円

おはなし

黒川 紫香

題と選者(各題二句)

白い 辻 白溪子選

遊ぶ 高杉 鬼遊選

的眼鏡 松川 杜的選

真ん中 河合 鼓城選

水 中尾 藻介選

昔 森中恵美子選

岩井 三窓選

欠席投句は、切手二百円同封左記へ

高槻市桜ヶ丘北町B-19

辻 白溪子宛

連絡先 〒569 高槻市明野町一五-二七

上原 逸方

電話(〇七二)七一一〇八八六

主催 高槻川柳サークル卯乃花

尼崎 春の川柳大会

とき 昭和60年5月19日(日)12時30分

ところ サンビック尼崎

「阪神尼崎」より南西へ徒歩3分(200m)

(注) 各ターミナルから「阪神尼崎」行のバスをご利用下さい。

題と選者

「笛」 森田 栄一選

「絵」 榎谷 寿馬選

「彩」 海士 天樹選

「石」 森中恵美子選

「窓」 室田 千尋選

「風」 伊東 静夢選

席題一題・各題2句

締切1時半・欠席投句拝辞

六百元(作品集呈)

賞 各題秀句及び準秀に呈賞

主催 尼崎川柳同好会

協賛 川柳アトリエの会

いくしま川柳会

おはま川柳会

ひろば川柳会

南海電鉄創業百周年

記念川柳大会

日時 昭和60年5月19日(日)10時開場

会場 南海会館ビル内南海電鉄(株)

本社地下食堂

(ナンバ高島屋百貨店南東角)

電話(06)644-7035(広井宛)

電話(06)644-7048(当日のみ)

兼題

「南」 選

「海」 選

「電車」 選

「創立」 選

「記念」 飯田 悦郎選

席題 一題 各題3句・締切11時30分

参加賞・三賞・南海電鉄杯あり

会費 千三百円(作品集・軽食呈)

投句 三百円・5月15日必着

投句先 〒542 大阪市南区難波5丁目

1-60

南海電鉄(株)不動産管理部管理課

広井 季雄宛

南海電鉄川柳部

老地神壇

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

堺川柳会（前月分）

河内

月子報

からんでも落ちすふんばる夫婦風
子の行方ばかり見ている母の風
親と子が同じ目線で風を上戸
電線の風を笑いに来るからす
ぬくい絆が飛べない風にしてしまふ
小さな波紋ですます石を選ぶ
小ジョッキぐらいと妻もうれしい日
それから小さい方にするつづら
小さい小さい落の臺から春を告げ
小さい花きつと小さい実を結ぶ
雪だるまだんだん小さくなる陽ざし
ひと言が気になり出して眠れない
ありがとうそのひと言で和を保ち
勇気あるひと言丸い橋渡る
ひと言で駄目な男にされている
不発弾みたいな一言抱いている
ぎりぎりを耐えた愛なら許される
ぎりぎりの暮しをボチも心得る
ぎりぎりの生活に耐えた老婆の髪

武庫坊 幸 半 年 代 緑 良 笑 痴 月 子 与 呂 志 草 生 柳 右 子 秋 風 金 三 郎 柳 伸 天 笑 美 房 耕 花 柳 宏 子

幸せな顔でのものであるやせ葉
遮断機の向こう他人の顔の妻
改札を顔で通つてはばからず
怪人を名乗る男に顔がない
おなじ酒飲み赤い顔青い顔
手相にも顔にも金運出てくれず
言いたい放題言つた寝顔には見えず
寄附集め四の五言わさぬ顔がくる
知らん顔して聞き耳をたてている
嘘のない顔が鏡の中にいる
叱られた顔を洗いにくぐる酒
顔が効くだけのおごつた言わす
免許証の写真がもつちに食わぬ
千秋楽の切符が入る顔を持ち
似顔絵は少し美人に書いてくれ
お祈りをしている顔は真人間
ジャンケンの顔をまじまじ見つめあい
むつかしい顔をしている仏壇屋
手相より顔をじっくり眺められ
二次会で生活の顔が出てしまひ
道化師の素顔は知らぬままでよい
幼な子も思いを遂げた顔はよし
大空をかきめくりたい飾り風

川柳化粧櫓

植村客遊子報

敏 紀 美 女 天 鳳 一 二 三 邦 晴 凡 子 甘 平 梢 五 月 鬼 遊 紫 香 幸 生 青 舟 小 雪 素 灯 菓 岳 人 東 雲 花 仔 妻 子 薰 風 千 万 子 大 鷹 岳 詩 実 男 葉 香 紅 月 越 山 礎 石

人生の途中にもあるひと休み
あれこれと言わぬ男の意地をみる
雪解けのぬくもり伝える猫柳
お水取りクライマックス二月昼
旧姓で呼びクラス会まだ果てず
胸に棲む二十歳の影のままだ
どんと焼き家内安全祈つとく
トンネルを抜けて一面銀世界
歯ぶらしがようやくやさしい小正月
ラジコンで遊ぶ時だけ孫静か
熱燗が一本ついて雪の宿
ジョニ黒とジョニ赤使い分けられる
川柳後案 井上柳五郎報

悲 子 秋 信 み つ 子 サ ワ 子 孝 榮 は つ 子 み ね 子 と し ま さ 子 輝 月 永 楽 客 遊 子 幸 好 番 茶 進 桃 風 草 風 勉 博 友 紫 峰 佐 加 恵 敏 昭 哲 郎 健 一 満 青 銅 吟 平 た け 志 玉 水 弘 隆

受け皿に甘い言葉が盛ってあり
地下足袋に賭けた受皿抱き締める
受皿のひびを知らずにいた誤算
ストレスの受皿海鳴りもつとなく

聴障川柳

稲田

嘘一つ母の背中に裁かれる

雪だるま裁かれる夜の雨の音

苦心した構図 袂に裁かれる

良心に裁かれてゐる日の痛み

裁かれて浮世の風にひとり泣く

嘘もよい天の裁きが待っている

悪い奴が裁かれると聞き胸がすき

あの人が思わぬ人が裁かれる

人が人裁くことは出来ぬ苦

国民が裁き見守るロッキード

裁かれて可愛い坊やアカンベする

裁かれる人より孤独な裁く人

ネオン街男を裁く朱い唇

川柳塔唐津支部

久保

何事もなくてエリートコース行く

妻の咳たばこ遠慮も七日たち

釈迦の知恵耳半分で無骨者

故郷に母が居るから足が向き

日曜は十時に妻が主婦になる

学歴の何の怖からセールスマン

リユーマチが腰に來たかと身も凍る

春一番天満宮は傘の波

日本の花だと桜肩を張り

失礼と前置きしてのまくしたて

符さへ還らぬ島を北に持ち

送り出す妻が離さぬ紐と轆

進平

恒洋

柳五郎

照路

豊作

鼓草

八重子

三代子

たかお

儀一

加代

原田

春一

鉄火

承平

みつる

文古

豊作

正敏

あき

素石

朴竜

彩女

四郎

高明

ちよ

義美

虹汀

広幸

久仁於

正敏

倉吉川柳会

渡辺

昔句報

「許したろ」流行り言葉を塗り替える

カラオケで祭の客も唄わされ

カラオケに任せ一息するガイド

カラオケを持ってまで来る祭客

図書館の辞典なかなか順がこす

カラオケが唄え唄えと攻めたてる

古辞典肝心なとこ破れてる

神様の辞典に核はきつとない

困らせる人に尽くすも身の因果

純牛の運ぶ荷物は狂わない

牛を飼う女が辞典持っている

カラオケで海の男と冬を飲む

年輪でますます辞書が厚くなり

カラオケで高丁の娘見直させ

自画像に困る答えが一つある

逆立ちで糞ころがしが餌運ぶ

カラオケにレジスタンスを吐き捨てる

厨には母の辞典が置いてある

辞典には載っていないので風に聞く

原色がはやる平和のしるしなり

標的の最短距離に辞典置く

水割りに困った顔をさらけだす

運び屋が宅急便と名が変わる

ふんわりと春の花屋が香を運ぶ

カラオケ騒音隣ばかりが楽しそう

夜行列車は夢を運んだりはない

自分の鳴き声に困っている鴉

運び屋の風に媚びてる沈丁花

困ってる話を位牌にも言わぬ

川柳しんぐう

川上

漢水報

動き出す街へ戦の靴をはく

精一杯動いて不安を振り払う

眼がさめて手足の動き今日の幸

動くから興味をもった幼児の眼

新しいいのちが動く岩田帯

子の夢に染めかえられてゆく老後

泥に生きた泥に染まらぬ蓮の意地

染め賃の高さを聞いて持ち帰り

保護色に染まって意気地のない構え

お互いに染まって夫婦の彩が出来

帯きゆつと締めて思いを断ちきう

ほんとうの思い追伸の二三行

思い出を辿ると母の膝がある

思い通りにならぬからみな生きて

芽が吹いてあああの種かと思ひ出し

永遠の流れを流は信じきる

天候でやせたり肥えたり那智の滝

せせらぎの水も大滝めざして

厳冬の滝に打たれて散る邪念

滝壺の底に伝説眠ってる

川柳大阪

井上

死金は出さぬ浪速のド根性

たこ焼のうまさ生活にある浪速

軍配は浪速に拳が旅の味

どん底を浪速で生きて暖かい

海へ浮く空港浪速の未来像

商の都浪速にある活気

五十年浪速に住んだ大阪弁

お人好し浪速生まれのまま喋り

福笹の波に浪速の景気揺れ

平和な火のように見えてる原子力

雀踊子

正博

正香

紫良

平良

緑雄

武雄

十郎

登志代

博代

英子

静歩

まさ子

大輪

テルミ

富子

八千代

えつこ

利次

溪水

喜酔報

柳弘

一介

比呂志

みつる

喜酔

天平

三十四

与呂志

洛酔

司

鈍行の父に平和な地図がある
 大國のはざまで平和ゆれ動き
 小錦が負けて平和な国技館
 二十回殺される武器がある平和
 瘦せ薬とても平和な顔で飲み
 明徳の春を奪った恩師たち
 雪どけの木々の新芽も春を待ち
 地下街も春らしくミニ闊歩する
 さわがし屋根の野良猫春を知り
 清流に跳ねる銀鱗春を呼び
 早春の海辺で老婆コンパ摘む
 お水取り終れば古都に春が来る
 後悔と借金残しレース済む
 人生のレーススタートする二十歳
 勝負師が最終レースに賭けている
 死ぬまでがレース秒針も動いてる
 産声はレースのスタート幸祈る
 堀端
 川柳わかやま
 死ぬほどの想いを染める紫に
 大内山の煙は紫色に見え
 ゆずられた母の紫まだ着れず
 紫が似合い淋しい顔をする
 紫の冷えを心に着せている
 紫外線を諸にうける野良仕事
 黄昏の意識がなぜか胸を這う
 からっぱの胸をバチンコ玉笑う
 まだ胸に一物もって妻の舟
 愛すればこそ見破って欲しい胸
 本当に泣きたい胸は別にある
 手のひらに胸の思いも書いておく
 うすい胸へきつちり詰めた計りごと

笑風 金太 金太 本蔭棒 重人 卓 辰男 一舟 醉舟 醉玉 好栽 正流 虎醉吟 雅巢 敏 凡九郎 鉄心 三男報 柳宏子 久子 桂香 千寿子 三千代 芳朗 武雄 豊太 克子 紫香 英子

胸元にいつも獲物をぶらさげる
 恋人の胸までつづく線路かな
 胸元で男のグチが上下する
 苦肉の策重ねて罪が重くなる
 一日を重ねてまアるくなった石
 手探りを重ね小さな和に凭れ
 屈折をかさねかさねていぶし銀
 罪を重くつ重ねて水の顔に逢いに行く
 石を重くする度に男の顔が出来
 おさな児のマナヘ母を重ね見る
 童顔を重ねて白髪思ひ出し
 無駄な日を重ね消ゴム焦り出す
 ひたすらに重ねかさねた輪島塗
 たわむれを言うて悲しみ耐えている
 たわむれでないから胸が騒ぎだす
 たわむれて見たい今でも遅くない
 たわむれる蝶に許した甘い蜜
 たわむれるに編んだドラマが踊り出す
 春だからたわむれに鈴振つてみる
 たわむれてなくて見つめる海がある
 たわむれの誘いに紅を一寸濃く
 たわむれの言葉と今も信じない
 たわむれてみて悲しくなる別れ
 たわむれて押しボタンに悔い残る
 たわむれて女心をささぐって
 たわむれる小石うわさの種を蒔く
 たわむれる所作にも育ち争えぬ
 川柳高知
 根気よく編んでほいて足る女
 わだかまり捨てて方程式が解け
 雪国の知恵ひとつずつ教えられ

太茂津 道夫 緑良 正己 俊平 きみ 栄美子 雀踊子 萬的 登志代 正博 紀久子 信子 雅子 信秋 忠雄 天彦 公子 幸 狂虎 寿美子 光代 愛子 紀美女 三枝子 正三 三男 松風報 康子 広風 春枝

コンバクト開き女の性となり
 また損な立場になったお人良し
 約束を小指がさせたしのび逢い
 尺貫法今も和裁の鯨尺
 奴隷俺に未来のあった頃
 伸び切った下着のゴムも独り者
 歳月の早さとまどう孫の数
 早いもの満期忘れていた保険
 歳月の早さに今日が長すぎる
 制服の足首がでる子の育ち
 早春の梅が綻ぶ高知城
 上手下手女をはめる言葉にも
 川柳泉尾
 歩きたい道は一ぱいある青春
 四十年地道に歩き門を去り
 山道を歩く一歩一歩あるく
 逢えるよな気がしていつもの散歩道
 人生はマラソンかけ足歩くあり
 留袖の妻を見直す菊日和
 結城より心を袖で飾りたい
 青春の思い出のこす花言葉
 日溜りで土すれすれにすみれ草
 カタカナの花を花屋で買つて来る
 核の灰枯木に花は咲きません
 いい便り来ると信じたい花言葉
 三枚目の舌で一％の答弁
 サークル樺櫨(親心寺観梅句会)田形美緒報
 重い荷を置いて息つく母の老い
 首塚のあたりを梅の香が包む
 うっそうの樹木に枝垂れ梅点る
 建掛塔未完に仰ぐかやの屋根

岩男 弘生 和興 みどり 佳風 菊野 千鳥 竹萌 幸泉 三吉 朱坊 松風 昭子 シメ子 弘子 文子 多和子 道子 淑子 シマ子 伴子 敏 恭子 美代子 白水 登美子 美房 稔 美緒

梅の香の雨後ほのかなる観心寺
あわす手に仕合せ深く畳みこみ
観心寺楠公ゆかりの破軍星
平安の昔しのびて菩薩見る
悪心を見透かすように天の邪鬼
ねころんで何を見てるか天の邪鬼
重い心にも早春は戸をたたく
衝動買い帰りの足は重くなり
重い荷をおろしバランス崩れ出す
夕暮れに人恋う風情梅一輪
探梅に大楠公という地酒

川柳ひらい 行吉

うつむいて少しびり口晴れ姿
食卓を囲みアフリカの飢餓憂う
鍋囲みふうふうふうとカラス口
大将が浮足立っては総崩れ
監督を囲んだヒップは逞しく
囲む旗やぐら太鼓で目をさます
一二三月教育ママに入試攻め
まあいいさ一人で乗ってる騙し舟
春風の誘いにのった竹トンボ
皿洗う達者な母の背が丸い
父の汗母の希望を娘は飾り
鍋囲む湯気の向うにこぼれる菌
浮雲が見える小窓を開けて病み
浮草のようにならず女の目
妻が浮く月に一度の給料日
亡父の書を飾って亡父に叱られる
飾るもの無くてうれしい新世帯
千大根今年も届き母達者
お達者でと口ぐせの人が先に逝き

雅子 智恵子 登志実 千代女 よし子 千鶴男 森子 美子 泰子 三四子 薫風

照路報

柏峯 真佐緒 トモ子 栄翁 美代志 かずを とまゑ 愛子 博 敏和 方巳 やすえ せつ子 良一 胤親 寿子 美佐保 幸江

自慢の子囲みはろ酔う老いの父
とばとばと歩くアヒルのかくれんぼ
生き残る蠅一匹も日向ぼこ
薄情な男は追わぬ火縄銃
春日和料理囲みて梅としやれ
よつしやこいまた達者と腕すもつ
かごめかごめ鬼を囲んだ靴がなる
飾らない言葉が生んだ明と暗
無駄骨を折った背信かも知れず
高砂の虚飾の宴に酔うてくる
不燃物埋める大地が下痢をする
日照権もうあきらめたビルの谷
粗食こそ達者の秘訣と論さされる

京都塔の会 松川 杜的報

外出がちくはぐになる年の暮
ポインセチア私一人のクリスマス
母居ます幸せもらいもつ六十路
胃検診はつと一息句会待つ
四捨五入365日切り捨てて
見せ物のコアラ仮病は使うまい
他人ばかり指したがる指たしなめる
分る分ると祭り上げられている
正月のごみは蜜柑の皮ばかり
妻一人信じみかんの皮とくなる
童話読むこたつみかんの皮とくなる
山積のみかんめてみかんの筋とわり
よくしやべる女でみかんの筋とらぬ
学歴の差がきばつても追いつけず
電池切れ玩具きばつた形のまま
家中で孫のきばつたうちみる
一日を軍手できばつてきた汚れ

千恵子 アヒル 志寿子 典子 辰路 孝子 年子 柳五郎 博友 青銅 草風 真備雄 照路 杜的報 芳代子 花代子 年代

明代 求芽 鼓城 白溪子 紫香 笛珠 紅陽 水客 はつ絵 和友 花村 栄

美しく老いた妻のレオタード
夢だった亡妻の笑顔が美しく
美しい声で期待をさえきられ
歯の治療終ると美人の顔になる
たこ焼をバクつく美人で親しまれ
川柳きやら木 石垣 花子報
御自由により形で運を決め
聞えない振りした耳の聞き上手
ひっそりと情けの耳の笠地蔵
甘い言葉だけ聞いている耳飾り
春の私語ふたつの耳へためておく
白い梅泣かせてならぬ亡母の耳
友達のお痴も親味で聞いてあげ
聞く耳を持たない人の聞く話

飛鳥 冬子 葉子 武庫坊 杜的 花子報 朗子 てい子 夕子 玲子 伊都 寿美子 時子 富美子

佳句地10選 (前月号から) 小出智子選

マネキンも夜は毛皮を脱ぎたから 春江
最初から聞けばよかった母の知恵 孝華
開けゆく街にパン屋の店ができ まさお
損のない話相槌うつっている 婦美子
どのベンにかえてもやっぱり僕の文字 正坊
聞かせたい聞かせたくない独りごと 今日子
保険する妻がだんだん恐くなる はじ芽
子育てを終えた女のひとりごと 一郎
正直に言えばみんなが笑うだろ ノブ
一年がこんなに早い五十路すぎ まさる

春一番窓をたたいて耳うちす
補聴器をしてから世間広くなり

耳深く覆った帽子冬の影

寝たふりでボチは両耳立てている

さきわけてくれる大きな耳さがす

耳の栓抜いて女は門をあけ

語り部に耳は素直についていく

ポケットの中の鬼にも耳はある

午後からの耳に棲みつゝ父の咳

は咳いて仁王の耳の傾けり

卯の花句会

辻

白溪子報

節分の膳にいわしが幅さかす

鯛また話題にのぼる大漁の日

生姜煮の鯛は遠い亡母の味

熱燗がいなといわし焼いている

いわしの背波間の色に冴える藍

白壁の旅愁に流れるいわし雲

芸の枷光るいわしに満ち足りる

円形水槽ボスのいわしがこつち向く

いわし屋の声も通った路地に住む

都合よく風邪を引いている音痴

道問えば方向音痴へ西東

うぐいすも調子はずれの鳴きははじめ

ハナ歌も音痴はやっぱり外れてる

春風に方向音痴の蝶が舞う

爆笑の中で音痴のはるみ節

旅楽し少し音痴のバスガイド

歌詞に酔い涙で歌っている音痴

味音痴地酒の味は知っている

親ゆずりの音痴と夫婦笑い合う

冗談で済めばと思う過去もある

地球かて冗談するかも判らんよ

冗談の尻尾噛まれている上司

冗談にかこつけ本音打ちあける

冗談ですめば都合のよい言葉

冗談がふつと男の傷に触れる

熟年の本音は冗談から洩れる

冗談へ掃除洗濯しに來られ

冗談が言える夫婦のしじみ汁

冗談が本気が妻のひとりごと

白髪にうつすら紅が似合つて

雛飾り五月人形が追いかける

春を呼ぶ風にコートが重くなり

合格が居間に戻つて春が来る

汗かきも寒がりもいる羅漢さま

叩くのはよそつ飛べない冬の蠅

ハンケチを男が振ればなま臭い

振り向かぬ女に雪が降りしきる

川柳たけはら

森井

ばれんたいんおともらつてうれしがお

ちようちようはなんでぞらとべる

おばあちゃんかねがにあうとらないで

グリーンタイムはしても手がおたみだい

グリーンタイムはしても手がこたみだい

タイミンはずるとボール飛んでつた

学校の帰りとはと石をける

目さましのなるたび手だけが起きている

とんと燃ゆるもえろ燃えろ天までも

お母さんかぜに負けるなほぐがいる

災いの入り口つくる気のゆるみ

楽しみはスキー教室の一泊よ

お父さん出張という冷えた朝

凡九郎

さち子

柳影

逸

花村

和江

鬼遊

如洲

一郎

房子

陽露子

よ志子

あき子

花芽

求子

花代子

秀男

恵美子

青居報

五歳史子

五歳昌子

小二裕子

小一あきみ

小一はるみ

小四純平

小二由博

小五美保

小六早代

中一仁昭

小五重貴子

中一恵子

必勝のはちまきしめる手がふるえ

ファイトファイトはクラブのおかけかも

心配をよそに受験の一人旅

母と娘のとりのめのない長電話

三畳の部屋でコケシと話す午後

ひょうきんな子に救われる日が続く

さあ中学少年剣士の曲り角

希望ただ一日一日をガンと生き

運天に任せてからの進む食

おしやべり奮いつかは風化するだろう

風邪三日台所からかたづけ

口下手の男にだつてある持論

おしやべりが過ぎたと思つ冬いちご

計報聞く陽は真つ正面にあり

湯上がりにはアロエバツクの期待感

旅の宿お顔は知らぬ句と出会う

美容院でガンの話を聞かされる

首輪のない犬ゆうゆう赤を渡る

小説のヒロインとなる雪の宵

福祉国家の看板が泣く防衛費

人柄を信じて押した判のつけ

核心をつけば若いといなされる

辛抱しはくち切り札はちゃんとする

立志抱はんくち切り札はちゃんとする

立志抱はんくち切り札はちゃんとする

勉強に飽くと鉛筆削り出す

鉛筆をなめる富山の置きぐすり

鉛筆をかんで小さな思案する

鉛筆を持つ手がほぐすわだかまり

傾いた独楽鉛筆をもて遊ぶ

半分の鉛筆嘆くゴミ捨て場

中三紀

高三愛

浄美

蘭幸

房居

静水

比呂子

鈍舟

令子

節夫

観杏

笑子

敬子

淑子

貞子

康子

博子

シゲヨ

静佳

酉合

礼子

白狐

恒松

町紅報

秀子

ノブ

春梢

芳枝

正江

チトセ

幾千里隔てられても天の川
福は内輸入の豆を播いており
古稀歌う雲に聳える紀元節

陸橋でエス愛を説く女
目もかけぬ春蘭咲いていとおしむ
登つて登つて寄附した鳥居に会う伏見

台風が弓なりになる日本島
初午ののぼりはたたくヒルの上
風紋のままにはりたる薄氷
さりげなく杖くらし人あり古参道
なけなしの愛を募金箱に入れる

川柳ささやま 脇田 米朝

二代目になって顔ぶれ変り出し
顔ぶれが揃つて一升追加する
留置場の顔悪人と限らない

サヨナラのグラスに隠す淡い恋
見え見えの顔を隠して尻を出す
寒い朝乳配る子の幸祈る

氣ぶくれて寒さは更に身にこたえ
熱いもの出して寒さを忘れさせ
真心にふれて茶漬けがうまくなる

お茶づけになって幹事の役が済み
ハワイ川柳ウイロー社 市岡 暁舟

一文無しが家主の陰口触れまわり
陰口を喋る不逞の睨み顔
陰口を言わねばすまぬ無情人

陰口の最中に本人戻つてき
陰口に嘘がまじつて太くなり
陰口も聞こえてこなきや知らぬ顔

陰口を相互慎しむ嫁姑
呑み過ぎが陰口の輪を捻げ

志洋 繁男 哲朗 昭子 みのる 麻雄 和美 雅美 和子 米朝 越山

喋るだけ喋り陰口の蓋をする
陰口はどうあろうとも子沢山
川柳ねやがわ 高田 博泉

陽子女 暁舟 撰子 婦美子 創吾 松庄 求芽 勝美 眉水 正彦 とし 章

精いっぱい生きる涙はラムネ色
海干が甘い一笑にした図面
ままごとのごはんにした花盗人
いたずらがすぎで犯人よく眠り
大の行くままに合せている散歩
甘いマスクに凶暴な牙がある
弁護士が脱税誰か弁護する
健康な柱に再婚して代える
宝くじ甘い考えだと思つ

明代 頂留子 吉之助 亜也子 博泉 亜成 右近 亜鈍 麗水 鼓城 三千子 敬山 柳宏子 あいき 小路 薫風

茶柱が立たぬと箸でたたせてる
甘い甘い夢四千万の宝くじ
大国になって一億甘え合い
酒呑と杯のさばきで見破られ
遊客の興亡見据えて床柱
あんみつのかきまざる二人です
百点を見せると甘い母になる
寒くなり冬の遊びがはやり出す
犯人のタイプ打つ音なり止まぬ
雪解水春は生命を得て走る
ビールスをまいてるのは皆勤者
茶柱によしとひと言立ち上がり
心眼はとろり六十路もなれば越え
犯人は貰った事ないチョコレート
野球帽あれからやめたおとうさん
スピードの神様亀に味方する
暖冬に北風出番すぎがない
にわか雨だんだん甘くなる二人
嘘を言う人に私が顔を伏せ
鼻柱折られて男眼鏡拭く
波風に責任はない床柱
スピードでいつも負けてる口喧嘩
私服見てどこかで犯人あざ笑う
犯人の涙は母へ懺悔する
スピードを上げちゃいけない砂時計
なにもかも聞いてしまった床柱
イヤリング受話器の秘密聞かされる
点滴をじつと見詰める四つ目の

虹 宵 牛

晴風 三郎

大仏さんの柱くぐると春になる
背を向けて犯人チユーハイ飲んでる
今の目を覚ますであらう甘い読み
あれがとれたスピード見直され
肩書が来ると頼りない柱
柱にはなれぬ柳のつまようじ
雑巾を知らない艶の床柱
番号に悲喜ある日なり風は春

白汀報 敏明 ヒデ子 秀穂 悦良 世似 鈴江 清泉 かつ子 笑子 智重子 英子 侑正

房二 雅二 ひか平 文平 百合子 エキオ 越山

わかれあゆ川柳会 小砂

白紙に与選しました勝ちました
日記帖とかく白紙で居りたがり
見込み違い姑そろそろ角を出し
コアラ様からカギをかけて寝る
灰色が白紙に化けたい香を焚く
なるほどに見込んだ人で裏切られぬ
見込まれることの怖さがピンと来ず
神様の見込み違いか嫁き遅れ
地獄まで見込んだからには従っていく
腹の底のぞいたおまえも共犯者
答案を白紙で出した偉い旧友
聖き夜しばし白紙に塗り直し
ドラマなら見込み違いですむところ

わかれあゆ川柳会 小砂

白汀報 敏明 ヒデ子 秀穂 悦良 世似 鈴江 清泉 かつ子 笑子 智重子 英子 侑正

墨ボトリ白紙は元に戻らない
白紙には何を書くかと俺が春
白紙一ひら官姓名の桐の箱
不透明な噂けちらす春の雷
修羅こえて越えと白紙に渡き上り
海峡へ見込み違いの穴を掘り

尼崎いくしま川柳会 角野かず子報

裏町の空気が動く救急車
一行に望みをつなぐ尋ね人
橋かかる島へ戻ってわかめ干す
ネクタイに視線うつしてからの嘘
思うことすること多く日々楽し
拾い屋に哲学があるコップ酒
ビクターの犬が考えこむ寒い町
低い山松はつくりがたとある
斜陽族そんなことばの桜桃忌
御飯粒拾うて孫に叱られる
唐突な話で涙をかけてみる
あやまりにゆく日は低い靴にする
声低く落とすと動く黒い金
ひとりにも馴れて一人をおもいやる
水かけ不動乾くまもない願いごと
泣きやまぬ孫の主張がわからない
秘めごとを斜線で印すカレンダー
嫌われていると団地の犬知らず
ねんねこの男ホカホカ買うてゆく
共稼ぎ始めて距離が消えました
冷やかしがまさかテレビに映るとは
スカタンな夫婦で路離を感じない
去ってゆく女のメモを握りしめ
ねぎらいを忘れパトンを受けた悔い

歳 栄 輝 水 美 榮 民 子 白 汀 正 一 歌 子 か ね 子 か ず み と き お 礼 子 水 声 紫 香 伊 三 郎 伊 三 郎 伊 三 郎 牧 郎 牧 郎 は じ 芽 晴 子 年 代 一 郎 郁 栄 定 人 子 み ち 子 保 蔵 美 代 子 佳 秋 玉 子 静 江

テレビ音高いと鬼が低くする
風見鶏低い風には回らない
角刈りをしていている方が女性です
優勝へ敵も味方も泣いている
大阪城の梅林の香は客を待つ
恒例の三笠の山が焼かれている
握る手の小さくなって老いる母
化けかいた下手な女の泣きばくろ
泣くまいと耐えて羅漢に会いにゆく
東大阪川柳同好会 斉藤三十四報
アンケート僅かな粗品に期待する
アンケート書くとボールペンをくれ
建前と本音の違うアンケート
入場無料出口で待つてゐるアンケート
出鱈目も集まればよいアンケート
他所者が町長罷免のアンケート
地下足袋をはくと縁ないアンケート
アンケート農を継ぐ子が見当らず
アンケート時の政府は中ぐらい
昔ならスパイだなとアンケート
アンケート支持率党の自画自賛
無駄だとは思いつつ書くアンケート
いいかげんな答えも混じるアンケート
商魂が智慧を引き出すアンケート
主催者も期待してないアンケート
どこかで握りつぶされていたアンケート
アンケート庶民の街のむしろ旗
無記名の気やすさ本音のぞかせる
アンケートからセールのぞかれる
Y・F・C柳壇 人見 翠記報

す え よ し を 幸 子 幸 子 貞 子 常 子 幸 次 郎 君 子 良 征 春 子 綾 珠 蘭 愛 論 度 良 京 慶 三 柳 影 喜 風 弘 生 勝 美 孤 舟 律 子 章 久 雀 踊 子 信 治 美 子 柳 宏 子 翠 記

はんなりと櫓をくぐる初芝居
どの国の料理かわからぬ味に馴れ
上向いた鼻がよく似た孫が出来
鼻ぐすりちとまきすぎで命とり
病院の朝はナースの私語であけ
陛下の目に雑草という草はない
南大阪川柳会 中川 滋雀報
紙風船楽観的な風が好き
楽観をしてみます妻が蓄めてます
井の中の蛙楽観しています
ささやかな楽観年金ついでます
衣食住足りて楽観せぬ古老
楽観論不安を持たぬわけでない
楽観させた言葉がワナだった
楽観をするから亀が先を越す
楽観は禁物絵馬に願ひ込め
繁栄の裏で良心やせていく
嘘一つ弥勒菩薩が眩しくて
良心を探しています駅の傘
マル優を越えて良心疼きだす
良心という名の重い支え石
斜めから良心を見ている出来心
俺一人ぐらいと良心負けて居る
ルンルンは大きなスキをのぞかせる
あなたなら手鍋さげてハモルルン
ルンと花屋で春がハモリ出す
恋してもルンルン行かぬ独りっ子
ルンルンになって噂の中に居る
ルンルンでお出かけ足が浮いている
最高にルンルン気分クスリ指
子も巣立ち湯の香ルンルンフルムン

節 子 絹 子 房 子 子 忍 千 里 慶 三 度 重 人 喜 風 文 秋 凡 九 郎 柳 伸 晴 風 隆 治 信 子 洋 子 只 士 章 久 節 子 蘭 恒 明 久 美 寿 美 綾 珠 柳 右 子 秋 子 鎮 彦 公 一

冷凍庫妻は安心してしまふ

真心もいっしょに冷凍しておこう

冷凍がとけると刺身になっていた

冷凍魚もどす板さん腕のうち

凍てついた詩が蟹工船にある

キオツケをしたままねてる冷凍魚

食べ残しだけ入ってる冷凍庫

冷凍の長寿法いずれ来るだろう

老眼のいくさを語るるとき燃える

反論をする時外す老眼鏡

素晴らしいように老眼鏡かける

老眼鏡いと息子が言い出した

老眼鏡かけたら明日が見えてくる

葉の花句会

高杉

蒔いただけ票になるとは限らない

ペアルックワインカラーの老夫婦

信じあう二人が蒔いた花の種

これからは流れもカラーも変わるだろう

素人だなど人參は芽を出さぬ

糸やなぎ明治の女が寄ってくる

旬の味色も活かして京料理

レオタード履いてもなれぬ柳腰

お遍路の肩にざんげの荷がきしむ

蒔いた種自分で拾う他はない

みな変りないかと遍路から電話

モノクロで美人の顔が出来上る

種を蒔く古い暦を大切に

柳の芽萌えてお不動さんの春

人情に包まれ路地は屋根続き

ねこ柳牧人さんはもう居ない

新入社カラーに染まぬのが一人

智子

芙佐女

頂留子

勝美

千代三

円女

房子

雅風

滋雀

楓楽

白兔

千梢

善信

鬼遊報

昭子

三男

山久

一

雅風

枯梢

勝美

蕉露

春蘭

柳宏子

章

武庫坊

雀踊子

年代

射月芳

糸葉

鬼遊

遍路する親娘夜千しの白を着る

幽霊のへまに舞台の柳ゆれ

八起きめのカラーははでな方にする

蒔き終った夫婦の指は美しい

猫やなぎ亡母を忘れぬ花簪

傾いた屋根だが陽なたに向いている

団体のバス魂のない遍路

ライバルも同じカラーが好きという

岸和田川柳会

植山

テレビかけて内職の手は確かです

我が命ちめてまでもと祈る母

献血へ熱意の友の列ができ

はくとつ男の熱意にほだされて

よく笑う花嫁さんで安堵する

花嫁へ父懸命に笑いかける

花嫁の涙が今日も星が降る

薄い縁胸搔きむしる水子像

許されてからが本当の試練です

揺れ動く乙女心はチョコレート

えりまきだコアラだ今度はワールパー

なんとなく頼りにしてる守り札

又あしたの母の居る子は馳けて行く

柿右衛門の愛した彩で夕陽落ち

春雷が轟きニュースは梅だより

張りつめた寒さゆるめる春風

子と妥協する頃合いを見計らい

征服というニッポンのいやな文字

翠洋会

中西兼治郎報

ギャルが泣く螢の光窓の雪

町角のポストへかわりないくらし

冬葉

幸生

頂留子

美幸

柳伸

悦郎

弥生

栗

武助報

さよ子

富志子

希久志

勝晴

樂天

佳生

礼子

一二三

甘平

幸代

寿美子

ゆづる

狸村

武助

ひで

こう

射月芳

白光子

操子

登志実

宏子

旧姓で呼び止められる里の町

諭されて少女の涙悔い深し

町名変更なのにわの昔消えてゆき

長い年忘れもあつて生きられる

この町に角栄タイプ出んかいな

町なかに村ありその名映画村

駅前はずつきりしたが味が消え

下町で尋ねる家がすぐわかり

仕込まれた猿の仕事をわらえるか

町中を避けて老後を土に生き

もくせい川柳会

田中

席を立ちそつと袖引くあたたかさ

あたたかい人になれよと父が言う

あたたかい人の周りは子らが群れ

あたたかい言葉で左遷迎えられ

あたたかい言葉は犬も知っている

ともかくも試験のすんだ日のぬくさ

姉さんの婿になる人かわいそう

喧嘩して姉の順から叱られる

切れ味は抜群夫の研ぎ加減

小包の紐は切らせぬ明治もの

腹立てたらしい女房の切り口上

手のうちは見えぬが切札ありそう

切れそうで切れぬ夫婦の錆びた愛

泣けそうになつて玉葱切りかける

緑切った夫婦はつたり動物園

旅三日戻れば咲いてる沈丁花

ストレスのないのが一人よくしゃべり

捨てられた子猫にそそぐ春の雨

大物になるつもりない紙バグ

啓蟄も過ぎた毛糸のシャツ脱ごう

良江

照子

みつ子

綾子

いつを

兼治郎

光子

鬼遊

風童

大仙

正坊報

賀代

千恵子

房子

よし子

薫風

寿美子

博史

慶子

美祢子

富子

隆

しず

福一

英子

春子

明

きく子

正坊

登志美

裏窓を開けて去り行く人を追う

川柳はびきの

塩満

春の音聞幕近しプロ野球

山茶花の垣根を染めて花落ちる

春を生む生む苦しみか春風

観梅に茶店の甘酒吹きよせる

欲捨てた時が仏の顔になる

大雪を旱魃地帯に恵みまし

或る日ふと凶器にもなるガムテープ

未練なく師匠の鉄花を切る

聖牛と名付けて床に飾る牛

お水取り塀を曲つた春の音

吊橋を渡り女の未練去る

ねこやなま春のページをあけている

暖房の部屋で冷えてる家計簿

おだてられO型又も世話役に

ビル街に頑張っている一軒家

お陽さまに日曜主婦ははげまされ

ゲートボールはほとんど出来ぬ一徹さ

五十路で夫婦の胸はラムネ色

星空へ話かけている孤独

東大京どちらにしますと夢の中

あの山の彼方馬の赤いお湯

逃げ口をふさげば横に穴があき

家計簿に暮らしの知恵をほめられる

黒を黒と言うて女の自立心

悔いのない人生明日も球を投げ

誕生の宴妻と娘と嫁の味

風の神暴れてほしい道修町

コップ酒車窓の富士は顔馴染み

いい旅は妻が素直になつて

紫香

敏報

蛙声

三千代

昇

繁男

司

徳子

淑子

隆

優

昭子

末一

阿衣

義一

満州子

重樹

弘子

久治

忠宏

葉子

伴子

一屯

美代子

隆二

寿美

只士

白水

憲太郎

吐来

与呂志

笑い話売りに来ました春の風

亡き母のテープの声と間違われ

小遣いの一％アップがまだ言えぬ

恐妻家猪口一杯で席を立ち

出航のテープ伸びきり妻走る

忙中閑デートの時間はすぐ出来る

城北川柳会

神夏磯道子報

重い口やおら開けば座が縮り

印鑑の重さ知りつつ押す書類

新人と思えぬ程の良い度胸

干物に太陽味しみて居る

重い石上げれば嬉し母の味

重い口開いて男急所衝く

新人は先ず飲む事を教えられ

新人のひとときわづなユニホーム

置き花の一つ一つにあるなさけ

二の足を踏む無心への重い足

新人の正論冷たい風当り

重い足引きすりながら金策に

縁日で買う芸術の鉛細工

母が逝き兄弟の絆切れかかる

地球より重い命を初ちあぐね

横綱の夢新人の持ち手俵

重い雪押し上げ顔出す路のとう

歌は駄目謡曲だけで場を濁す

ひと言の重さ証人席に立つ

新人の頃の気負いがなつかしい

重い腰上げて仲買買つて出る

傷のある坊主頭で卒業す

孫抱けばしばし見ぬ間に重くなり

バスガイド新人らしさが愛らしい

胡村

千代子

さとし

シメ子

石橋義一

敏

喜代子

山久

炉斎

寿美礼

八重

千世子

倫子

見世

佐津乃

テルミ

ふみ

午郎

達子

悟郎

麻一

公一

久留美

正之

満津子

節子

綾珠

茂一郎

晴子

泰世

税務署へ向う申告重い足

新人の目はライバルをすぐ見付け

山口へおいでませとはいひ言

それぞれの地位に重たい宮仕え

新人が時に意表を衝く意見

大安へ嬉しい重さの市場籠

素うどんの湯気のまわりは隙だらけ

手取りを忘れた母から子が離れ

裏切られ重さを知った保証印

再会は名前忘れたまま終り

たまたまに重い財布の梯子酒

自己嫌悪重い心を覗かせる

束の間のゆとりは重い小銭入れ

川柳泉尾

吉川

メーターが気になり座席へ落ちつかず

座つたら仁王はクビになるのかも

妻の座にとっふりただの女です

お見合の話正座できかされる

卒業はしていませんが実力者

人格を磨くに卒業などはない

飲む打つ買う卒業して孫の守

お下りの兄のセーターはめて着せ

何事もなかったようにセーター編む

セーターの胸弾ませる春の毬

雨よ降れ光る新芽の出番です

赤信号子に諭されてじっと待つ

京千菓子さんしゅの花が添えられて

三幸川柳教室

桜井

春風が閉じた心の戸を叩く

春風が吹けば旅行のプラン練る

春風駘蕩そんな余生を続けたい

星斗

弘生

繁子

ただし

右近

笑風

婦美子

登志代

道子

静子

新一郎

静歩

圭介

文報

敏

美代子

シメ子

シマ子

昭子

白水

多和子

恭子

寿美

弘子

伴子

道子

千秀報

志津子

富子

愛子

春風に慌ててシェーブアップなど
母病みて春風みたいな医師に逢う
ゆるやかにこいてブランコもの足らず
哀しみを乗せるとブランコ軋みだす
過去の絵の中でぶらんこ揺れてます
告白をされてブランコ軋ませる
陽だまりで造花に埋もれ手内職
古ぼけた造花にタぶる昨日今日
自己主張しない造花ですぐ飽かれ
日もすがら軍艦マーチ聞く花輪
造花より野に咲く花が柄にあい
貸し借りのない兄弟で仲が良い
犬の仔が運命分けてもらわれる
かけつけた妹待つてたように息
耐えるんだ叱る兄貴の涙声
孤児に春児が覚えていたやけど
駒つなぎ川柳会 里

ふく代 三千子 幸子 靖子 智水庵 かなめ 静 文子 孝子 邦郎 敏子 当代 千枝子 隆行 千秀 弘生 山久 文秋 萬美 邦晴 凡九郎 円女 射月芳 喜風 国公 翠度 覚然坊

娘の縁談父は無口な方がよい
無茶苦茶やなど大盃を嬉しがり
見覚えを手繰ると悔いに突当り
ニューメデア時代 鬼門裏鬼門
うわさから大胆になつてゆく二人
口に戸をたてても漏れるすきま風
へらず口たたいて酒が入つてゐる
多情仏心私は忘れていたんだが
丑寅の神は美人の絵がお好き
ジャンケンで何でも決めてゐる二人
言い過ぎを詫びてゐるのも同じ口
仲人の口にわたしを賭けてみる
無茶がなくなり涙脆くなった友
ふるさとの坂で見覚えある女
気の弱い男に鬼門多すぎる
白粉をおとして二人で小あきない
覆水は盆にかえらぬ寒い口
底抜けに楽しい場所がある鬼門
無茶苦茶に淋しい時は食べに行く
炎えるもの秘めて二人のさりげなく
口少しまげて負け犬風に居る
鬼門から届く小さな玉手箱
見覚えでくれたか笑顔なすかしい
或る時は無茶でも通す多数決
ペアルックヒップゆれてるのが女
いつからか父そつくりの口をきき
ご両人などと言われる仲になり
鬼門には近づいてくる青い鳥
どっちにも見覚え他人の顔つくる
無茶をする裏をのぞかれまいとする
口下手が二人残つたティールーム

重人 恭太 甘平 楓楽 頂留子 善信 笛生 雀踊子 美津枝 智子 幸生 一二三 白兔 美幸 素灯 すみ子 美房 規不風 凡子 真砂 月子 冬葉 花仔 一高 千代三 柳宏子 柳笑 天笑 浩一郎 恒明 柳伸

酔つていた口が約束してしまい
ペン皿の会 小出 智子報
傘の庇護女は甘えてばかりいる
夏の絵の中に優しい母の傘
開会式傘さして待つ甲子園
友達が心配だからバスに乗る
これ以上当てには出来ぬ母の傘
終電車傘がぼつんと忘れられ
家までを二人で歩く迎え傘
ご挨拶考えてから傘を閉じ
夫を迎える傘は一本あればよい
柔やわと春の日差しがバラの芽に
無理に傘持たせて少し悔いてゐる
富柳会 藤田 泰子報
欲のある間はまだまだ大丈夫
その先を読んでは欲を持ち替える
欲のない男で鼻緒切れたまま
恋人の自慢なんか聞けるかい
自慢した子にまた積木くずされる
宿帳にまさか他人と書けますか
花街で会つたは他人の空似です
欲のないふりして廻す抽籤機
表彰状自慢で欲のない暮し
その先はどんどん飛躍する自慢
それぞれの自慢は遠い過去になる
他人さんと思えばおさまる腹の虫
他人には只の石なり父の墓
世の中の美人他人の気がしない
三文判ボンと今から他人です
欲一つ捨てて帰らぬ山の宿
欲張りな蟻を待つて孤独な日

小 五百子 藤子 いく子 好子 妙子 節子 年子 勝子 智子 千代女 美代 岳人 美房 文次 莊次 美緒 富久一 維久子 与呂志 花梢 章久 山久 弘優 森生

同じなら大きい方ににぎりめし

にた川柳会

西村

泰子
早苗報

気の毒な顔して父ちゃん灸に耐え

一杯のお茶で待たせる応接間

受験子の好みとらえて市場かこ

せせらぎの水音春をつれてくる

気休めも薬効のうち強壯剤

花嫁が笑い袋を持つて来た

若者もふつと弱音を吐く季節

小さな欲二人で二枚のパンを焼く

スイッチをブツン子供に悪いシーン

別れたいの口実がみつからぬ

虫歯まで這い出して来る春日和

みくびったこの頃流行る風邪を引き

スタートは丸裸だった引揚者

憧れの人をバッグに持ち歩く

水とめて今日の厨の終りとす

病には勝てず田中の舞台裏

手厳しいシッペ返しも愛と言う

医者がえて生き続けたい彩を溶く

はつといっておこう何時かは笑う顔

打吹川柳会

奥谷

考えを預け立場をうまく逃げ

信じ合う立場の人に裏切られ

意志弱く悪い立場を利用され

内縁の立場忘れて世話をやく

親と子の立場が違い噛み合わず

立場ゆえ耳をふさいで拗ねてみる

立場上止むを得ないと首を振る

理解をも求める立場兄の嫁

影法師だけは立場を理解する
三世代立場守って丸く住み
売る方の身になり選るのに気を使い
嫁と親どっちの愚痴も聞く立場
好き嫌いなしの立場で和を保ち
立場からきっぱり言えぬこともある
好きなこと言えぬ立場で語尾濁し
労と資で同じ世相が別に見え
立場上肩寄せ合せて耐える地位
立場上見えて見ぬ振りへ歯がしみる
河内
月子報

紫映
節子
高代
八太朗
規仔
美智子
佳女
梅朗
弘朗
雄々
甘平
東雲
花仔
登志代
一一三
柳宏子
天笑
翠公
太茂津
雀踊子
笑痴
左久良
栗
半銭
金三郎
藻介
かりん
小雪
年代
妻子

飽食の皿から聞いた天の声
火花裂けて天はますます深くなる
慌てものの風船天へ真つ先に
ハイヒール一生履けぬ人と添い
長老の眼がうるむとき乾くとき
長老の油断陽溜りでけつまずき
長老も四人揃うと碑を混ぜ
長老の眼は居眠りか冥想か
長老が座ると絵になる違い棚
春の木もぬくい話に飢えている
饒舌な木が騒ぎ出す森は闇
木の股に座ると仙人めいてくる
村はずれの一本杉にある掟
流水よ海に疲れた男の死
口笛を吹くと木馬が走り出す
よく笑う木がありそれを妻と呼ぶ
八の字に正門開けて嫁を待つ
票田は八方美人で稼ぎます
尺八の中をいっぺん覗きたい
八人目の敵は鏡の中にいる
八時間白衣をつけて天使なり
八方美人我が影だけはついてくる
嘘つきの男にさせる八重桜
玩具の汽車被れて8の字に走る
八月の事は漫画の本にない
八時間寝る凡人のしたたかさ
尼崎尾浜川柳会
春城武庫坊報

醉月
素灯
眉水
幸
草春
雄次郎
泰子
昌代
たつお
峰越
景子
英比古
幹齊
武庫坊
狂虎
草生
秋風
千万子
律子
青舟
ミツエ
重比呂
耕花
薫風
いわお
十四郎
すみ
江美

家出した猫にも深いわけがある
老眼鏡探せば妻がかけておる
開店をしたと電柱呼んでいる
糞虫も事情があつてブラさがる
皺だけが深い事情を知っている
カナリヤに歌を忘れた訳を問う
これ以上飲めば毒だと瓶がいう
定年で大黒柱や骨細り
風船がはじめて知った広い空
床柱前には猫が坐つてゐる
赤ん坊も事情があつて泣いてます
マンションに住んで柱は目につかず
事情など目の旦那に通じない
涙拭く女悲劇と限らない
ひれ酒の酔いもわびしや結石動く
事情など聞かずとわかる娘の涙

西宮北口川柳会

妹尾

春江報

牧郎 歌子 紫香 弘治 貞吉 武庫坊 貞男 貞男 佳秋 良征 清太 昌子 眉水 静子 かすみ 園歩 白溪子 廉 保蔵 三男 よ志子 飛鳥 散歩 英子 笑女 春子

家庭菜園仏の花も二三株
園芸が趣味で仏壇枯らさない
貸農園一石二鳥畝の汗
二坪を借りて園芸夢を植え
定年の無聊を庭がなぐさめる
食べるのがおいしいトマトが二つ出来
盆栽は妻に委せて粗大ゴミ
今日生きたたしかな証挿木する
淡雪が絵になる庭の実南天
春の灯に教師が淡い恋に泣く
コヒ飲む窓に淡雪降りつづけ
手鏡の裏に潜ます淡い思慕
告白は淡いピンクの灯の下で
故郷の山濃淡の詩情もち
淡い恋たしかめもせず続いている
月の窓淡い想いを溜めている
淡雪に時効の傷がまた疼く
放課後のベンチに淡い愛が待つ
独り住む母を気づかう淡い雪
つくしんは淡い記憶の中で伸び
カーテンの裾に見つけた淡い春
角のないオニが勘定取りにくる
飢える子の顔が浮かんだ皿の数
ホコリほどたまれば楽し金の山
記念樹も伸びて我が家は平和です
宅急便すれば孫達寄ってくる
落とした喜ぶ顔が見たから
冬木立鳩のキッスを見ていたり
餅のかび削って温もる八分粥
炊事も磨き込まれて人嫌い
おじいさんと呼ばれ若い気が萎える

鼓城 よし津 百合子 江美 文平 義三郎 伊三郎 婦美子 米朝 良征 墮駄 文平 武庫坊 一郎 紀雄 礼子 冬子 正一 春蘭 いわゑ 年代 幽香 幸子 すみれ 山久 泰世 美津枝 杜的 志津 千秀 弘生

ライバルと少しちがった昇り口
逢うまいと思えば電話かけてくる
嫁の鏡私の顔を写して
外食はおかめうどんで主婦三人
時代ずれてよし信念の男下駄
びつくり箱にひととき自由うばわれる
春の峰高圧線も眠くなる
孫の手が虹を掴んで放さない
母の好きな女と旅の話など
自画像のか細い線が恥ずかしい
ひな飾るいつか少女の顔をして
冷え性な女でベンチさけたがる
流し雛鳥を離れぬ母が居る
人妻と別れた辻にあるポスト
川柳泉尾(追加分)
姑となる日の慶びの女紋

照子 君江 春江 好江 光代 宏子 求芽 高子 明代 みつ子 水声 作二郎 紫香 寿美

『夜市川柳』募集

第12回 「まじない」 西尾 栞選

締切・5月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

●募 集●

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)
「壁」 小谷 仙山選
「空」 氏林 洋敏選
「荷物」 若宮 武雄選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)
「歯」 林野 甦光選
「丘」 花田 たけ志選
「氣」 森脇 善太選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔・柳箋を(使用ください)。

本社5月句会

日時 五月七日(火) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町二丁目一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車2番出口(交差点西南角)

兼題 「神」 「おはなし」
「知恵」 「贈る」 「見本」
席題 二題 当日発表
会費 五百円

板尾 岳人 西山 幸選 内海 幸選 児島 与志選 黒川 紫香選

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

6月の兼題 「舌」 「過剰」
「参加」 「続」

6月の本社句会は7日(金)

本社句会の日どり

5月の常任理事会は1日(水)

7月句会(路郎忌) …7月8日(月)
8月句会……………8月7日(水)
9月句会……………9月7日(土)
10月句会(二賞発表) 10月6日(日)
11月句会……………11月7日(木)
12月句会……………12月6日(金)

<61年>

1月句会……………1月7日(火)
2月句会……………2月7日(金)

〒545

発行所 川柳塔社

電話 (二六三六) 一六九一四番
振替口座大阪 813336八番

大阪市阿倍野区三木町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

昭和六十年四月二十五日印刷
昭和六十年五月一日発行

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十年四月二十五日印刷
昭和六十年五月一日発行

編集後記

☆五月うるわしの言葉通りの
の明るい空の色だ。花明りの
の華やかな弥生の暮が降ろ
されたら、世界はうすみど
りに変わり、まさに風薫るの
候となる。私は、小学生の
とき、たちばな薫る朝風に
高く泳ぐや鯉のぼり、と胸
を張って歌ったのを忘れな
い。

☆麻生路郎の門下生で傑出
した第一の作家は須崎豆秋
であろう。豆秋さんの「大
阪弁の遺書」は朝日新聞の
特集に出て有名になった。

骨立てたまま二次会へつい
て行き、院長があかぬとい
うての独逸語で、が、作品の
双壁だと私は思うのだが、
葬式で会いほらいことおま
へんか、速やかな消えてし
まうと火事見舞、などが
真骨頂だと言う人もいる。

☆「雨」という題が出たら
雨の中を道頓堀辺りまで出
かけて作句した即物的写生
派だった。河豚を食べて手
足がしびれ、深夜、路郎居
へ「お別れ」にかけつけた

り、首筋へマスクをかけて
句会に現れたのは、後頭部
に瘍が出来たからで、余人
には真似の出来ぬ人柄でも
あった。命日は五月四日、
葬儀は翌日のこどもの日で
門毎に立つ日の丸の旗に送
られて進む棺は、まことに
豆秋さん的であった。
☆郡上八幡への川柳の旅も
たのしい旅になることだろ
う。川柳人の温かい交歓に
優るものはない。

☆赤木和子さんが、立て続
けに紋太賞と、ときせん賞
準賞を獲得された。豆秋作
品を川柳雑誌から抜粋清記
して貰ったのも彼女で、そ
うして隠れた努力が、いつ
の間にか川柳作家としての
自覚や発奮を促し、立派な
実を結ばせるのだらう。

☆川柳塔社では、編集部、
句会部、発送部にそれぞれ
新しいメンバーを迎え、若
返りを期して出発進出した
ので、ご期待下さい。
☆編集部へ長短交えて、
原稿が寄せられるようにな
った。同人、誌友皆さんの
消息、句会だよりなどお待

ちしています。

☆九月の大会まであと五カ
月です。
(薫)

▼ゲートボールが流行して
いる。流行の担い手は概ね
高年層である。高年層が流
行の担い手になったことは
今まで、ほとんどなく、こ
れも太平の世の現れと見る
べきか。ゲートボールをや
っている友人から「あれは
いじわるゲームだ」と聞い
た。その時は軽く聞き流し
ていた。ゲームのルールは
よく知らないが、相手のコ
ースを邪魔したり、邪魔し
た球を弾き出したり、見て
いると正にその通りのよう
である。

▼戦後の自由化と高度成長
に伴い、家族制度が崩壊し
て核家族へと移行したので
昔ほどの姑の嫁いびりはな
いが今も残存している。嫁
をいびるにも遠く離れてい
ては気合のない鈍る。そんな
やり場のない気持と、健康
のための運動が結びついて
、燎原の火の如く日本全
国の高年層を駆り立てたの
ではなからうか。

▼大相撲よりプロ野球の方が
好きだった最近逆になっ
てきた。大相撲が面白
くなくて、何故プロ野球が
面白いのか。これは観る者
の好みと、個人プレーとチ
ームプレーとの違いにもあ
るが、栄光を目指す者とギ
ャラを気にする者との目的
意識の精神的誤謬が勝負な
り試合を、面白く面白くも
くもしているようだ。

▼金にならない川柳だが、
もしも川柳が金になる日が
あるとすればおそろしいこ
とである。金になる川柳な
んか思わないことだ。(き)

☆何となく、ふらりと本屋
に入ることがよくある。こ
れといふ買いたくある。こ
れとてない。気に入った本
があれば買ってもいい、ぐ
てらしい軽い気持、まあ早
いはなしが時間つぶしだ。

☆書店の棚の前に立つと
何かこう、むこうから、お
いでおいでという感じが手
招きしている本というのが
ある。と言ったのは三国一
朗氏だが、そんな達人の域
には程遠いこちらは、未熟

な猟犬よろしく、棚の前を
恰好な獲物を求めて、うろ
うろし、そうして面白そう
な本を見つけたと、製本や
装幀を調べ目次をべつと
あとかきなども読み、定価
を確かめ、さてどうするか
迷ったりするのである。
☆考えてみると本の愉しみ
というのは、読書の楽しみ
以外の、こういう本を買い
こきと自体に伴う楽しみが
かなりの部分を占めている
ように思える。そしてこれは
当然のことながら直接本屋
に足を運ばないと味わえな
い。(だから書店を通じて
出版元から取寄せするという
方法はどうも気乗りしない
のです。)

☆ところで昨近は気に入
った本があると迷わずに買
っておかないと、すぐ店頭か
ら消えてしまう。そう考え
つい衝動買いをしていたら
気がついてみると、いつ読
めるあてのない本がふえる
一方で、これはいいかと
反省しつつ、また今日も
一冊買ってしまった。

(史)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和六十年四月二十五日・印刷
昭和六十年五月一日發行（毎月一日發行）

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

投稿規定

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)・投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈

投稿先

〒五三〇・大阪市北区中之島三十二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
京北高島屋百貨店
京橋高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんは新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大阪・なんば



TEL 641-0551